

史 跡

上之国勝山館跡 XV

— 平成 5 年度 発掘調査環境整備事業概報 —



1994・3

上ノ国町教育委員会

史 跡

上之国勝山館跡 XV

—平成5年度発掘調査環境整備事業概報—

1994・3

上ノ国町教育委員会

序

史跡上之国勝山館跡環境整備事業は、昭和54年の開始以来今年で15年を経過することになり、この間の調査で百数十年に亘る館の存続と各種の遺構・遺物を知り得るところとなりました。

今年度は第二平坦面北東中央部を中心に遺構確認調査を実施しました。その結果、館中央部を走る旧道跡、門跡と思われる大型柱穴跡など当時の館内の様子が窺われる発見がありました。

本年度の事業の推進にあたり、文化庁記念物課をはじめとする関係各機関の諸先生、勝山館跡調査研究専門員としてご指導をお願いしている朝尾直弘、網野善彦、石井進、榎森進、仲野浩の諸先生には、ご多忙中のところ、多大なご指導を賜りました。厚く御礼申し上げます。

本事業は史跡整備事業としてスタートしたところですが、ここ3年間は館主体部の遺構確認調査を行ってきました。しかし、なお館内の様子は明らかとなし得ません。そのため文化庁から、更に今後数年は遺構確認調査に重点を置くようにとの方針が示されました。この方針をうけて、近い将来私どもが希望している本格的な史跡の整備を確かなものにするためにさらなる努力を重ねる所存であります。

史跡上之国勝山館跡は、昨年11月に文化財保護審議会から既に史跡に指定されている花沢館跡と未指定でありました洲崎館跡をあわせて史跡上之国館跡として一括指定の答申がなされました。

今後もこの事業を継続・推進するとともに、三館の一括指定や文化庁の方針を踏まえた新しい視点にたった計画を検討することが必要と思うところであります。関係各機関・諸先生方には、なお一層のご指導、御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成6年3月

北海道桧山郡上ノ国町教育委員会

教育長 和泉定夫

本文目次

序

本文目次／挿図目次／表目次／写真図版目次

例言／引用参考文献

I 調査の概要.....	1
II 遺構確認調査.....	4
1 調査目的.....	4
2 検出遺構と出土遺物.....	4
(1) 位置・概要.....	4
(2) 屋序.....	4
(3) 溝跡と掘立柱建物跡.....	4
(4) 柱列.....	27
(5) 壑穴建物跡・土壤.....	27
a 壑穴建物跡.....	27
b 土壤.....	36
(6) 旧道跡・大型柱穴・柵列跡.....	42
(7) 出土遺物の概要.....	44
III 小括.....	51
IV 保存処理.....	57
V 上之国勝山館跡出土鉄器・鉄塊・鉄滓の 金属学的解析(2).....	58
VI 史跡上之国勝山館跡出土銅製品等の金属 組成について.....	64
VII まとめ.....	67

挿図目次

第1図 遺跡地形図・調査区位置図.....	2
第2図 調査区範囲図.....	3
第3図 調査区土層堆積図.....	5
第4図 調査区遺構配置図.....	11
第5図 第1号建物跡想定図.....	14
第6図 第2号建物跡想定図.....	15
第7図 第3号建物跡想定図.....	16
第8図 第4号建物跡想定図.....	17
第9図 第5号建物跡想定図.....	18
第10図 第6号建物跡想定図.....	19
第11図 第7号建物跡想定図.....	20
第12図 第8号建物跡想定図.....	21
第13図 第9号建物跡想定図.....	23
第14図 第10号建物跡想定図.....	24
第15図 第11号建物跡想定図.....	25
第16図 第12号建物跡想定図.....	26

第17図 第49、50号壘穴遺構・土壤5平面図.....	29
第18図 第1、53号壘穴遺構平面図.....	32
第19図 第51、52、55号壘穴遺構平面図.....	33
第20図 壘穴遺構他出土遺物.....	36
第21図 土壤3平面図他.....	37
第22図 土壤23平面図他.....	39
第23図 土壤23出土遺物.....	40
第24図 大型柱穴平面図.....	43
第25図 調査区出土遺物(陶磁器).....	45
第26図 調査区出土遺物(金属製品).....	46
第27図 調査区出土遺物(石製品他).....	47
第28図 勝山館跡過年度出土骨角器.....	54

表目次

表1 18K11、12、13、14、15南北セクション 東壁土層〈A～A'〉.....	7
表2 18L14、15南北セクション東壁土層 〈B～B'〉.....	7
表3 18K2、3、4、5、18J1南北セクション シヨン東壁土層〈C～C'〉.....	7
表4 17K17、18、19、20南北セクション東 壁土層〈D～D'〉.....	8
表5 17K17南北セクション東壁土層 〈E～E'〉.....	9
表6 17K16、21東西セクション南壁土層 〈F～F'〉.....	9
表7 18K1、6、11、16東西セクション南 壁土層〈F'～F''〉.....	9
表8 17L25壘穴49南北セクション西壁土層 〈SPA～SPA'〉.....	28
表9 17L20、25壘穴40、50東西セクション 北壁土層〈SPD～SPD'〉.....	28
表10 17L19、20壘穴50東西セクション北 壁土層〈SPC～SPC'〉.....	30
表11 17L19、20壘穴50南北セクション東 壁土層〈SPB～SPB'〉.....	30
表12 17L17壘穴53南北セクション西壁土層 〈SPA～A'〉.....	32
表13 17K17壘穴53東西セクション北壁土層 〈SPB～B'〉.....	32
表14 17K22、23壘穴51南北セクション西 壁土層〈SPA～SPA'〉.....	34
表15 17K6、17J1壘穴55南北セクション 東壁土層〈SPA～SPA'〉.....	34

表16	堅穴建物跡出土遺物一覧	35	PL.23	鉄滓試料マクロ、ミクロ組織他
表17	土壤3 出土遺物観察表	37	PL.24	鉄滓試料マクロ、ミクロ組織(2)
表18	土壤5 出土遺物一覧	38	PL.25	鉄滓試料No.1、部分2次電子像他
表19	17L25土壤5南北セクション西壁土層	38	PL.26	鉄滓試料No.2、部分2次電子像他
表20	17J1・17J2土壤23南壁土層堆積 <SPA~A'>	40	PL.27	鉄滓試料No.5、2次電子像他
表21	17J1・17J2土壤23出土遺物観察表 (陶磁器・鉄製品他)	41	PL.28	銅製品の金属組織と各元素の分布
表22	大型柱穴(P.1002)他出土遺物一覧	42	PL.29	銅製品の金属組織と各元素の分布②
表23	18K13東西セクション北壁土層 <SPA~A'>	44	PL.30	銅製品の金属組織と各元素の分布③
表24	出土遺物観察表(陶磁器・鉄製品・ 銅製品・砥石他)	49	PL.31	銅製品の金属組織と各元素の分布④
表25	出土遺物集計表1(陶磁器)	50		
表26	出土遺物集計表2(鉄製品他)	50		

附図 調査区遺構配置図

写真図版目次

PL.1	遺構検出状況
PL.2	遺構検出状況他
PL.3	T68鉤に見いだされた非金属介在物の EPMAによる元素濃度分布のカラーマッ プ
PL.4	銅鋳造遺構出土遺物・金属組織
PL.5	遺構検出状況
PL.6	遺構検出状況
PL.7	遺構検出状況
PL.8	遺構検出状況
PL.9	遺構検出状況
PL.10	遺構検出状況他
PL.11	遺構検出状況他
PL.12	遺構検出状況他
PL.13	旧道路他検出状況
PL.14	大型柱穴(門跡?)検出状況他
PL.15	遺物出土状況他
PL.16	出土遺物(陶磁器)
PL.17	出土遺物(鉄製品他)
PL.18	出土遺物(陶磁器他、第49・50・51・53・ 55号堅穴建物跡、土壤3・5・23出土)
PL.19	出土遺物(陶磁器他一溝3・4・6出土)
PL.20	保存処理完了遺物
PL.21	T68鉤 非金属介在物2次電子像他
PL.22	鉄鍋破片マクロ、ミクロ組織他

例　　言

1 本書は史跡上之国勝山館跡の平成5年度発掘調査及び環境整備事業について概要をまとめたものである。

2 本年度の発掘調査は次の体制でのぞんだ。

調査主体者 上ノ国町教育委員会

　　教育長 和泉 定夫

指導 上ノ国町文化財保護審議会特別委員
　　北海道大学教授 足連富士夫、文化学院講師 鈴木亘

同勝山館跡調査研究専門員 山形大学
教授仲野浩、東北学院大学教授 榎森進、
国立歴史民族博物館館長 石井進、神奈川
大学短期大学部教授 翁野善彦、京都大学
教授朝尾直弘

主管 上ノ国町教育委員会文化課 課長 金
子祐一、主事 笹浪甲衛

勝山館跡修景技術員（上ノ国町建設課課長）
　　山崎重任

発掘担当者 学芸員 松崎水穂

調査員 学芸員 斎藤邦典 佐藤一志

調査補助員 山崎洋子 笠谷奈智子 竹内江
　　美子 松本清、角田隆志 柳沼弥生 瞬原
　　滋高（富山大学）、渡辺真弓（トキワ松短期
　　大学）

作業員 浅原すみ 大谷弓子 奥寺京子 川
　　合冴子 笹浪竹志 佐藤恵子 杉村八重子
　　薄田百合子 住吉春子 竹内正章 出村喜
　　作 南部谷轍 沼沢国枝 松本津枝子 八
　　田揚子 若山正喜

保存処理作業員 木村洋子

3 本書の編集は松崎、斎藤、佐藤が協議の上松
崎が行った。

本書の作成はI、IIの土壤3・23を佐藤、
IVを斎藤、他を松崎の分担で行い、文末に
分担者を記した。

また、鉄器・鉄塊の金属学的解析を岩手
県立博物館赤沼英男、銅製品等の分析を京
都芸術短期大学内田俊秀の各氏にお願い申
し上げ、玉穂を頂戴することができたので、
V、VIとした。

尚、遺物観察表、集計表は山崎、土層の観
察表は竹内、山崎、笠谷、掘立柱建物跡の

想定は笠谷の各調査補助員が作成したもの
に基づいている。なお、表17、20、21、24（鉄
製品）は、佐藤の作成したものである。

4 採図の作成は担当者の指示により、補助員、
作業員が行った。採図中の方位は真北を示す。

5 土層の土色は「新版標準土色帖」（農林水産技
術会議事務局）を、遺物の色調名は「標準色彩
図表A」（日本色研事業株式会社）を用い、
目測で比定した。

6 本書の遺物写真は佐藤が撮影した。又、調査
時の写真は松崎、佐藤の撮影したものであり、
保存処理状況の写真は斎藤が撮影したもので
ある。

7 調査にあたっては次の関係機関と各位に多大
な御指導と御援助を賜った。

文化庁記念物課 加藤秀彦 服部英雄 岡村
道雄 松村恵司 坂井秀弥、北海道教育庁文
化課 木村尚俊 畑宏明 種市幸生 大沼忠
春、檜山教育局 伊賀治康、東京大学 宇田
川洋、北海道大学日本史学研究室、福島大學
工藤雅樹、中央学院大学 市村高男、富山大
学 宇野隆夫 前川要、京都大学埋蔵文化財
研究センター 五十川伸矢、京都大学国史学
研究室、京都芸術短期大学 内田俊秀、奈良
国立文化財研究所 千田剛道、北海道開拓記
念館 山田健 山田悟郎、八戸市博物館
佐々木浩一、岩手県立博物館 赤沼英男、東
京国立博物館 佐々木利和、東洋文庫 渡辺
兼庸、江戸東京博物館 斎藤慎一、國立歴史
民俗博物館 千田嘉博 小島道裕、京都國立
博物館 久保智康、国立民族学博物館 大塚
和義、北海道埋蔵文化財センター 越田賢一
郎、秋田県埋蔵文化財センター 富樫泰時、
秋田県教育庁 払田柵跡調査事務所 小玉準、
鶴福島県文化センター 飯村均、石川県立埋
蔵文化財センター 堀内光次郎、鶴富山県文
化振興財團 宮田進一、安土城郭調査研究所
小竹森直子、京都府埋蔵文化財調査研究セン
ター 伊野近富、鶴大阪文化財センター 坪
井清足 赤木克視 鈴木俊夫、兵庫県教育委
員会埋蔵文化財調査事務所 池田三男、余市
町教育委員会 宮宏明 青木誠、森町教育委

員会 藤田登、南茅部町教育委員会 阿部千春 福田裕二 小林貢、上磯町教育委員会 山本政俊 森靖裕、木古内町教育委員会 菅野文二 三上英則 木元豊、松前町教育委員会 久保泰、乙部町教育委員会、森広樹 仙庭晋一、浪岡町企画課 工藤清泰、秋田市教育委員会 菅原俊行、秋田城跡調査事務所 小松正夫 日野久、仙北町教育委員会 小西秀典、中条町教育委員会 水澤幸一、小田原市教育委員会 諸訪問順、近江八幡市教育委員会 岩崎直也、米原町教育委員会 中井均、

鈴京都市埋蔵文化財研究所 永田信一 堀内明博 山本雅和、川俣町教育委員会 高橋圭次、揖市教育委員会 鳩谷和彦、梯ハドソン 東洋鉄道貨幣研究所 増尾富房、妙見山麓遺跡調査会 神崎勝、地方史研究協議会、中世城郭研究会 三島正之、日本環境技術協会 松前鼎一、兵庫紙幣史編纂所 永井久美男、輪コロイドリサーチ 佐々木穂、片山清、大西英生

(順不同 教称略)

引用参考文献

- | | | |
|---|--|--|
| 燕形鉈頭とキテ 1925年 長谷部官人
人類学雑誌 第41巻第7号 | 1974年 HIROAKI OKADA/ATSUKO OKADA
アイヌのキテ(回転式鉈頭)の語系別—
形態分類と編年— 1976年 大塚和義
国立民族学博物館研究報告 1巻4号
南北アラスカ・アリューシャン列島における回転式鉈頭の型式学的研究 1977年 山浦清 | 文書II 1986年 金子浩昌・忍沢成視
ニオイチャシ跡 ボロモイチャシ跡 二
風谷遺跡 1986年 健北海道埋蔵文化
財センター |
| 先史学研究 1927年 長谷部官人
秋田叢書別集 菅江真澄集第5 あみし
のさへき 1932年 | 青苗遺跡発掘調査概報 1978年 奥尻
町・奥尻町教育委員会
奥尻青苗遺跡 國版編 1979年 南館
土木現業所・奥尻町教育委員会
瀬内田ナシタ跡発掘調査報告書 1980年
瀬内田教育委員会 | 北方狩猟民の考古学 1987年 前田潮
北方地域における開拓式鉈頭について(I)
1987年 宇田川洋 北海道考古学 第
23輯 |
| 燕形鉈頭叢録 1941年 甲野勇 古代文
化12-5 | ライコロ川口遺跡 1980年 東京大学
文学部考古学研究室・常呂研究室
ニゾ地の鉄 1983年 石附喜三男 日本
民俗文化体系 第3巻 稲と鉄=さま
ざまな王座の基盤= | アイヌ文化成立史 1988年 宇田川洋
物質資料からみたアイヌ文化の様相—ア
イヌ文化成立についての観察— 1988
年 石川直章 根室市博物館開設準備
室紀要 第2号 |
| モロ貝塚出土の骨角器 1955年 大場
利夫 北方文化研究報告 第10輯
上ノ国村 1956年 上ノ国村
北海道奥尻島遺跡調査概報 1956年 千
代筆 考古学雑誌 第41巻第2号
考古学ノート2 先史時代(II) 1957
年 江坂輝秀 | 世の鉄生産と流通 1983年 砂野善彦
講座・日本技術の社会史 第5巻 採
鉱と冶金 | 考古学ライブラリー-53 骨角器 1989年
大竹憲治 |
| 北海道奥尻島青苗貝塚について(第一次
調査概報) 1958年 桜井清彦 古代
第27号 | 東アジアの先史文化と日本 1983年 佐
藤達夫 | 日本の美術 No284 鏡像と懸仏 1990
年 離波田徹
「環オホーフク海文化」という視点—鉈
頭の分析から— 1993年 山浦清 北
海道考古学 第29輯 |
| 抉入頭鉈 1966年 大塚和義 物質文
化 考古民族学研究 7 | 閉式回転鉈 1983年 馬目顯一 講文
文化の研究 第7巻 道具と技術 | 伊達市有珠オヤコツ遺跡・ポンマ遺跡
1993年 伊達市教育委員会 |
| 日本歴史の研究 1968年 小葉田淳
考古学とは何か 1969年 V.G.チャイ
ルド著 近藤義郎・木村紀子訳 | 考古民俗叢書(22) 骨角器の研究 講
文篇 I 1986年 金子浩昌・忍沢成視
考古民俗叢書(23) 骨角器の研究 講 | 史跡上之国勝山鉈頭 I~IV 1980~93年
上ノ国町教育委員会 |
| 日本の美術 No42 和鏡 1969年 中野
政樹編 | | |
| 収録文献解説 日本考古学選集20 甲野
勇集 江坂輝秀 1971年 | | |
| 考古学選書 7 銅文時代の商業 1973
年 渡辺誠 | | |
| THE HOT SPRINGS VILLAGE SITE | | |

I 調査の概要

1 調査

勝山館の主体部は、両面を自然の谷に挟まれた台地で、大きく三段の平坦面から形成されている。

第一平坦面は、主体部の内最も低い場所にあり、面積約5,000m²。第二平坦面は、面積約7,000m²と最も広く、内部はさらにいくつかの小さな段に区切られる。また、第一平坦面との間には空堀が掘られている。第三平坦面は、面積約3,500m²で台地が挟まる緩斜面の高い方を削って盛土整形をし、後方に空堀が掘られている。第二平坦面と第三平坦面は、柵列によって囲まれ、その中に建物が建てられていた。

本年度の調査は、平成2年度から継続している第二平坦面北東中央部および北西端部で計約1,100m²を実施した。

調査は、5月24日～12月25日まで行った。調査方法は、従来通り20m×20mの大グリッドを分割した4m×4mの小グリッド方式を採用した。また、建物の概要を知るために柱穴配置略図(1/40)を作成し、柱穴間の重複、覆土の状態を観察しながら柱穴を掘り下げた。尚、焼土・土壤等は半裁し、セクション図作成後掘り下げる、土壤サンプリングを行った。遺物の取り上げは、I・II層は4m×4mの小グリッドを4分割し、2m×2m毎の一括取り上げ方式とした。遺構面であるIII層は、実測図を作成後、レベルを附して取り上げた。遺物の取り上げには、主に縮尺1/40の平板実測、1/10・1/20その他による平板および遺方測量を採用した。

5月24日 発掘調査事業開始。作業員に作業内容・就業規則・開通出土品等を説明。

5月27日 表土除去作業を開始。

6月 調査区内で現在勝山館跡を縦断する散策道より北西側の表土除去作業を終え、統けて遺構確認作業にはいる。散策道の北西側で道に並行した溝が確認され勝山館当時の旧道の側溝であることが判明。旧道の南東側の調査開始。

7月 旧道の南東側でも旧道の側溝が確認される。旧道北西側の柱穴がほぼ確認されたので掘立柱建物の想定作業にはいる。

7月13日 前日の南西沖地震のため作業中止。

8月 旧道の側溝を掘り始める。溝5と10-2の覆土中に多量の石が埋められていることが判明。実測の後取り上げる。18K13区で旧道の側溝の上から土壤と思われる遺構を確認。

9月 旧道北西側の最終精査を行う。調査区東端(第二平坦面南側先端部)の調査開始。

10月 第二平坦面北西端部の19M地区にて柵列跡(昨年度調査部分の継ぎ)を検出。18K14区で旧道の側溝の上から土壤と思われる遺構を確認。

10月15日 18K13・18K14区の土壤と思われていた遺構は、大型の柱穴であったことが判明。

10月28日 旧道の北西側の遺構検出を終え、実測にはいる。

11月 17J2区の土壤から金属製品・陶磁器と一緒に回転式鉗頭等が出土。

12月3日 写真撮影、実測、レベリング作業終了。

12月4日 埋め戻し作業開始。

12月25日 用具の点検・埋め戻しを終え、今年度の調査を終了した。

2 基本層序

I層 表土層。10YR 3/3暗褐～10YR 4/4褐色シルト。草根多量。やや密。

II層 館廃絶後の自然堆積層。10YR 3/3暗褐～10YR 4/4褐色シルト。やや密。炭化物・Os-a混入。細分される。Os-a純層も含まれる。

III層 館機能時の整地盛土層。10YR 4/4褐色～10YR 5/8褐色。密。ソフトローム粒・炭化物等多量に含有する。細分される。

IVa層 繩文期以後より館が形成される直前までの自然堆積層。黒シルト～7.5YR 3/3暗褐色シルト。

IVb層 10YR 6/6明黄褐色火山灰。やや密。

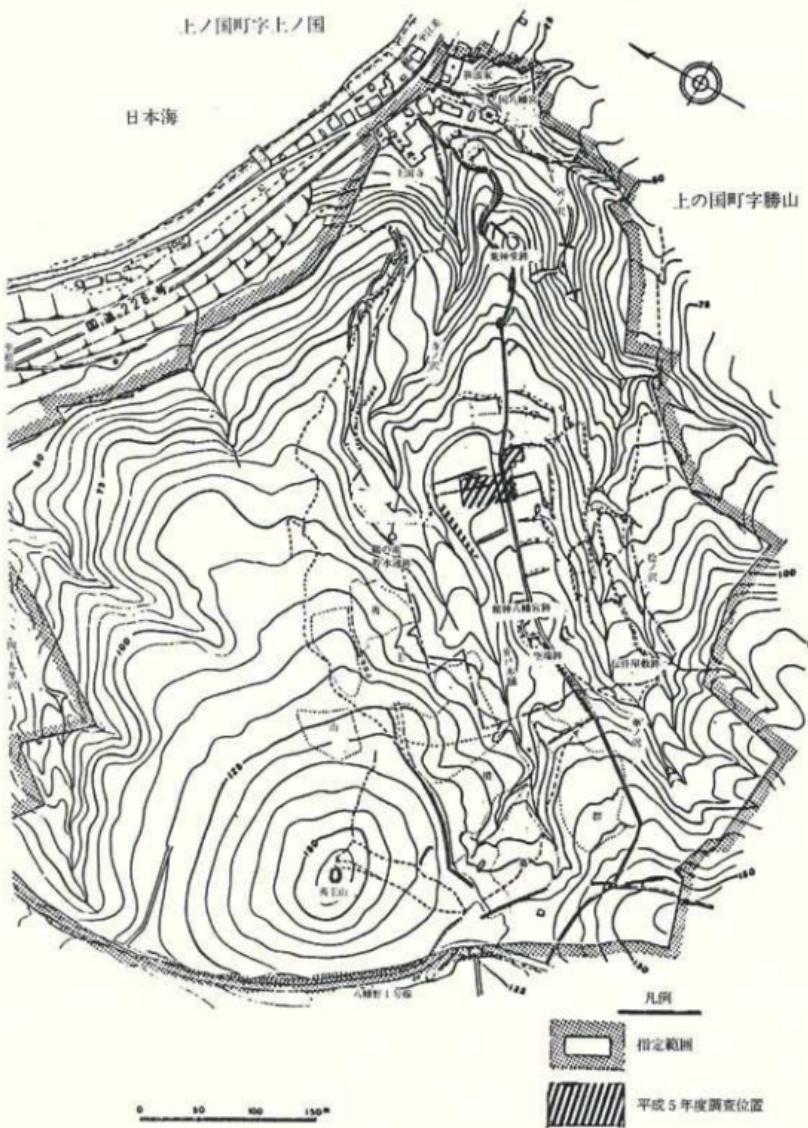
IVc層 繩文期包含層。10YR 4/6褐色シルト。やや密。

V層 10YR 5/4にぶい黄褐色～10YR 5/6黄褐色。ソフトローム。

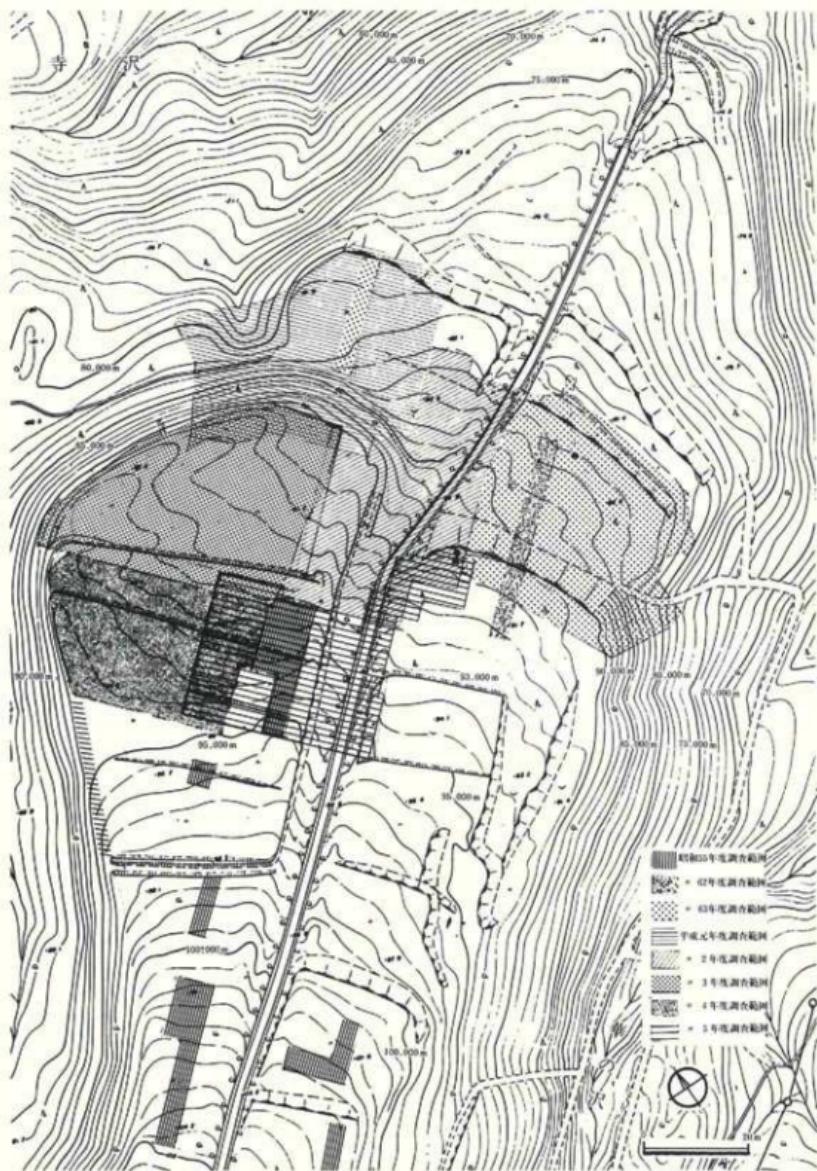
VI層 ハードローム。

3 保存処理

本年度は、鉄製品2,000点、銅製品80点、木製品1,700点、漆器10点の処理を行った。(佐藤)



第1図 遺跡地形図・調査区位置図



第2図 調査区範囲図

II 遺構確認調査

1 調査目的

平成3、4年、2カ年の調査結果、館主体部、第二平坦面の北東部には段と柱列で画された1,000m²程の空間があり、"客殿"に比定され得る大型の掘立柱建物、井戸、鐵治・銅鋳造作業場跡、礎石・焦石遺構、小石配石遺構、土壤などで構成されていることが判った。又、段・柱列の外側(南西部)には溝で囲まれた地割内に掘立柱と竪穴の建物跡が見つかった。

平成2年度の調査では第二平坦面を含めた館主体部の中央、現在在自然研究路として整備されている歩道の北西隅に一部重複しながら併行する館の時代の道跡が部分的に見つかっていた。

こうしたことから、館を縦断する道が中央通り、その左右に建物跡の建つ区画が配されていることが想定されるところとなつた。

今年度はこの中央通路の確認とそこから、"客殿空間"への出入りの方法(方向)を探ることを主眼とし、調査区の中心を通路と前年度調査区との間に設定した。

2 検出遺構と出土遺物

(1) 位置・概要

平成5年度の調査位置は、第二平坦面のほぼ中央で、平成2・4年度調査区に隣接し、一部昭和55年度と平成2~4年度調査区に重複している部分と、第二平坦面北西端部で約1,100m²を調査した。

調査区中央南西寄りに北東~南西に走る幅3m(10尺)程の旧道跡が検出された。道の左右に側溝が併行し、これらに直行した区画・地割の溝がつくられ、建物の建てられていたことが明らかとなった。

旧道跡北西部では、長方形に溝で囲まれた地割が、5区画余(一部不明のものがある)、その内部及びそれに跨がって12棟の掘立柱の建物跡、5基の竪穴建物跡、土壤などが検出された。又、"客殿空間"を画する柱列の延長部等が確認された。

旧道跡南東部では、道・側溝に直交する溝が16条程検出されているが、いずれも調査区外へ延びており全容は明らかでない。この溝に沿い、或いは跨った軸線や矩をつくる柱穴があり、建物跡の

存在も推された。他に竪穴建物跡1基、土壤などが調査されている。

中央の旧道跡は平成2年度検出のそれに続くものである。調査区南西部で四個の大型柱穴が道に跨がるように検出されている。

第二平坦面西端部にトレンチを設定し、柵列の延長状況の確認を行った。

(2) 層序

遺構の形成等を把握すべく調査区を縱横する土層断面を設定し、観察の状況を第3図に示した。

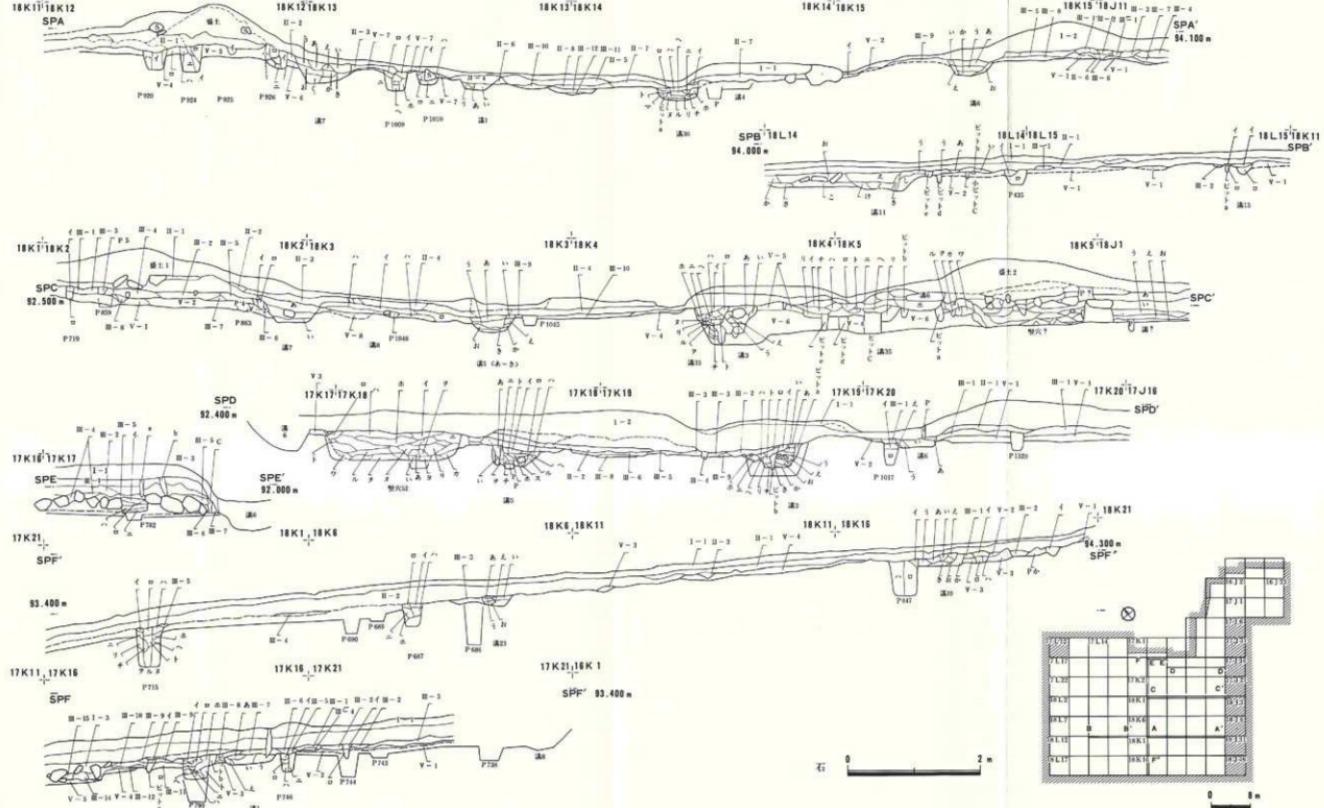
調査区南東半に北東から南西に9m間隔で併行する溝6.7は第II層を掘り込み面とし、その覆土中から近世末の陶器が出土することから平成2年度調査時の観察に符合することとなつた。又この溝の左右に見られる土壌上の盛り土はこの掘り上げ土と推される。なお現在この左右の盛り土の間が一段低くなっているが、このうちすくなくとも今回の調査で検出した旧道跡両側の溝(側溝、溝1~4)とこの盛り土との間はこの時に削平されているかと推される。

館形成時の建物跡は旧道跡の左右両側に、浅い溝で長方形乃至はコの字状に埋められた敷地内に設けられているが、これらの溝と建物跡その他の遺構、或いは溝相互の重複の前後関係等については層序の観察等も含め必ずしも充分に把握するにはいたらなかつた。全体に観察結果等の検討が不充分なままであるとしなければならない。

(3) 溝跡と掘立柱建物跡

館形成時の溝跡と掘立柱の建物跡は旧道跡の北東側で各14条(5区画)と12棟を想定した。旧道跡の南東部では溝跡、掘立柱建物跡の柱穴等はいずれも部分的な検出であり、全容は次年度以降の調査に待つこととした。なお北東部についても前項で述べたように層位的状況を含めた柱穴その他の重複・前後関係の検討、帰属不明の多数の柱穴の存在等々、調査、整理作業が大幅に不足していることを記しておきたい。

第1号建物跡(第5図): 調査区西隅、18L7・8、12~14区周辺に位置する。溝11、'92年溝5(概報第一溝5、以下溝X-5と記す)で画された地割内に3×4間の建物として想定した。東隅の柱



第3図 調査区土層堆積図

表1 18K11、12、13、14、15南北セクション裏壁土層<A~A'>

表2 18L-14-15南北セクション裏盤土層^{1月～8月}

表3 18K2, 3, 4, 5, 18J1南北セクション東壁土層< C~C' >

表4 17K17、18、19、20南北セクション東壁土層<D~D'>

表5 17K17南北セクション東盤土層<E~E'>

表6 17K18-21東西セクション南盤土層< E ~ E' >

表7 18K1、6、11、16東西セクション南壁土層<F'~F'>

柱 番 号	柱 穴 名	地 割 区	柱 穴 形 状		柱 穴 下 部 特 徴	柱 穴 上 部 特 徴	想定 建 物 跡
			柱 穴 性 質	柱 穴 寸 法			
P58	10P94.1/8	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P8
	10P94.1/9	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P21
	10P94.1/10	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P27
	10P94.1/11	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P55
	10P94.1/12	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	
	10P94.1/13	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	
	10P94.1/14	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	
	10P94.1/15	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	
	10P94.1/16	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	
	10P94.1/17	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	
	10P94.1/18	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	
P59	10P94.2/1	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P59-1
	10P94.2/2	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P59-2
	10P94.2/3	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P59-3
	10P94.2/4	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P59-4
	10P94.2/5	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P59-5
	10P94.2/6	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P59-6
P60	10P94.3/1	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P60-1
	10P94.3/2	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P60-2
	10P94.3/3	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P60-3
P61	10P94.4/1	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P61-1
	10P94.4/2	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P61-2
	10P94.4/3	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P61-3
P62	10P94.5/1	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P62-1
	10P94.5/2	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P62-2
	10P94.5/3	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P62-3
	10P94.5/4	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P62-4
	10P94.5/5	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P62-5
P63	10P94.6/1	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P63-1
	10P94.6/2	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P63-2
	10P94.6/3	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P63-3
P64	10P94.7/1	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P64-1
	10P94.7/2	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P64-2
	10P94.7/3	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P64-3
P65	10P94.8/1	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P65-1
	10P94.8/2	南北	柱穴	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	柱穴底面 柱穴底面	P65-2

穴は精査を重ねたが検出できなかった。柱間は6.6尺等間である。北側にP8、21、27、55の1間を抜け、3×6間の建物とすべきかも知れない。この場合北隅の柱穴も欠失する。又地割の溝はNIV-5が対応することになる。この建物跡は前年度調査のNIV-8号建物跡とはほぼ重なり、その東のNIV-7号とも一部重なる。3×5間の建物と想定するとP48がNIV-8号建物跡の柱穴と切り合い、本建物跡が新しいと想定されることになる。又、第4号堅穴建物跡と重複するが、本建物跡の方が新しい。本建物跡の各柱列毎の柱穴下面はほぼ同一レベルを示す。又これによれば欠失している東隅は丁度他の区画溝と重なるところから、溝により消失したか、或いは溝覆土中にあったため、把握できなかつたとも推される（第5図EPD-D'）。

なおNIV-8号建物跡は前年度調査時に南側が未調査であったため、更に拡がる可能性もあるとしたが、今年度の調査で新たな柱穴等は検出できなかつたことから2×3間の建物跡としておきたい。

第2号建物跡（第6図）：調査区南西端、18L14・15周辺に位置する。東は溝23、西は溝18で幅6.4m程の地割が想定される。南北方向は不明である。ここに3×4間の南北棟を想定した。梁間は5.9尺、桁行は6.6尺等間であり、その規模は5.37×8.00m程と推した。西隅のP389が溝11の底面で見つかったこと、北隅のP444とP443の重複関係から1号建物跡より古いかと推察している。又南端の柱列1間は、東西の溝7を跨いでおり時期差を示している。

第3号建物跡（第7図）：調査区西中央、18K11・12区周辺に位置する。東西は溝1・7、南北は溝19・16に画された、6.2×10.8m程の地割の中

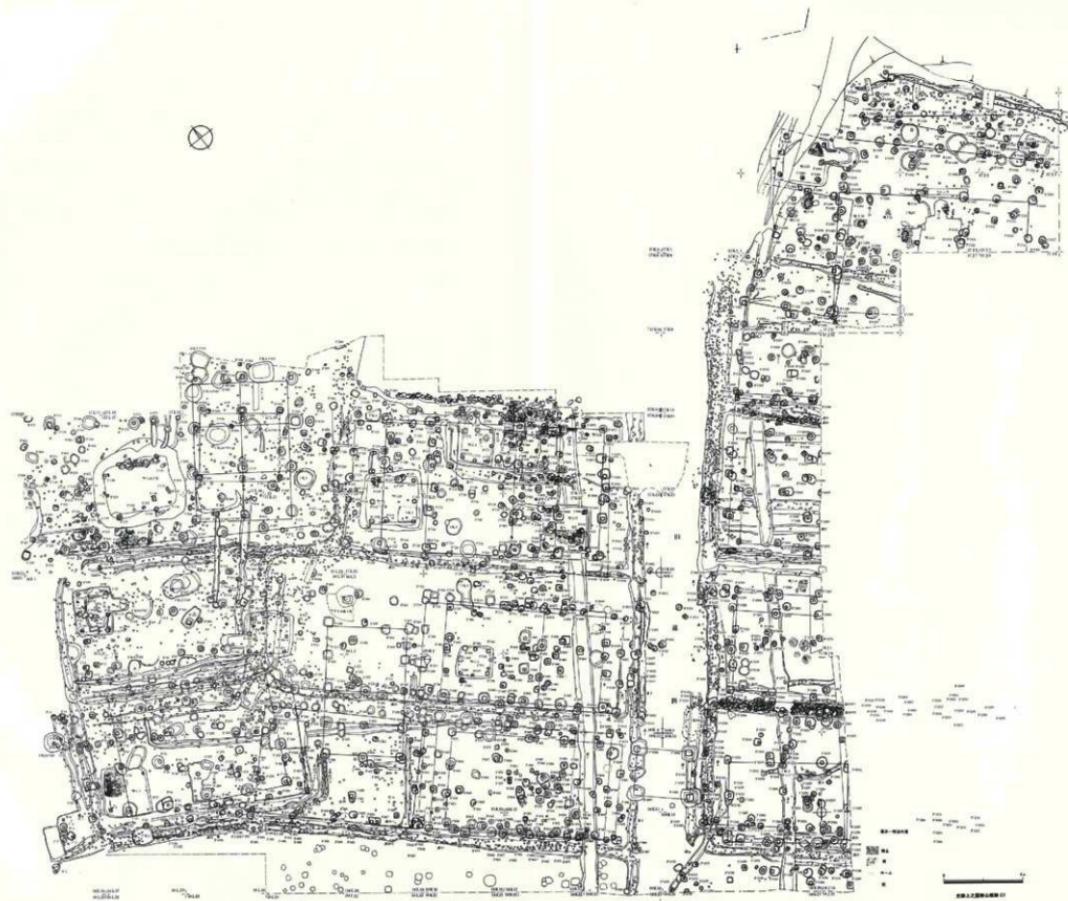
に3×4間の南北棟として想定した。梁間は5.9尺等間、桁行は南から6.6×6.6×5.9×5.9尺とやや不規則である。その規模は5.37×7.58m程と推した。柱穴下面のレベルはほぼ近い。間仕切り等は不明である。北端柱列は第2号建物跡の南端柱列と重複するが、西隅のP630・631と北側のP598・599、P613・614では前後関係が逆転しており、更に検討しなければならない。

第4号建物跡（第8図）：調査区西中央、18K11・12区周辺に位置する。第3号建物跡と同じ地割内に想定した建物跡である。3×5間の南北棟で柱間は梁間5.3尺等間、桁行は南から3.5、6.5、5.9、6.6、5.9と不規則である。東隅の柱穴は欠失する。P982・939・928・で仕切られる、南側2×3間と北側2×3間の二室を想定した。その規模は4.83×8.58mとなる。

第5号建物跡（第9図）：調査区西中央、18K11・12区周辺、第3、4号建物跡と同じ地割内に位置する。3×5間の南北棟を想定した。柱間は梁間は東から6.3、5.9、5.9尺、桁行は南から4.6、6.1、6.2、6.6、5.9尺、その規模は5.48×8.79m程である。東側柱列を西ではP681・677・916…としたが、P677はP680とした方が良さうである。なお、この東柱列の南から2番目と南柱列の東から2番目の柱穴は欠失している。

第3～5号建物跡は同一の地割内に想定した建物跡であるが、その新旧を決める手がかりは得られていない。

第6号建物跡（第10図）：調査区中央18K1・2・6・7区周辺に位置する。溝8、16、23で東西を、溝1、2、17で南を画す地割内に位置する。なお北側の地割界は明らかでないが、18L10区P586から東にのびている溝の痕跡を第3～5号



第4図 調査区沿構配図

建物跡の建つ地割の北を画する溝、溝16が北端で東折した延長部の一部かと推し、この部分を北の地割界としておきたい。地割の規模は 3.2×5.1 m程となる。その西は第3～5号建物跡の建つ地割であり、東は第8・9号建物跡の建つ地割である。又南の溝は、旧道路の北側々溝である。地割内北半には第3号堅穴建物跡がある。溝8で画されている東接の地割とP330cm余の比較的大きな段差を有している。建物跡は 2×4 間、柱間は梁間8尺等間、桁行は6.6尺等間、 4.84×8.0 mの規模の南北棟を想定した。梁間の2間については、若干柱筋の通りが不規則になるが南側、北側をそれぞれP695・692、P1021・1029の柱を用いる3間とすべきかも知れない。又、南東隅の柱穴は欠失している。又P877・890・896・905で南北の二室に分けられるときも推している。

なお、この地割内の第3号堅穴建物は昭和55年度に調査したものである。

第7号建物跡（第11図）：調査区中央18K 1・2・6・7区周辺に位置し、第6号建物跡と重複する。建物跡は 3×5 間の南北棟を想定した。柱間は梁間5.3尺等間、桁行6.6尺等間、その規模は 4.84×10.00 m程である。東柱列の北から2番目の柱穴が欠失しているが、その東の土壙9の調査時に破壊してしまったかと思われる。P873・887・898・906・で南側 3×2 間、北 3×3 間の二室に仕切られると推した。P881は柱間寸法、柱筋等からは本建物跡に帰属する柱穴と推し得たが、P898・1020間に対応する柱のないところから示しなかった。或いは南側 2×3 間の一室の東をP887・881・1025とつないだ仕切りがあるとすべきかも知れない。

なおこの地割内に焼土があるが分析が不足しており、性格、層属等は決定できていない。

東西の柱列のうち北側の一列（第11図EE'）のP710だけ柱穴下場のレベルが低い。又南北列の東（AA'）P880、1035の掘り込み面が低いのは、層序の項で触れたように後世の削平のためかと推される。溝16の南寄り2m程が欠落しているのもこの削平により、溝が失われた結果かとも推される。

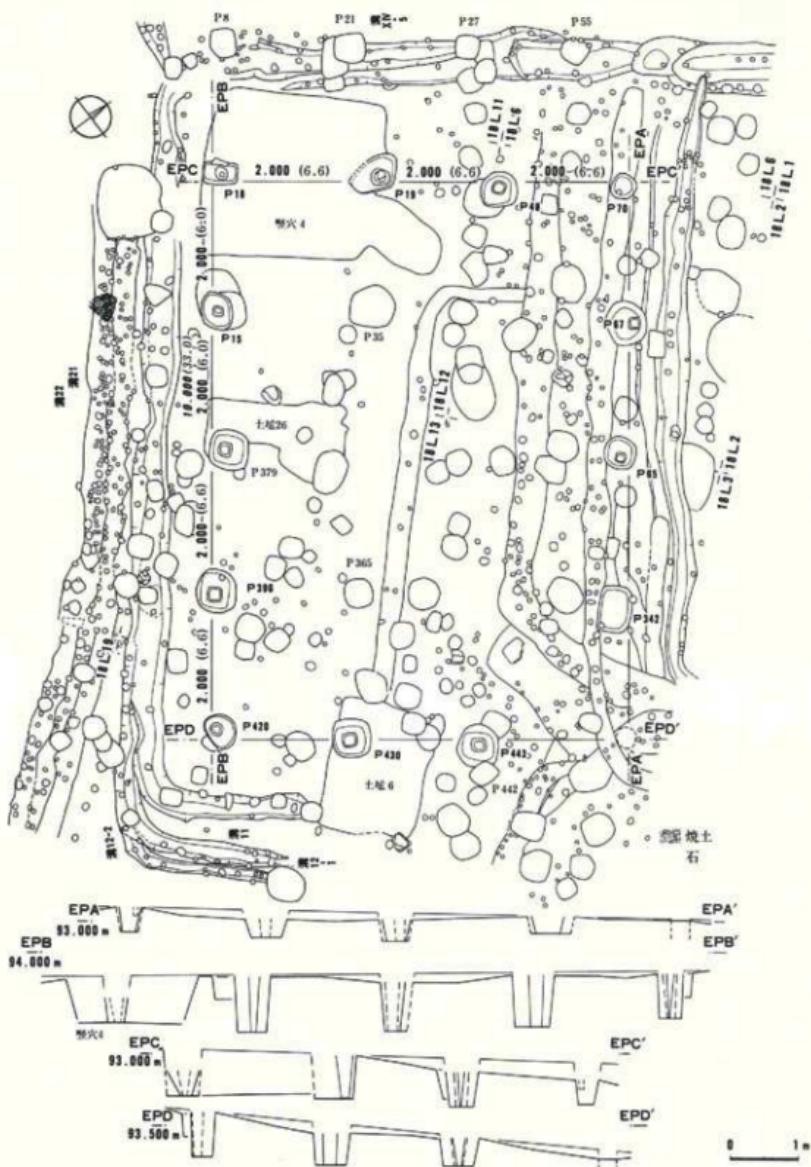
第8号建物跡（第12図）：調査区中央東、17K16・17・21・22区とその周辺に位置する。東は平成2年度調査のミゾ19（概報Ⅲ、ミゾ19-19）と段、西は溝8で画され、北は溝42、南は溝5で画

された 7.2×14 m程の広さの地割内に、 3×5 間の南北棟を想定した。柱間は梁間西から7.3・7.3・7.0尺、桁行は7.3尺の等間、その規模は 6.54×11.05 mとした。東西の柱筋GG'、南北の柱筋BB'のうちP1077が第52号堅穴と重複している為かその柱穴下底が他に比べ一段低くなっている。又東西柱列CC'の1穴は堅穴49と重複すると考えられるが確認できなかった。柱列EE'で 2×2 間・ 3×3 間の南北二室に仕切られ、更にDD'、FF'で分けるかと推している。第50・51・53号堅穴建物跡よりは新しい。P1077は第52号堅穴建物跡の掘り下げ時には見出せなかった。

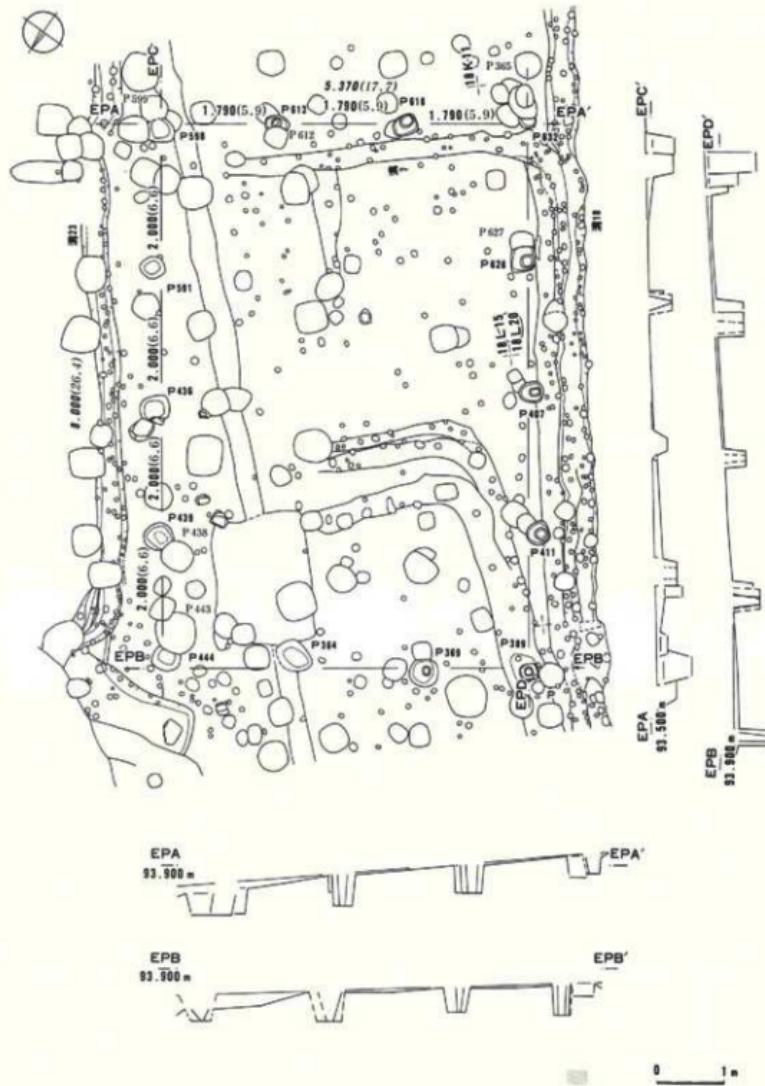
第9号建物跡（第13図）：調査区中央北東17L20区周辺に位置する。第8号建物跡と同一地割面内の北隅に 2×2 間の建物跡を想定したが、柱間寸法も不規則で、柱穴の対応も不十分である。柱列BB'を南にP783・787（786）と延長し、これに直行する柱列、P791・792・819・830・850とからなる、 $3 \sim 4 \times 5$ 間程度の建物跡の一部の検出を示すかと推している。この場合、第49・50・51・53号堅穴建物跡よりは新しい建物跡ということにもなるが、推測の内に止まるものでしかない。

第10号建物跡（第14図）：調査区中央西、18L10区周辺に位置する。建物敷地を画す地割・溝などは明らかでない。 2×4 間の東西棟を想定した。柱間寸法は梁間6.6尺、桁行5.3尺等間で、その規模は 4×6 mとなる。柱列BB'で東西二室に区切られ、西側は総柱となる。南北方向の柱列の内最も東寄りのAA'の柱穴が全体に浅く、東西方向柱列FF'ではその深さがまちまちであるなど、全体にまとまりに欠けるようである。西側 2×2 間総柱の南北棟とも推される。

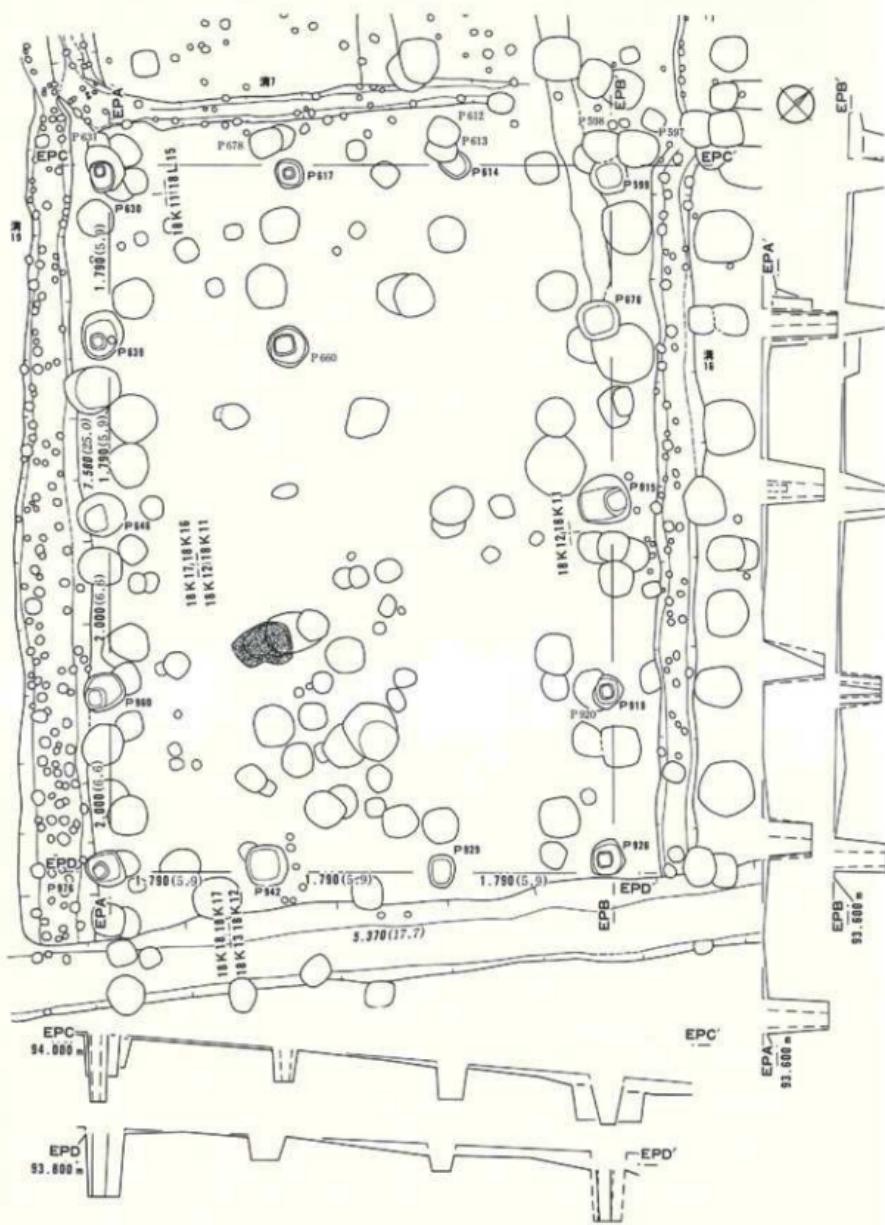
第11号建物跡（第15図）：調査区北部、17L18区周辺に位置する。西から南に逆L字形に溝が周り、平成3・4年度調査の大規模建物跡の地割りを画し、これにはほぼ併行して区画の柱列が並び立っている。本建物跡はこの地割内の南隅に位置する。 2×3 間の総柱の東西棟と想定した。柱間寸法を梁間7.9尺等間、桁行は西から7.9、7.9、7.0尺とする 4.78×6.90 mの規模である。概報Ⅲ第5図に西 2×2 間のみ図示したものである。平成3、4年度調査結果との整合が不充分な為P179、180等に齟齬をきたすところとなっている。今一度検討することとした。



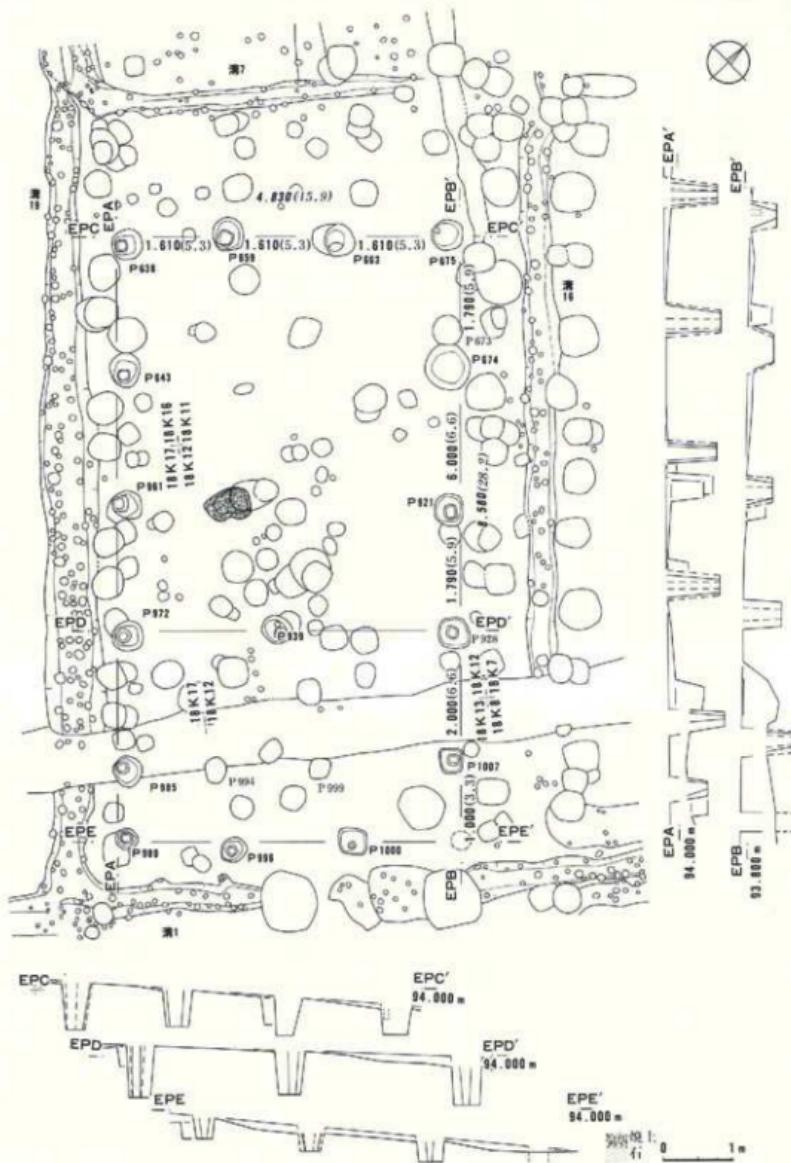
第5図 第1号建物跡想定図



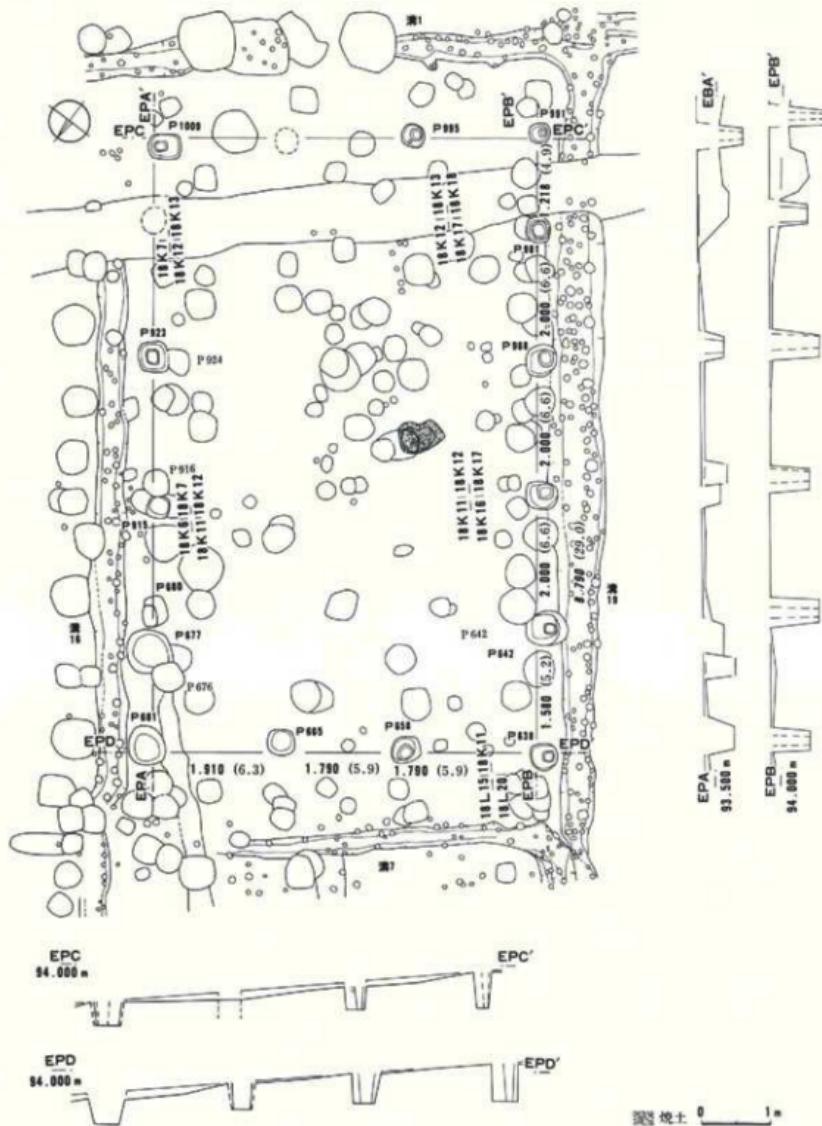
第6図 第2号建物跡想定図



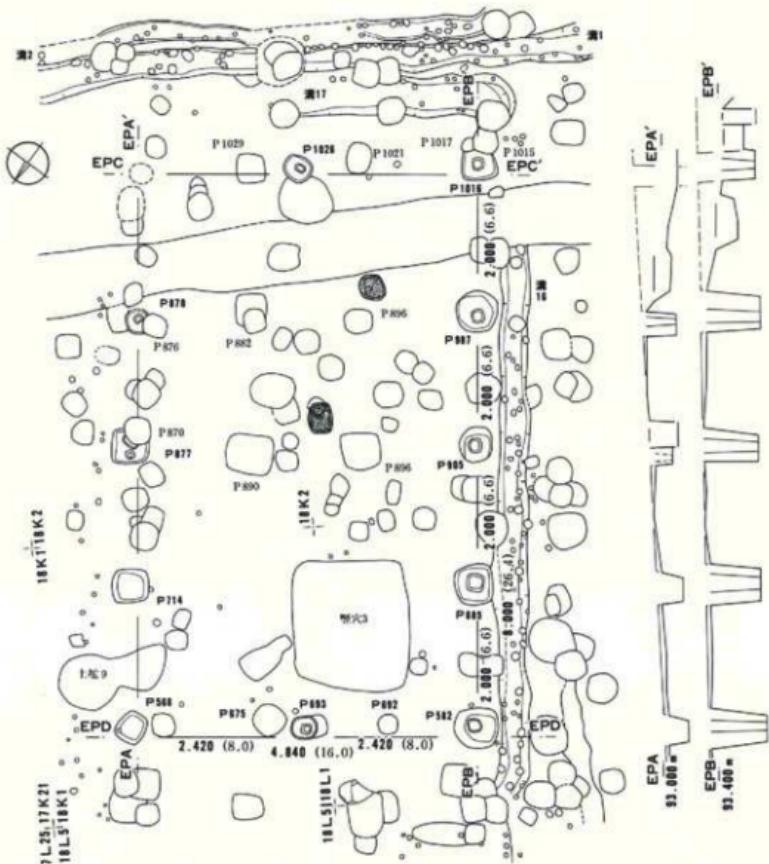
第7図 第3号建物路想定図



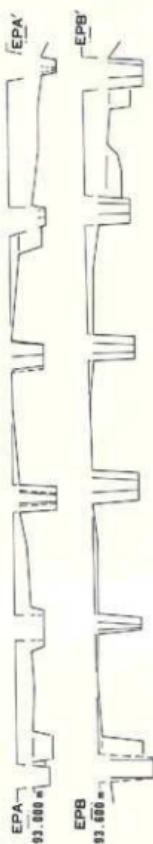
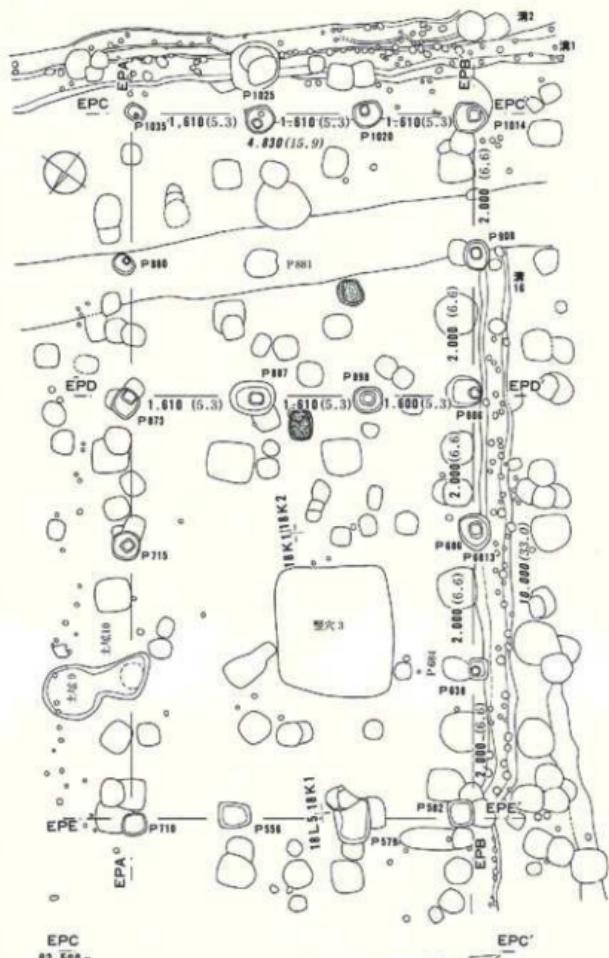
第8図 第4号建物跡想定図



第9図 第5号建物跡想定図

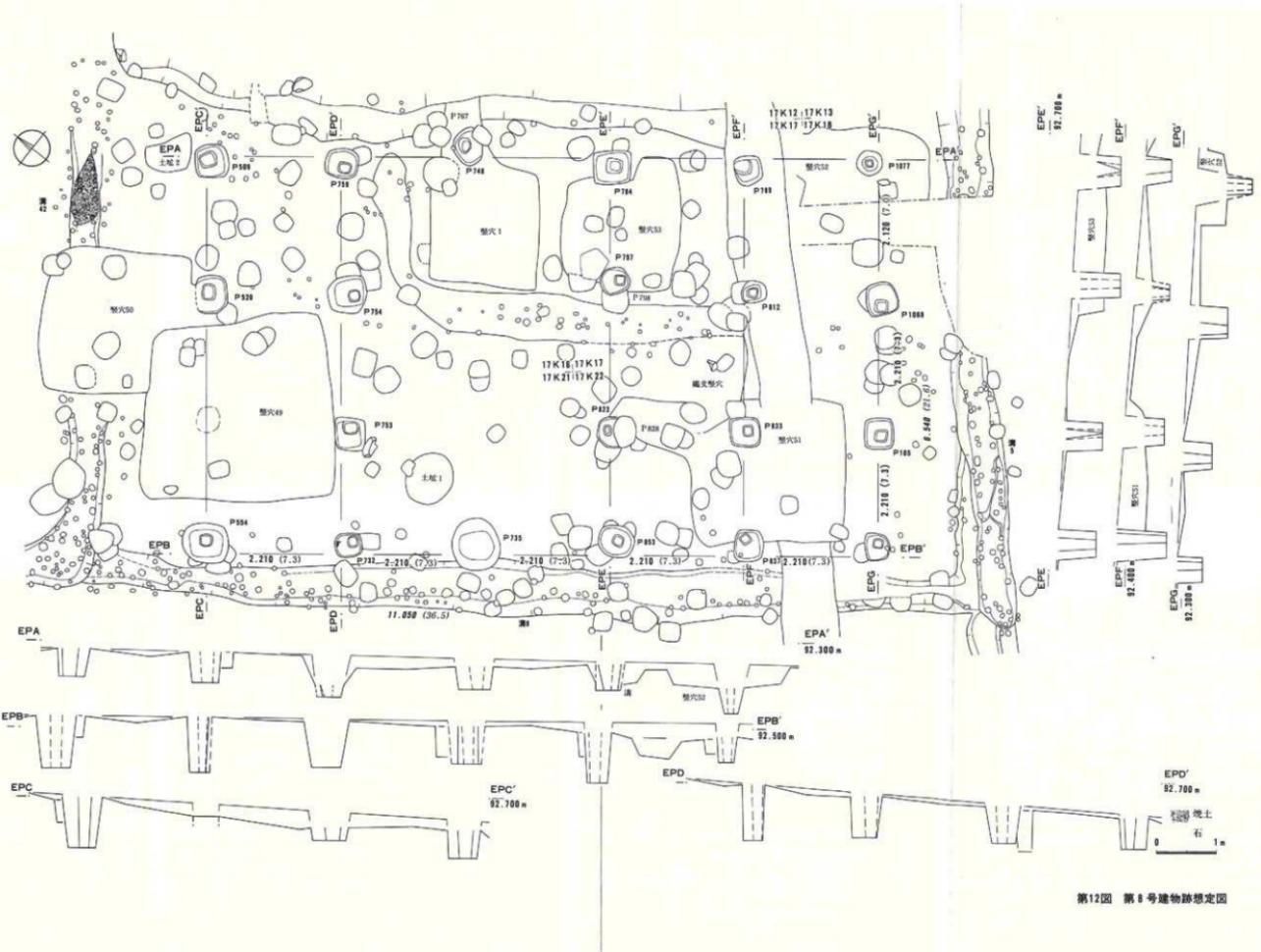


第10図 第6号建物跡想定図

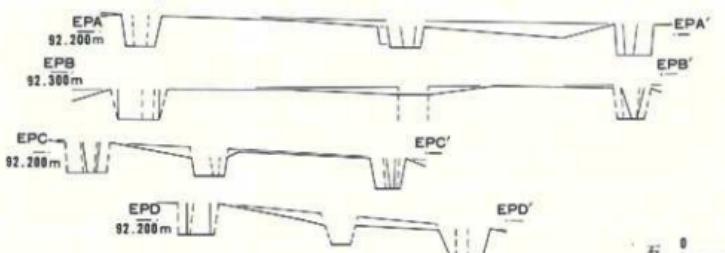
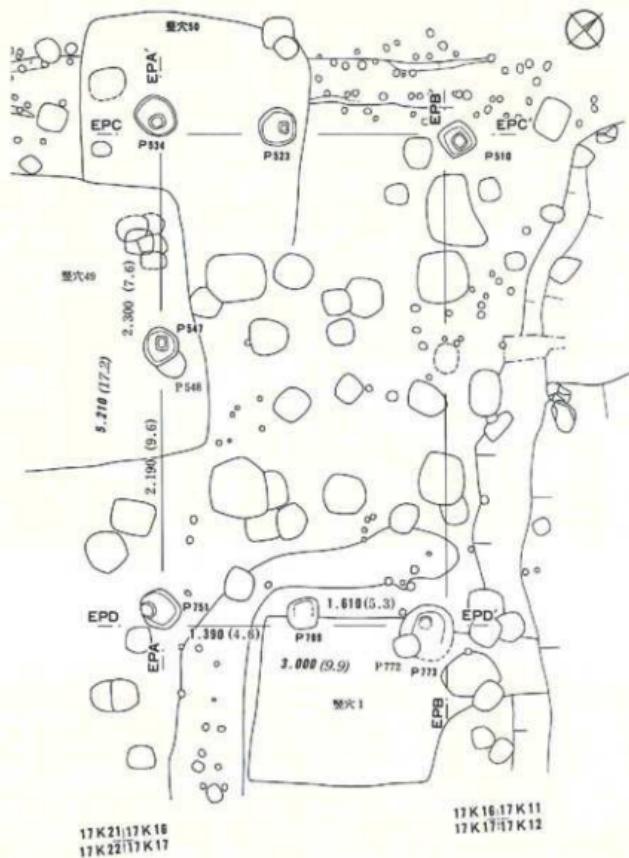


高さ 横上
石 8 1 m

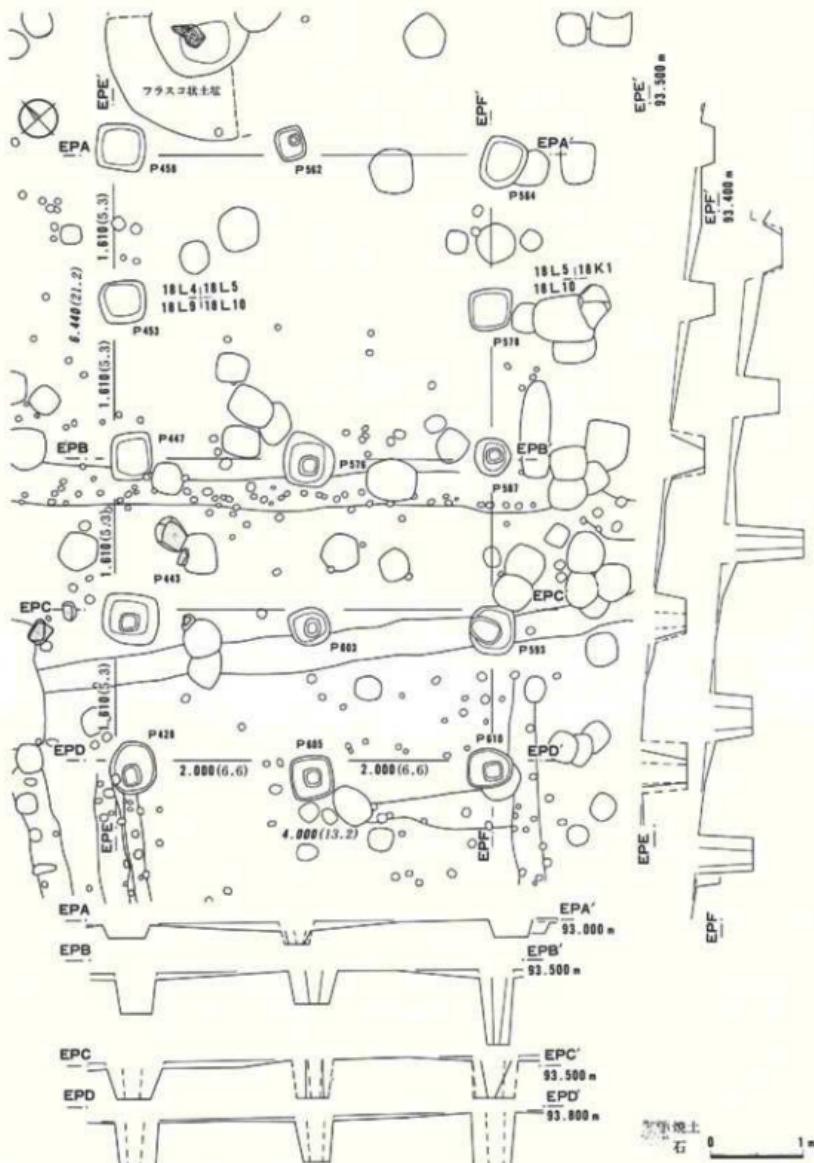
第11図 第7号建物跡想定図



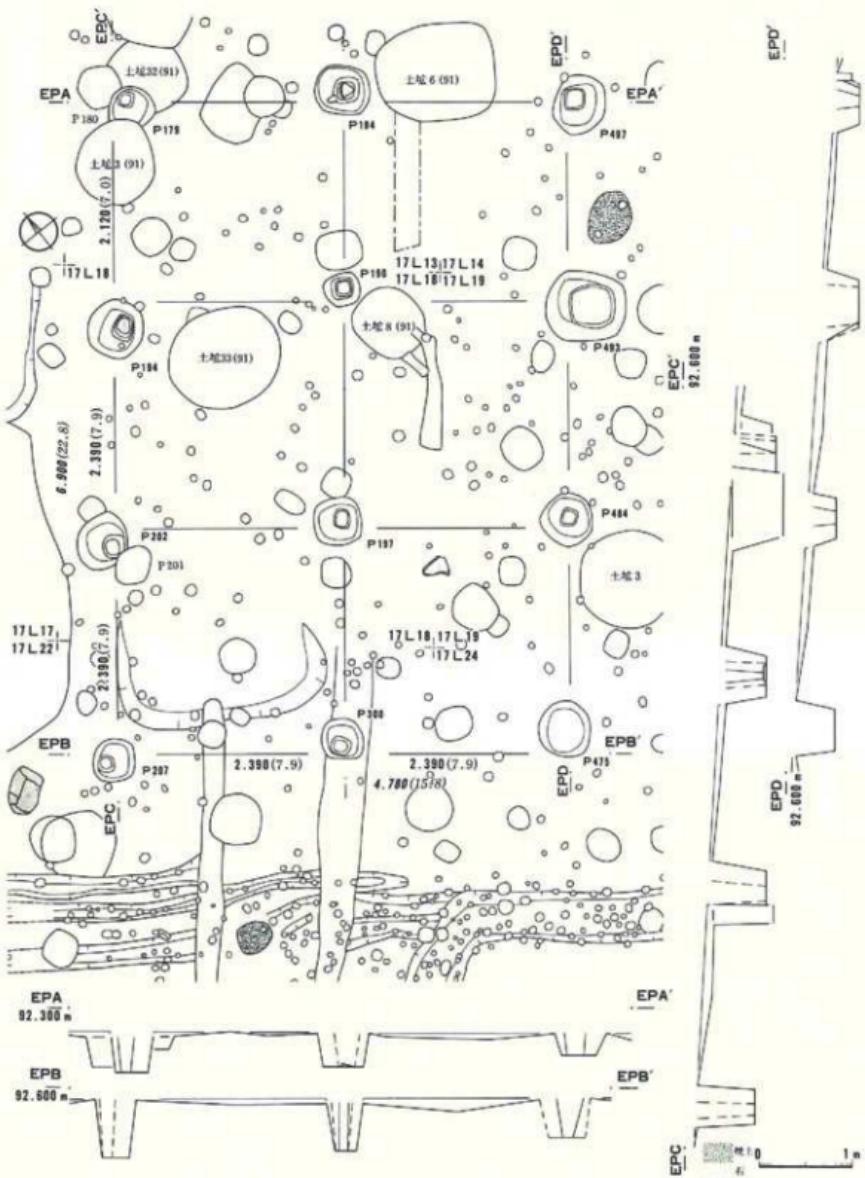
第12図 第8号建物跡想定図



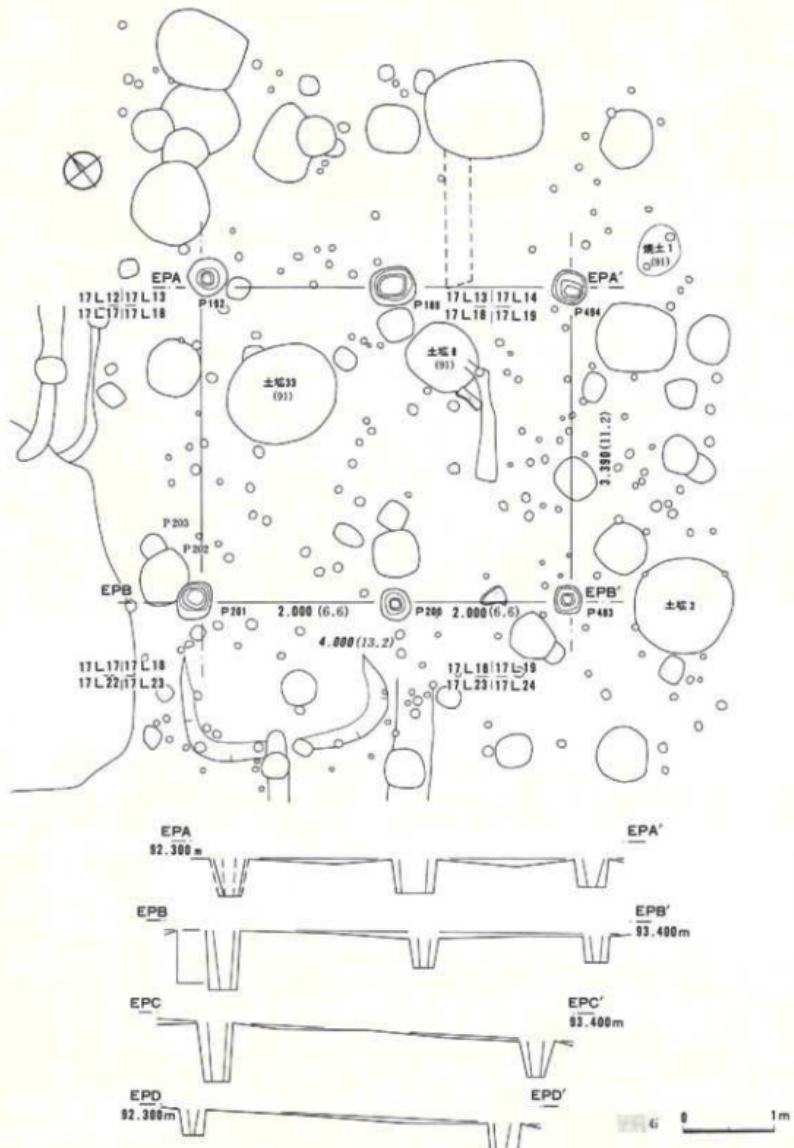
第13図 第9号建物跡想定図



第14図 第10号建物跡想定図



第15図 第11号建物跡想定図



第16図 第12号建物跡想定図

第12号建物跡（第16図）：調査区北部、17L18区周辺に位置する。第11号建物跡と重複する。1×2間の南北棟を想定した。柱間寸法は梁間11.2、桁行6.6尺等間、3.39×4.00mの規模となる。P201がP202を切っており、第11号建物跡より新しいと推される。

その他の建物跡：第1号建物跡南を画す溝の南外側に、より古い溝12-1、2がある。この溝12に囲まれる建物跡としてP381～417、更にはP452、そしてP340、66、68などを加えた3×3～4、5間を想定できるのかも知れない。この場合、第4号堅穴で北西の1、2の柱穴は失われていることになる。又、P37、42などは間仕切りになるとも推される。

（4）柱列（第4図、付図）

平成4年度の調査で、3年度調査で検出した大型建物跡（「客殿」）の建つ地区的南北を画する段と柱列が明らかとなった。この柱列は井戸跡を中心にして6.6尺等間で6間を検出していたが、今年度の調査でその南（東）へ12.2尺程の間を持つて伸び（P304、469）、更にそこから東（北東へ）3間程（P529、489、496）、6.3尺、5.4尺、7.6尺と不規則な柱間で伸びると想定された。この12.2尺程の広い柱間部分は出入口（門）の部分かとも推されるところである。

なお前年度概報（第X）では井戸跡から北西へ10.5間の柱列とし、柱筋もXW P691～P1232まで9間のみ記した（第X付図）。これはXW P1230、XW P1227、XW P693を通すと柱筋が幾分通りずらくなることから、躊躇した為であるが、XW P693～XW P1227まで12間の柱列で区切られるとして良いかと推しているところである。

（5）堅穴建物跡・土壤

a 堅穴建物跡

旧道跡北西部の今年度調査区で5基の堅穴建物跡が調査された。又、第1・3号の昭和55年度に調査された堅穴を再調査した。旧道跡南東部では東端で1基の堅穴建物跡を調査した。一辺が1.60～3.10m程と規模に大小があり、出入口とされる緩く傾斜する張り出しを有するものと、ないものがあるなど種々見られた。遺物は陶磁器、釘、鍋その他が出土し、床面に焼土・炭化物層の見られる例もある。これら遺物の出土位置、覆土中の成分抽出等が充分でなく、以下に概要を述べたい。

第49号堅穴建物跡（第17図）：17L20・25区に位置する、3.10×3mのほぼ正方形、深さは最大で80cm程である。張り出し部は検出されていない。床面上直上ケースの各層上部境目に薄く炭化物等が含まれている（同図SPA-A'）。柱穴は径15～20mmの大きさのもの6個である。P1、P2からは枕状の柱痕が検出された。南西壁際P543、544間に浅い溝の痕跡が僅かに見られた。6個の柱穴とこの溝の覆土中には白色の火山灰が多く含まれていた。覆土中の遺物は表16、PL.18に示した。第50号堅穴建物よりは新しい。又覆土上部で土壤5が検出されている。

第50号堅穴建物跡（第17図）：調査区中央東17L20区、第49号堅穴建物の北に位置する。2.4×2.4mのほぼ正方形で南東方向に張り出す出入口があると推される。深さは最大約40cmと浅い。柱穴は20×30cm程の大きさで6～8個と推される。南東部P522、535間に溝状の痕跡がある。又P528に接する小さな凹みは、4年度の調査で存在が明らかとなつた壁を構成する縦板の痕跡であろうか。遺物は表16とPL.18に示した。

第8・9号建物跡の地割を示す溝と本堅穴の新旧は直接覚えなかつたが、8、9号建物跡の柱穴P52、49-50がいずれも49、50号堅穴よりも新しいことから溝も同様と推される。又、区画柱列は49号堅穴より古いかと推される。

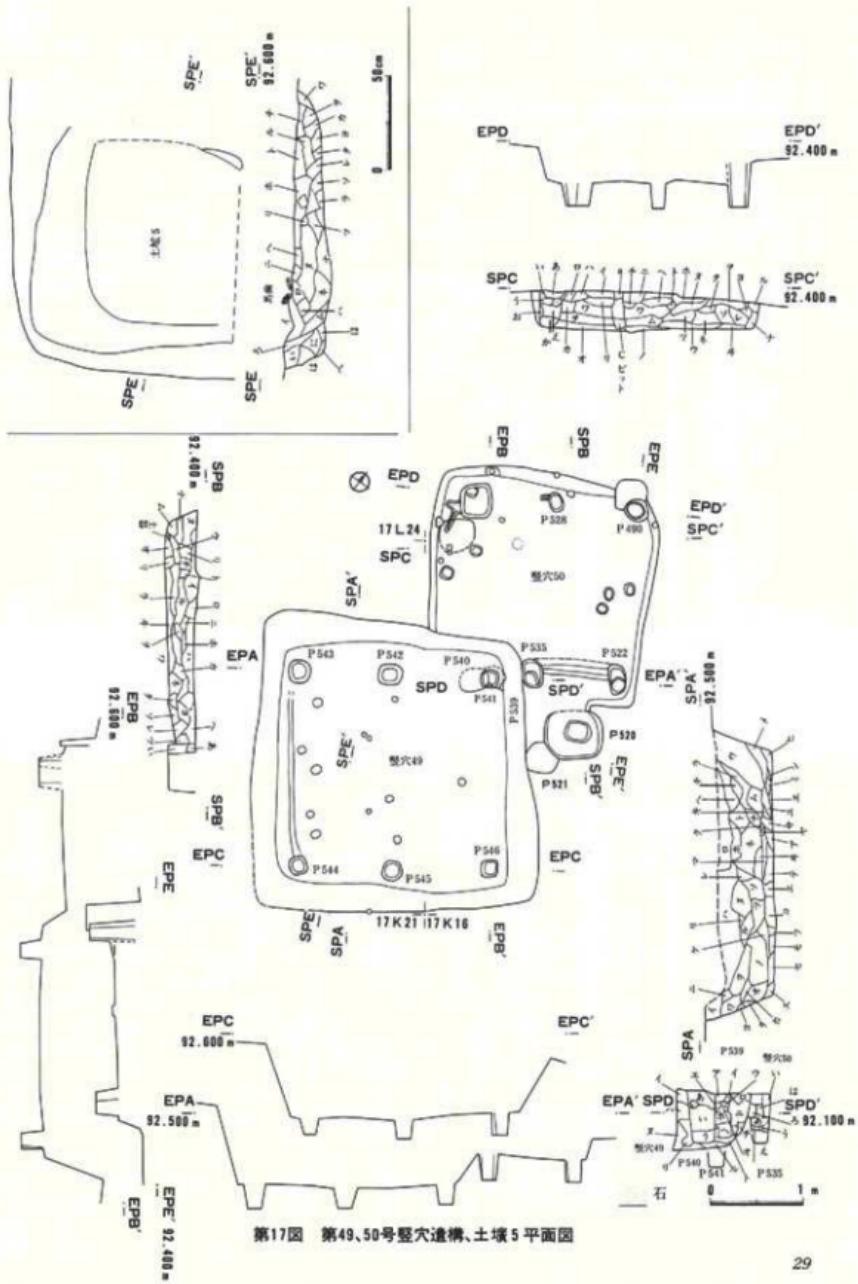
第53号堅穴建物跡（第18図）：調査区中央北東端17K17区に位置する。1.7×2.0mの長軸を北東・南東部にとる小形の堅穴である。東角に浅い張り出しが30cm程ついている。深さは90cm余。柱穴は長軸に平行する6個と思われるが、P38で1個が失われているとすれば8本柱となる。P38の底面のレベルは291.524mで本堅穴床面のレベルよりは低い。P38・111とともに本堅穴よりは新しく、図ではP111の方が古く示されているがこれは作図の誤りでP38の方が古い。遺物は表16、PL.18に示した。

第1号堅穴建物跡（第18図）：調査区中央北東端17K16区に位置する。第53号堅穴の北西に隣接している。昭和55年に一度調査され、床面上直上から鉄鍋が出土している。1.8×2.0m長軸を北東方向にとる小形の堅穴である。北隅に長軸に沿い80cm程の張り出しが傾斜をもつてつく。深さは90cm程で、柱穴は長軸に直行する方向に併行する6個である。今年度の調査で床面の一部に浅く短い凹み

表8 17L25壁穴49南北セクション西壁土層<SPA~SPA'>

表9 17L20、25竪穴40、50東西セクション北壁土層<SPD~SPD'>

セイヨウヒョウ							
種別	品目	規格	原産地	販路	販売量	備考	
黒牛40	イ	1978年4月 初剪毛	英 美	種粒	企画ローム	ハード	C少量
	ロ	1978年5月 初剪毛	英 美	種粒	企画ローム	ハード	
	ハ	1978年5月 初剪毛	英 美	種粒	企画ローム	ハード	選
ニ		1978年5月 初剪毛		ローム粒	火山灰少量	ハード	C少量
ホ		1978年5月 初剪毛		ローム粒	火山灰少量	ハード	C少量
チ		1978年4月 初剪毛		ローム粒	火山灰5%	ハード	
リ		1978年4月 初剪毛		ローム粒	火山灰10%	ハード	
ヌ		1978年4月 初剪毛		ローム粒	火山灰40%	ソフト	
ル		1978年4月 初剪毛		ローム粒	火山灰少量	ソフト	選
ビット549	ア	1978年5月 にじく・英高	英 高	シルト	ローム粒	ササラソフト	熟土粉少量
イ		1978年5月 にじく・英高		シルト	ローム粒	ササラ少量	
ウ		1978年5月 にじく・英高		シルト	ローム粒	ササラ	
ビット539	ア	1978年5月 にじく・英高	英 高	種粒	ローム粒	ソフト	C少量
イ		1978年5月 にじく・英高		種粒	企画ローム	ハード	
ウ		1978年5月 にじく・英高		種粒	企画ローム	ハード	
エ		1978年5月 にじく・英高		ローム粒微量	火山灰20%	ハード	
オ		1978年5月 にじく・英高		企画ローム	火山灰20%	ハード	C
ビット541	ア	1978年5月 高	高	種粒	ローム粒	火山灰少量	C
イ		1978年5月 高		ローム粒	火山灰少量	ソフト	選
ロ		1978年5月 高		ローム粒微量	火山灰	ハード	C少量
は		1978年5月 高					C少量
ビット535	ホ	1978年4月 高	高	種粒	火山灰	ヤマハード	C少量
い		1978年4月 高		シルト		ソフト	
う		1978年4月 高				ハード	(全面熟土質)
え		1978年4月 高		シルト50%	火山灰50%	ササラソフト	



第17図 第49、50号豊穴構造、土壤5平面図

を検出したが、前年度調査で明らかとなつた壁の
縦材の痕跡と推される。

第51号竪穴建物跡(第19図)：調査区中央17K22
区に位置する。2.3×2.6m、長軸を北西方向にと
る竪穴である。北隅に長軸方向に1.3m程の張り出
しが傾斜をもちながら付く。深さは50cm程。柱穴
は長軸方向に直交する6個からなり、床面の一部
に浅い溝や壁紙板の痕跡かと推される凹みがみら

れる。張り出し部分の付根と先端に小柱穴があり
(P842の北西30cm、西75cmとP823の南東直近にあ
った3個が作図ミスにより図上から欠落)、出入口
の踏み板等を支える杭等の存在を示すと推され
る。床面南西半、張り出し部北半に炭化物を主体
とする黒色土層が堆積している。張り出し部のこ
の黒色土層直上から火箸・鉄錠片が出土している。
火箸は2本一対で出土(PL18)した。上半は左右

表10 17L19、20竪穴50東西セクション北壁土層<SPC～SPC'>

柱穴50 イ	1984/4 4月	花	埋立	ローム粒	火山灰	ヤケハーフ 膨性	粘土質	佛土粒	C微量
ロ	1984/4	花	埋立	ローム粒		サラサラ	ソフト	佛土粒	C微量
ハ	1984/4	花	埋立	ローム粒	火山灰	ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	C微量
ニ	1984/4	花	埋立	ローム粒		ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	C微量
ホ	1984/4	花	埋立	ローム粒	火山灰	ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	C微量
ヘ	1984/4	花	埋立	ローム粒		ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	C微量
ト	1984/4	花	埋立	ローム粒		ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	(ニ)よりヤケ弱い
チ	1984/4	花	埋立	ローム粒	青鐵	ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	C微量
リ	1984/4	花	埋立	ローム粒		ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	C微量
ヌ	1984/4 4月	花	埋立	ローム粒	少量	ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	(ダ)よりヤケ弱い
ル	1984/4	花	埋立	ローム粒	ローム粒少量	ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	ローム粒少量
ア	1984/4	花	埋立	ローム粒	ローム粒少量	ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	ローム粒少量
ワ	1984/4	花	埋立	ローム粒	ローム粒多量	ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	C微量
カ	1984/4	花	埋立	ローム粒		ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	C微量 (ワ)よりヤケ弱い
ヨ	1984/4	花	埋立	ローム粒	ローム粒少量	ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	C微量
タ	1984/4	花	埋立	ローム粒		ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	C微量
レ	1984/4	花	埋立	ローム粒	ローム粒	ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	(タ)よりヤケ弱い
ソ	1984/4	花	埋立	ローム粒		ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	C微量
ツ	1984/4	花	埋立	ローム粒	ローム粒	ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	C微量
オ	1984/4	花	埋立	ローム粒	ローム粒多量	ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	C微量
ナ	1984/4 3月	花	培養	埋立	ローム粒	ボロボロ	柔軟	佛土粒	C微量
ラ	1984/4	花	培養	埋立		ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	C微量 売少葉脱り
ム	1984/4 3月	花	培養	埋立	ローム粒多量	ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	C微量
ウ	1984/4	花	培養	埋立	ローム粒	ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	C微量
キ	1984/4	花	培養	埋立	ローム粒	ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	C微量
ノ	1984/4 4月	花	培養	埋立	ローム粒	ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	(ソ)よりヤケ弱い
オ	1984/4	花	培養	埋立	ローム粒	ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	C微量
柱穴51	あ	1984/2	灰	埋立				武化物	C微量
い	1984/4	花	埋立	ローム粒		サラサラ		佛土粒	C微量
う	1984/4	花	埋立	ローム粒	ローム粒多量	ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	C微量
え	1984/4	花	埋立	ローム粒		ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	C微量
む	1984/4	花	埋立	ローム粒	ローム粒	ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	ローム粒少量
か	1984/4	花	埋立	ローム粒		ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	C微量
ピット	a	1984/4	花	埋立	ローム粒	火山灰	ボロボロ	粗	C微量
b	1984/4	花	埋立	ローム粒	ローム粒多量	ヤケハーフ (ア)より柔	粗	佛土粒	C微量
c	1984/4 4月	花	埋立	ローム粒	ローム粒多量	ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	C微量

表11 17L19、20竪穴50南北セクション東壁土層<SPB～SPB'>

柱穴50 イ	1984/4	花	埋立	ローム粒	火山灰	ヤケ相		佛土粒	C微量
ロ	1984/4	花	埋立	ローム粒	火山灰多量	サラサラ	ソフト	佛土粒	C微量
ハ	1984/4	花	埋立	ローム粒	火山灰	ヤケソフト	柔軟	佛土粒	C微量
ニ	1984/4	花	埋立	ローム粒		ヤケソフト	柔軟	佛土粒	C微量
ホ	1984/4	花	埋立	ローム粒	ローム粒少量	ヤケソフト	柔軟	佛土粒	C微量
ト	1984/4 4月	花	埋立	ローム粒	ローム粒少量	ヤケソフト	柔軟	佛土粒	(オ)よりヤケ弱い
チ	1984/4	花	埋立	ローム粒	ローム粒少量	ヤケソフト	柔軟	佛土粒	(オ)よりヤケ弱い
リ	1984/4	花	埋立	ローム粒	ローム粒少量	ヤケソフト	柔軟	佛土粒	骨
ス	1984/4	花	埋立	ローム粒	ローム粒少量	ボロボロ	ソフト	佛土粒	炭化物
ル	1984/4	花	埋立	ローム粒	ローム粒多量	ヤケソフト	柔軟	佛土粒	炭化物
ア	1984/4	花	埋立	ローム粒	ローム粒少量	ソフト	柔軟	佛土粒	C微量
ワ	1984/4	花	埋立	ローム粒	ローム粒少量	ソフト	柔軟	佛土粒	C微量
カ	1984/4	花	埋立	ローム粒	ローム粒少量	ソフト	柔軟	佛土粒	C微量
ヨ	1984/4	花	埋立	ローム粒	ローム粒少量	ソフト	柔軟	佛土粒	C微量
タ	1984/4	花	埋立	ローム粒	ローム粒少量	ソフト	柔軟	佛土粒	C微量
レ	1984/4	花	埋立	ローム粒	ローム粒少量	ソフト	柔軟	佛土粒	C微量
ソ	1984/4 3月	花	培養	埋立	ローム粒	ヤケ相		佛土粒	C微量
ツ	1984/4	花	培養	埋立	ローム粒	ボロボロ	ソフト	佛土粒	C微量
オ	1984/4	花	培養	埋立		ヤケハーフ	柔軟	佛土粒	C微量
柱穴51	あ	1984/4	花	埋立	ローム粒	ソフト	柔軟	佛土粒	C微量
い	1984/4 4月	花	埋立	ローム粒		ヤケソフト	柔軟	佛土粒	C微量
				全層ローム	全層性		骨		

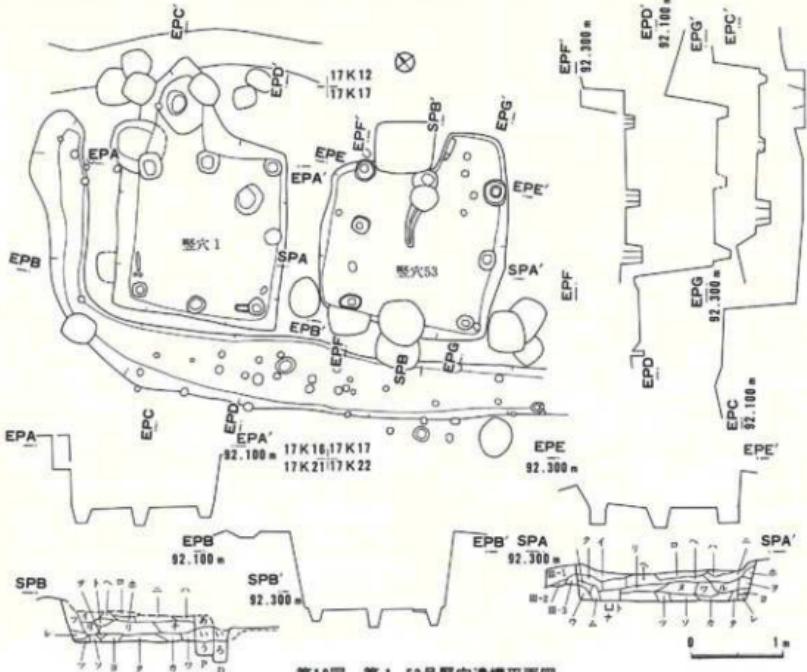
逆向き斜めに掻き切られる。頂部は環につくられ、別に飾状のものが付くと思われる。断面は角である(20図8、9)。本竪穴は第8号建物跡等の柱穴と重複している。更に南東半には、北東方向の近世の溝が覆土上半を縱断している。出土遺物は表16に示した。

第52号竪穴建物跡(第19図)：調査区東半、17K18区に位置する。立ち木の根方になるため一部の調査となつた。一辺は2m、今一辺は柱穴の位置から2.3m程、北東方向に長軸を持つ竪穴と推される。北が開口し、出入口の張り出し部と思われるが、先端は確認できなかつた。深さは40cm程で柱穴は長軸方向に並ぶ6個で、北東半の柱間の方が広くなるようである。第8号建物跡の柱穴P1077と重合するが土層の堆積(第3図SP. D-D')から、竪穴が新しいと推された。

第3号竪穴建物跡(第3図・付図)：調査区中央18K6区に位置する。昭和55年に調査したものである(概報II、12・14頁、附図2)。今回の調査で柱穴が8個と確認された。

第53号竪穴建物跡(第19図)：調査区東端、旧道跡の先端部東に接する16K25区に位置する。北半

部の壁と床が旧道路や近世の溝によって削られ、失われている。柱穴の位置等から2.6m前後の方形であったと推した。南東部に傾斜を持つ1.6m程の張り出しが付き出入り口となっている。深さは80cm程で、床面東、出入り口寄りに燒土と炭化物層が見られた。柱穴は8個(北東の1個は欠失)と推される。出入口部東半に4個の小柱穴と床面に続く溝が認められた。出入口の踏み板等に関連するものであろう。出入口北東壁下から第20図2の擂鉢が出土した(PL.12-3)。この擂鉢は勝山館から出土する中では古手の越前擂鉢であり、15c末～16c初めに属すると思われる。出入口部からのこの擂鉢の出土は、この竪穴が廃されて埋め戻される過程での流入と考えられるが、この竪穴を埋め戻し、その北半部の埋め土を肩にして、旧道路がつくられていることから、この旧道路がつくられた時期は、この越前産擂鉢の(廃された)年代に極く近い時間帯と想定されるところである。なお第20図3の擂鉢も本竪穴出土とした同時期の越前擂鉢であるが、出土位置が旧道路で欠失した竪穴北半の下部であり、後の流入の可能性もある。



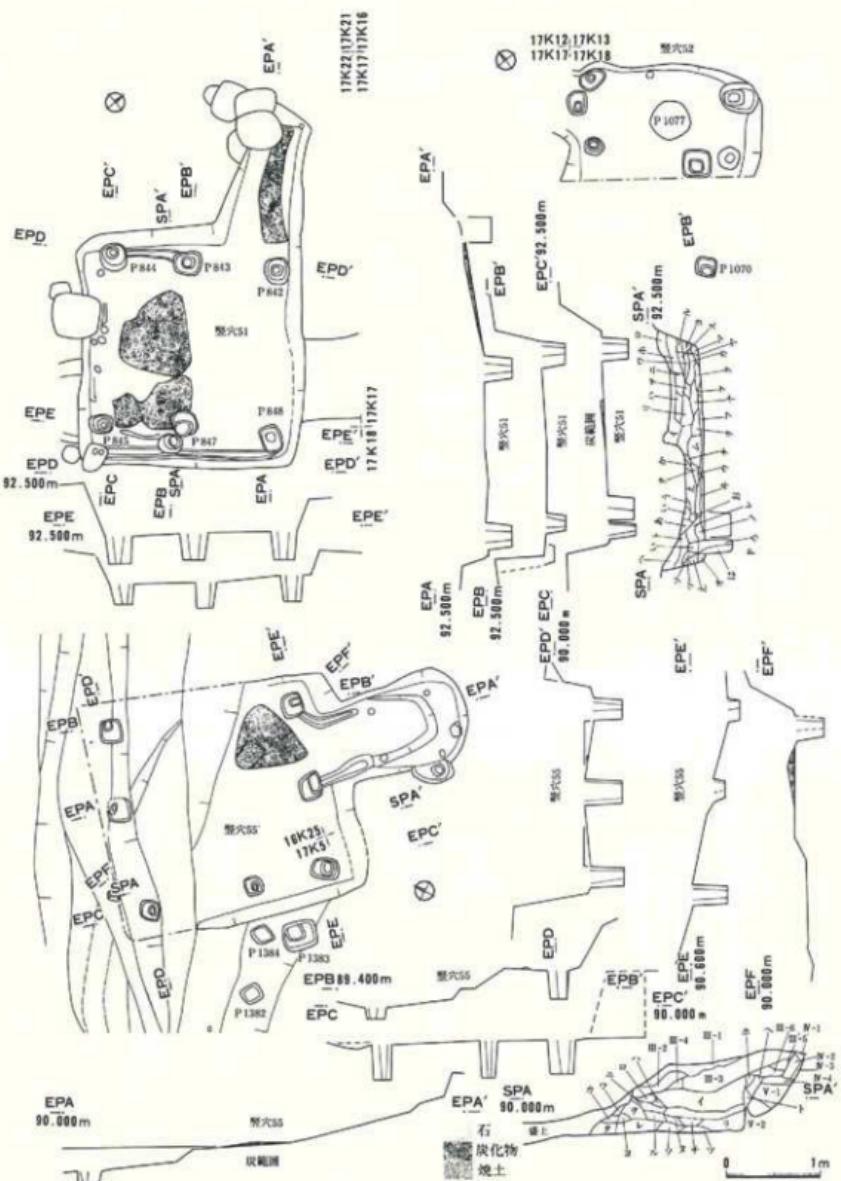
第18図 第1、53号豊穴造構平面図

表12 17K17豊穴53南北セクション西壁土層<SPA-A'>

R-1	17K17 基層	充填ローム	ハーフ	C
R-2	17K17A 基層	ローム	ソフト 基 チャーフ	
R-3	17K17B 基層			
豊穴53	17K17C 基層	ローム	<17K2-1C>	
ロ	17K17D C-1切通	ローム	ハーフ	
ハ	17K17E C-2切通	ローム		基土
ニ	17K17F C-3切通	ローム	チャーフ	
ホ	17K17G 基層	ローム		基土
ヘ	17K17H 基層	ローム	チャーフ	基土
ト	17K17I A/B 基層	ローム	ハーフ	基土
チ	17K17J 基層	ローム	ソフト	CBB
フ	17K17K A/B 基層	ローム		
メ	17K17L 基層	粘土	ハーフ	
リ	17K17M 基層	粘土少量	ローム	
リ	17K17N 基層	ローム少量	ソフト	
リ	17K17O 基層	粘土		基土少
リ	17K17P 基層	ローム		C
シ	17K17Q 基層	粘土		基土少
ソ	17K17R 基層	ロームプロフ		C
ソ	17K17S 基層	ロームプロフ		
ホ	17K17T A/B 基層	粘土少量 ローム	ソフト	CBB
ホ	17K17U 基層	粘土	ハーフ	
リ	17K17V 基層	粘土	ハーフ	
リ	17K17W 基層	粘土	ハーフ	
リ	17K17X 基層	粘土	ハーフ	
リ	17K17Y 基層	粘土	ハーフ	

表13 17K17豊穴53東西セクション北壁土層<SPB-B'>

豊穴53	北壁土層	東壁	C
ロ	17K17A C-1切通	ローム	ハーフ
ハ	17K17B C-2切通	ローム	ハーフ
ニ	17K17C 基層	ローム	ハーフ
ホ	17K17D 実層	ローム	基土
ヘ	17K17E 実層	粘土	基土
ト	17K17F 基層	ローム	（ヘ）より基土
チ	17K17G 基層	ローム 大量漂浮	基土
リ	17K17H 基層	粘土少量	ナラ底
リ	17K17I A/B 基層	粘土少量	ナラ底大
メ	17K17J 基層	粘土少量	
メ	17K17K 基層	コムプロフ	C少
フ	17K17L 基層	粘土	（シ）よりナラナ
メ	17K17M 基層	粘土	（シ）よりナラ
リ	17K17N 基層	コム	ナラ少
リ	17K17O 基層	コムロット	ナラ 大
リ	17K17P 基層	粘土少量 ローム	ナラ 大
リ	17K17Q 基層	ローム	ナラ
リ	17K17R 基層	ロームプロフ	C
リ	17K17S 基層	ローム	
リ	17K17T 基層	粘土少量	
リ	17K17U 基層	ローム	
リ	17K17V 基層	ローム	
リ	17K17W 基層	ローム	
リ	17K17X 基層	ローム	
リ	17K17Y 基層	ローム	
リ	17K17Z 基層	ローム	



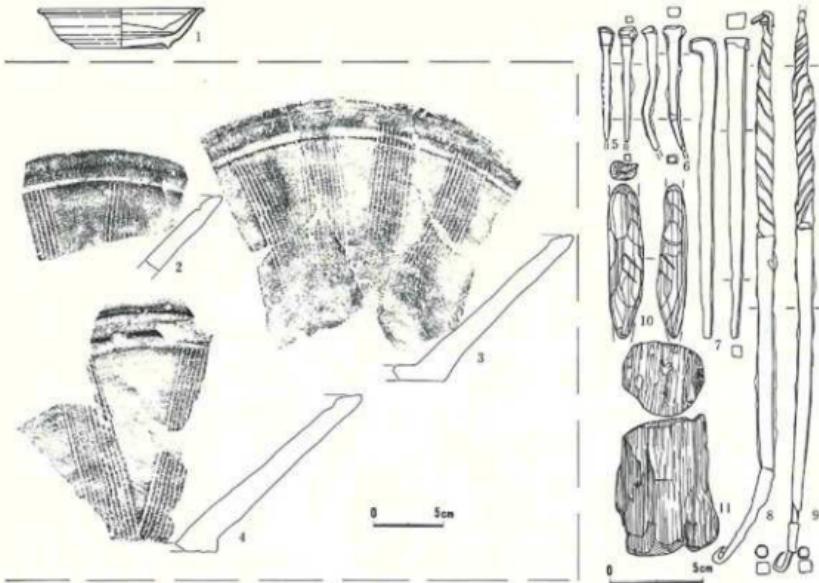
第19図 第51、52、55号竪穴造構平面図

表14 17K22、23堅穴51南北セクション西盤土層<SPA~SPA'>

表15 17K6-17J1堅穴55南北セクション東壁土層<SPA~SPA'>

表16 壁穴建物跡出土遺物一覧

No.	種別	部 庫	口径	底径	高さ	形 調	施 土	特 性	備考	図版番号	
第49号 壁穴 建物跡	白 板	直	15.0mm	10.0mm	7.0mm	カサイ-型 真珠の白	白	場なり口縫片	E-1	PL18_27	
	マ ダ						白	△ 口縫小鏡片	E-1		
	マ ダ					真珠の白	白	△ 口縫小鏡片	E-1		
	マ ダ					真珠の白	反対面 真珠の白	△ 口縫小鏡片	E-1		
	木 竹 竹 木	直	(14.8)			真珠の白	真珠の白	同上	PL18_36		
	木 竹 木	直	(14.8)			ベージュ	ベージュ	同上	PL18_38		
	木 竹 木	直	(14.8)			に似た真珠のオレンジ	に似た真珠のオレンジ	同上	E-5		
	計									7点	
第49号 壁穴 建物跡	陶器	瓶	幅 13mm	底径 10mm	高さ 117mm	重さ 17.1g	1点	特 性	回収番号	種別番号	寸 例
	赤	丸	7	6	(25)	2.0		柱	(19)	(33)	状
	黄	丸	7	4	(25)	1.3	3点	*	(15)	(46)	
	不明物	丸					小計				2点
第50号 壁穴 建物跡	白 板	直				小口 1点		特 性		回収番号	
	マ ダ							柱			
	マ ダ							*			
	木 竹 木	直						柱			
	木 竹 木	直						*			
	木 竹 木	直						柱			
	木 竹 木	直						*			
	計										33点
第50号 壁穴 建物跡	陶器	瓶	幅 7mm	底径 7mm	高さ (61)mm	重さ 5.3g	特 性	回収番号	種別番号	寸 例	回収番号
	白	丸			4.0		* (14.5mm) 3点	20825			20810
	白	丸					小口 <10mmまで	柱			
	白	丸					小口				1点
第51号 壁穴 建物跡	白 板	直	12mm	7mm	22mm	重さ 1.2g	特 性	回収番号	種別番号	寸 例	回収番号
	マ ダ										
	マ ダ										
	木 竹 木	直	(84)	(42)	22	うすい直筒	ベージュ	柱			17832
	木 竹 木	直	(112)				*				
	木 竹 木	直	(34)	3.5		グレイムの質	ブラウンの白	柱			17832
	木 竹 木	直	(34)	3.5		のたの質感作り出不規	ブラウンの白	柱			
	計										18点
第51号 壁穴 建物跡	陶器	瓶	幅 5mm	底径 5mm	高さ 23mm	重さ 1.3g	特 性	回収番号	種別番号	寸 例	回収番号
	白	丸	4-6				* (4-6mm) 1点	20826			20810
	白	丸	7	7	29.0	26	重さ 69g	柱			
	白	丸	7	7	29.0	37.3	*	20827			
第52号 壁穴 建物跡	白 板	直	5mm	5mm	25mm	重さ 1.3g	特 性	回収番号	種別番号	寸 例	回収番号
	マ ダ										
	マ ダ										
	木 竹 木	直	11mm	7mm	(66)mm	重さ 69g	特 性 先端部欠損	20828			20810
	木 竹 木	直	9	6	(58)	2.8	*	20829			
	木 竹 木	直	7	7	(34)	3.5	*	20830			
	木 竹 木	直	5	5	(18)	1.0	先端部欠損	20831			
	計										30点
第53号 壁穴 建物跡	白 板	直	12mm	7mm	26mm	重さ 4.5g	特 性	回収番号	種別番号	寸 例	回収番号
	マ ダ										
	マ ダ										
	木 竹 木	直	12mm	7mm	26mm	重さ 4.5g	特 性	20832			20810
	木 竹 木	直	5	5	(18)	1.0	先端部欠損	20833			
	木 竹 木	直	11	9	(24)	2.5	先端部欠損	20834			
	木 竹 木	直	11	9	(24)	2.5	先端部欠損	20835			
	計										21点
第54号 壁穴 建物跡	白 板	直	12mm	7mm	26mm	重さ 4.5g	特 性	回収番号	種別番号	寸 例	回収番号
	マ ダ										
	マ ダ										
	木 竹 木	直	12mm	7mm	26mm	重さ 4.5g	特 性	20836			20810
	木 竹 木	直	5	5	(18)	1.0	先端部欠損	20837			
	木 竹 木	直	11.8	7.0	26	重さ 4.5g	特 性	20838			
	木 竹 木	直	11.8	7.0	26	重さ 4.5g	特 性	20839			
	計										4点
第55号 壁穴 建物跡	陶器	瓶	幅 15mm	底径 10mm	高さ 40mm	重さ 40g	特 性	回収番号	種別番号	寸 例	回収番号
	白	丸	144	81	45	820	上部に5mm×3mmの凹	20840			3点



第20図 積穴遺構他出土遺物

b 土壙

旧道路北西半で11基、南東半で2基の土壙を調査した。主なものについて概要を述べる。なお土壙6としたものは昭和55年度の調査で位置が確認され縦穴と推測されていたものである。内部で柱穴を検出できなかったため土壙としたが、土層の堆積状況は他の縦穴覆土に近いようである。

土壙3（第23図）：調査区北東端17L19区で検出。開口部径95cm、底径70cmの円形で、深さは60cm程度である。側壁中ほどにわずかであるが駿を持ち、底部はほぼ水平である。周辺には、土壙に関係すると思われる小ビットが5個確認された。

炭化物を大量に含んだ黒色土層がU字状に堆積しており（ソ-1・ソ-2・ツ・ネ・ナ・ラ）、その上に炭化物・焼土・ローム粒を少量含む暗褐色土層が堆積している。

遺物は、ヨから羽口、ネから鉄製釣（26図27）、出土地点は不明だが同じくネから鉄釉碗が出土した。羽口は、先端部のみ残存するが、かなり焼け

ていて劣化が激しく、使用した後この土壙に捨てられたものと思われる。釣はほぼ完形で出土した。釣形部分が全長の3分の2までおよび、尖っている。使用されていたか否かは判断できないが、火熱を受けた形跡はない。鉄釉碗は、胴部の破片が2.2×3.2cm残っているだけで種別は特定できない。鉄釉碗も火熱を受けていない。このほか、表には示し得なかつたが、覆土中から鍛冶剝片とともにスラッグともつかない不明溶解物が出土した。

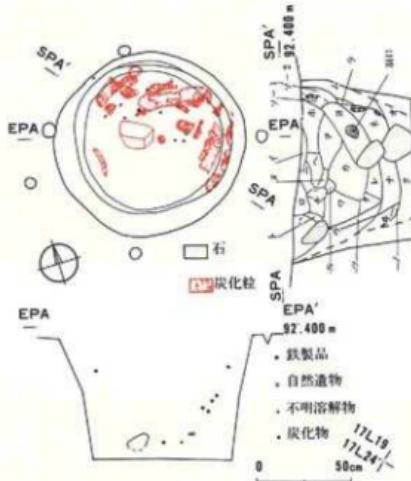
上記の鉄製釣や鉄釉碗、土壙中に埋められた石に火熱を受けた形跡がないこと、炭化物が多量に出土しているのに比べて焼土が少ないとからこの場で火を使用したとは考えにくい。出土した遺物から、鍛冶で生じた炭の燃え残りなどをこの場所に廻棄し、黒色土のすぐ上から羽口が出土していることから、作業終了後直ちに埋められたものと思われる。しかし、土壙3周辺で鍛冶が行われていたような遺構が検出できなかったこと、黒色土層が壁に沿ってU字状に堆積していたこと

等不審な点が残る。この土壤の具体的な使われ方も含めて今後の課題としたい。

尚、土壤の形状、周辺に小ピットを伴うこと、炭化物がU(V)字状に堆積していること、鉄製品や鍛造剝片など鍛冶に関係した遺物が出土していることなど、17M 6区で検出された土壤22と同様の遺構と考えられる(本報第III)。(佐藤)

土壤5(第17図)：調査区中央北、17L15区に位置する。第49号堅穴建物跡覆土上部で検出された。一辺が1.3m前後の方形で、深さは25cmの浅い土壤

と思われる。堅穴49は昭和55年度の調査で確認されたが、この時SPA・A'ラインから平行に40cm程の幅でトレンチをいれ反対面で土層の堆積を観察している。この為、今年度の調査ではA'A'面で土層の観察を行うこととし、北東半を半分程掘り下げた。その後南西半の掘り下げを行ったところ、南側に火山灰を多く含み、軟い土の堆積する部分が見られ、馬歯が数個出土した。この軟い土の堆積部分を掘り広げた所、その部分に釘、鉄錠片等20点が出土した。第49号堅穴の覆土がローム質で



第21図 土壌3平面図他

表17 土壌3 出土遺物観察表

種別	器種	口径	底径	器高	輪	調	胎	土	特	徵	備	考	図版番号
美濃 鉄錠	球					ブラウンみの黒		ベージュ		天目 体部			PL.2-3
種別	器種	幅	厚さ	長さ	重量g	特	徵		特	徵	備	考	図版番号
釘		11	12	235	51	ほぼ完形	先端部が全体の2/3まで弯曲し鋭く尖る		51				26図27
羽口					184.1	先端部のみ	火熱を受けて劣化が激しい						PL.2-4
鐵錠					23.3	不明溶解物が付着	磁着せず	羽口の先端か					
骨片					0.1	魚骨							

堅く締っている（表18・第17回S P D・D'いへほ）ので、それを基準に振り広げたが南西部の壁の立ち上りは明瞭でなく、北東部は前述の昭和55年のトレンチで欠失している。又床（底）面の状態も凹凸があり、傾斜しているなど全体に安定していないが土層の堆積状況（第17回D D'）と遺物の集中から土壤とした。なお、平面図と土層図の調整を誤り一部顕顕を生じている。

土壤23（第22回）：調査区南東寄り17J 1・17J 2区より検出。1.5×2 m程、深さ約10cmの隅丸方形である。壁ははっきりせず北西側・北東側は掘り過ぎたため確認できなかった。また南側は堅穴54のために切られている。覆土は焼土粒と炭化物が混じった粘性のない黒褐色土で柔らかな層である。周辺には焼土11・18・19・20がある。

遺物は表21の通りである。回転式鉗頭（22回12）が勝山館跡で出土したのは今回が2例目である。

前回（本報IV）出土した鉗頭は索孔が縦に2個ついた様の装着されないタイプであったが、今回出土した鉗頭は縦の装着部分や索溝があること、索孔がないことから宇田川洋氏が縄文文化期のd類としたグループ（『アイヌ文化成立史』）に近い特徴を持つ。しかし、回転式鉗頭における宇田川氏の時代区分と勝山館の時期が合わないこと、鉗が3つにわかっている点など不明な点が残されており、今後の課題としたい。染付皿は47点中2点を除きすべて獣子皿で、本報IVでIII-Aとしたグループに属すると考えられる。

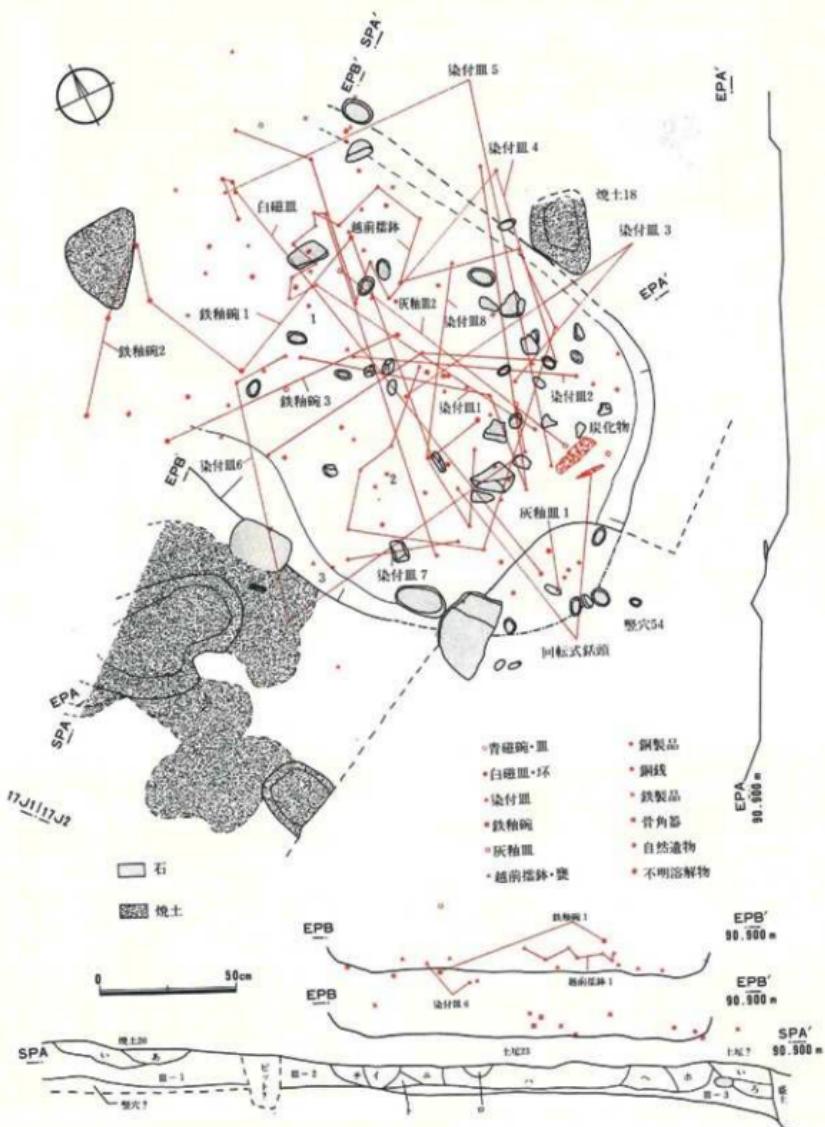
出土した遺物に一貫性がないこと、接合する遺物同士が集中しておらず土壤全体に散らばっていることなどから、この土壤は不要なものを使棄した場所ではないかと思われる。遺物の中には火熱を受けたものと、全く受けていないものがあり、両者が接合するものはなかった。覆土中の焼土も

表18 土壤5 出土遺物一覧

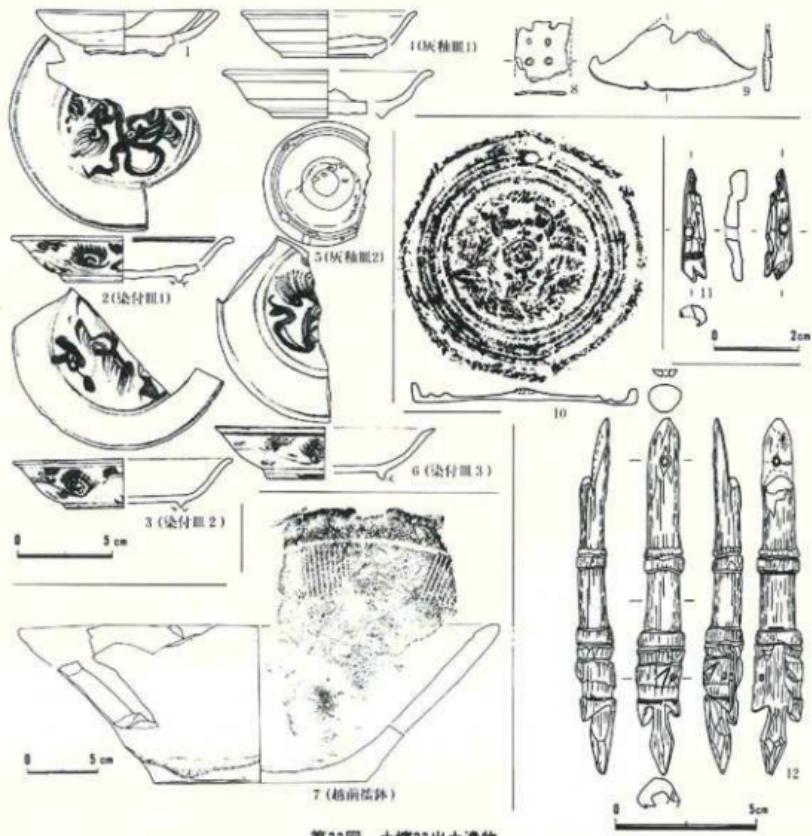
種別	器種	口径	底径	縦高	横 突	胎 土	特	種	量	備 考	国版番号							
灰陶皿						グレイムの裏	グレイムのオーリップ	陶反り口縁小瓶片	1点									
越前鉢跡						グレイムのラクソ	ベージュ	口縁小瓶片	1点									
種別	器種	幅	厚さ	長さ	重量	特	種	説明番号	種別	器種	幅	厚さ	長さ	重量	特	種	説明番号	
骨						馬齒			馬齒	馬齒	2mm ~6mm			小片~90mm大まで	14点			
銀製品	釘					鋸風呂（新切頭底3点合）	6点		計						20点			

表19 17L25土壤5南北セクション西壁土層

土壤5 イ	100E4 4/4	にぶい黄褐色	薄	縫隙	ローム粒	火山灰	サラサラ ソフト		焼土粒	C少量	
ロ	100E4 4	褐		縫隙	ローム粒		ヤケハード		焼土粒	C少量	
ハ	100E5 4	黄褐色		縫隙	ローム粒		ハード		焼土粒	C少量	
ニ	100E4 4			縫隙	ローム粒				焼土粒	C少量	
ホ	100E4 4/4	にぶい黄褐色	薄	縫隙	ローム粒	火山灰	ヤケハード		焼土粒	C少量	
ヘ	100E4 4/4	にぶい黄褐色	薄	縫隙	ローム粒	火山灰	ヤケハード		焼土粒	C少量	
ト	100E4 4/4	にぶい黄褐色	薄	縫隙	ローム粒	火山灰	サラサラ ソフト		焼土粒	C少量	
チ	100E4 4/4	にぶい黄褐色	薄	縫隙	ローム粒	火山灰	ヤケハード		焼土粒	C少量	
リ	100E5 4	黄褐色		縫隙	ローム粒		サラサラ ソフト		焼土粒	C少量	
ス	100E4 4	褐		縫隙	ローム粒	火山灰	ハード		焼土粒	C少量	
ル	100E4 3/4			縫隙	ローム粒	火山灰	ソフト		焼土粒	C少量	
フ	100E4	褐		縫隙	ローム粒	火山灰	ソフト		焼土粒	C少量	
カ	100E4	褐		縫隙	ローム粒	火山灰	ソフト		焼土粒	C少量	
ヨ	100E4	褐		縫隙	ローム粒	火山灰	ハード		焼土粒	C少量	
タ	100E4	褐		縫隙	ローム粒	火山灰	ヤケハード		焼土粒	C少量	
レ	100E4	褐		縫隙	ローム粒多量		ヤケハード		焼土粒	C少量	
ゾ	100E4	褐		縫隙	ローム粒	火山灰	ソフト		焼土粒	C少量	
ツ	100E4	褐		縫隙	ローム粒	火山灰	ソフト		焼土粒	C少量	
ネ	100E4	褐		縫隙	ローム粒		ソフト		焼土粒	C少量	
ナ	100E4	褐		縫隙	ローム粒	火山灰	ソフト		焼土粒	C少量	
ラ	100E4	褐		縫隙	ローム粒	火山灰	ソフト		焼土粒	C少量	
ム	100E4	褐		縫隙	ローム粒	火山灰	ハード		焼土粒	C少量	
空穴49	ト	100E4	褐	縫隙	ローム粒	火山灰	ハード		焼土粒	C少量	
カ	100E4	褐		縫隙	ローム粒		ハード		焼土粒	(イ) よりヤケ高い	
は	100E4	褐		縫隙	ローム粒		ハード		焼土粒	(イ) よりヤケ高い	
に	100E4	褐		縫隙	ローム粒	火山灰	ハード		焼土粒	C少量	
ほ	100E4	褐		縫隙	ローム粒	火山灰	ヤケソフト		焼土粒	C少量	
へ	100E4	褐		縫隙	ローム粒		ヤケソフト	属性	焼土粒	C少量	



第22図 土壌23平面図他



第23図 土壌23出土遺物

表20 17J1・17J2 土壌23南壁土層堆積<SPA~A'>

Ⅲ-1	10YR5/4にぶい黄褐色 2 7.5YR4/4 黄褐色 3 10YR2/3 黑褐色	礫粒 焼土粒微量 全面シルト ローム粒	サラサラ ソフト サラサラ ソフト サラサラ ソフト	土器まじり C多量
土壤23 イ	10YR3/3 暗褐色 ロ 10TR3/4 暗褐色 ハ 10YR2/2 黒褐色 ニ 10YR3/4 暗褐色 ホ 10YR2/3 黑褐色 ヘ 10YR2/2 黑褐色 ト 10YR2/3 黑褐色 チ 10YR2/3 黑褐色	火山灰少量 焼土粒少量 ローム粒少量 焼土粒少量 ローム粒 火山灰少量 焼土粒少量 ローム粒 焼土粒 ローム粒 焼土粒 烧土粒 ローム粒微量 烧土粒	全体っぽくややザラザラ ソフト サラサラ ソフト サラサラ ソフト 全体っぽくややザラザラ ソフト サラサラ ソフト サラサラ ソフト 砂っぽくザラザラ ソフト サラサラ ソフト	C少量 C少量 全面C多量 炭化物 E C少量 全面C多量 (II-3) よりやや暗い 全面C多量 炭化物 石器 全面C多量 炭化物 E C多量
土壤 ? い	10YR3/3 暗褐色 ろ 10YR2/2 黑褐色	ローム粒 烧土粒微量 烧土粒	サラサラ ソフト サラサラ ソフト	C多量 鉄澤 全面C多量
聖穴 ?	7.5YR4/4 黄褐色	礫粒、基盤礫多量 大山灰 烧土粒	しまりなし	C少量

表21 17J1・17J2土壤23出土遺物觀察表（陶磁器・鉄製品他）

種別	基盤	口径	底径	高さ	陶 瓶		陶 土		骨 陶		陶 壷		(施用件数)
					内	外	内	外	内	外	内	外	
青磁					グレイッシュオリーブグリーン	あかいろオリーブのグレイ	胴部						
青磁瓶					にぼい黄緑	うすいベージュ	底部から 外に反する						
白磁瓶	94	44	26		真みの白	白	丸足	両面部分が露呈しており 火熱を受けた	火熱を受けた		火熱を受けた		3388.1
白磁壺					白	白	胴部	火熱を受けた			火熱受けた		
焼付瓶	120	62	34.5		あかるいグレイ	真みの白	瓶底	うすいベージュ	外側磨擦文		5点複合 (うち1点土地区不規)		
焼付瓶	118	62	36.5		真みの白	真みの白	瓶底	うすいベージュ	外側磨擦文	火熱を受けた	21回火熱2	3388.2	
焼付瓶	119	62	39		真みの白	あかいろグレイ	瓶底	うすいベージュ	外側磨擦文	火熱を受けた	21回火熱2	3388.3	
焼付瓶	118	70	28		真みの白	真みの白	瓶底	うすいベージュ	外側磨擦文	火熱を受けた	21回火熱3	3388.4	
焼付瓶	120	64	26.5		真みの白	真みの白	瓶底	うすいベージュ	外側磨擦文	火熱を受けた	21回火熱4	3388.5	
焼付瓶	120	64	27		真みの白	白	瓶底	うすいベージュ	外側磨擦文	火熱を受けた	21回火熱4	3388.6	
焼付瓶	130	64	37		真みの白	白	瓶底	うすいベージュ	外側磨擦文	火熱を受けた	21回火熱4	3388.7	
焼付瓶	120	62	28		真みの白	白	瓶底	うすいベージュ	外側磨擦文	火熱を受けた	21回火熱4	3388.8	
焼付瓶	130	64	27		真みの白	真みの白	瓶底	うすいベージュ	外側磨擦文	火熱を受けた	21回火熱4	3388.9	
小計											47点		
青磁・灰釉瓶	判	39	26		グレイッシュオリーブ	うすいベージュ	瓶底	全表面	全表面			21回火熱1	3388.4
青磁・灰釉瓶	112	59	22.5		グレイッシュオリーブ	ベージュ	瓶底	全表面	全表面			21回火熱2	3388.5
小計											9点		
充満・灰釉瓶	126	47	68		くらいいグレイッシュオリーブ	明るいオリーブのグレイ	天目	火熱を受けた			6点複合 (うち1点土地区不規)		
充満・灰釉瓶	115				くらいいグレイッシュオリーブ	うすいベージュ	天目	底部欠損			3点複合 (うち1点土地区不規)		
充満・灰釉瓶					くらいいグレイッシュオリーブ	ベージュ	天目	火熱を受けた			3点複合 (うち1点土地区不規)		
充満・灰釉瓶					くらいいグレイッシュオリーブ	ベージュ	天目	火熱を受けた			3点複合 (うち1点土地区不規)		
小計											12点		
総計	焼付	380	150	111		うすいベージュ						14点複合 (うち1点土地区不規)	3388.7
小計											33点		
被覆・甕					プラウンムのグレイ	グレイ					被覆 (文字不明)あり		
被覆・甕					プラウンムのグレイ	あかいろオリーブのグレイ							
被覆・甕					くらいいプラウンムのグレイ	プラウンムのグレイ							
小計											3点		
計											110点		

種別	幅	厚さ	高さ	底径	重量g	特徴	備考	施用件数	種別	特徴	幅	厚さ	高さ	底径	重量g	特徴	備考	施用件数
小判	30	1	(55)	8.1	平底?				大判金	84	3	(24)	16.7	源氏欠損				21回火熱9
小判	20	2	(26)	3.5	平底?				計				85.1	19点				
小判	27	1	(29)	3.7	2.2日目				鋼錠金具				2.3	両面欠損	22回火1			
小計					5点 (その他の小片2片)													
釘	4	4	4.7	3.5	3.5	円錐	定形											
釘	9	4	(3.8)	3.5	3.5	内向?	先端部欠損											
釘	4.5	4	5.3	3	向右?													
釘	4.5	3	5.8	1.4	内向?													
釘	10	5	6.2	4.3	向右?													
釘	10	4	(4.2)	3.6	内向?	ほぼ定形			鋼錠				0.8	重食のため2/3欠損	22回火2			
釘	9	5	(4.3)	3	内向?	ほぼ定形			計				5点					
釘	10	4	9.7	3.5	内向?	ほぼ定形												
釘	(3.5)	2.5	(25)	0.4	内向?	先端部のみ												
釘?	10	10	(70)	7.5	向右?	先端部のみ												
釘?	9	8	(81)	2.7	向右?	先端部のみ												
小計					11点													
鋼					10	2.2	折											
鋼					6.7	小片一折												
									鋼製式鉤頭	17	14	125						
									鉤頭?	7	4.5	27						
									小判欠損鉤頭	5	4.5	27						
									小判鉤頭	7	5.5	(39)	2.2					
									中柄	9.5	6.5	(35)	1.7					
									中柄	6	6	(20.5)	0.5					
									計				5点					

一様に入っていて集中しては検出されなかつた。おそらく別の場所で火熱を受けて割れてからこの土壌に投げ捨てられたのであらう。

今回勝山館の中心部で陶磁器や金属製品などと一緒に回転式鉗頭を始めとする骨角器が出土したことは注目に値する。しかし、この土壌の性格は、関係すると思われる周辺の焼土の実態がつかめなかつたため、廐棄場所であること以上にはわからなかつた。切り合ひ関係にある堅穴54も来年度調査予定地区にかかる調査をしなかつたので、これらを含めて今後の課題としたい。（佐藤）

(6) 旧道跡・大型柱穴・福列跡

a 旧道跡（第3図・附図）：平成2年度の発掘調査で第二平坦面の調査区南部に溝に挟まれた旧道跡を検出した。旧道跡両側の溝は各々新旧2条があり、通路のつくりかえを想定した。その道幅は3.2m程とし、館の主体部中央を縱貫すると予測したが、道幅は改修に伴う溝の移動を考えると今少し広く3.6m余、12尺2間道路となるようであつた（概報Ⅱ-14・15図、24・45頁）。

本年度調査区南東半で北東から南西に延びる溝状の遺構が検出され（附図溝1・1'～5'）、それに北西半では既述の遺物跡の建つ地割を画す溝がほぼ直交し、南東部も同様の溝が未調査区に統合しており、この平行する北東方向の溝の両側には、左右同じ様な溝で囲まれた地割面があり、そこに建物が建てられていたと推することができよう。

この併行する溝は、平成2年度の調査で旧道跡の側溝跡としたものに連続するものであり、この

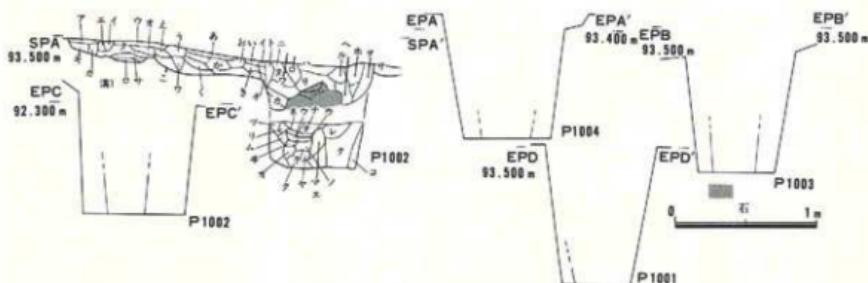
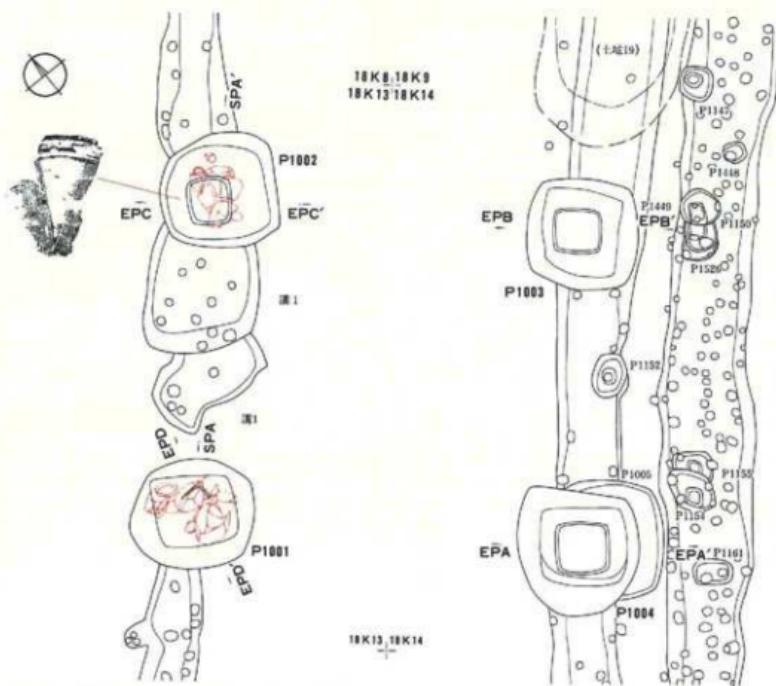
間の部分を旧道跡とすることができるかと推される。先年度の調査結果からは、3.2～3.6mの幅を持って、両側に各2条の溝跡が連り、共に北西側が新しいという前後関係で把えられると推されたところであるが、途中で、各2条の重なりや識別、確認が曖昧になり、明瞭に把握できなかつた。この為もあるのか、調査区南西端での旧道跡の幅は2.5～3.3m程となつてある。道路面確認の方法と溝跡の追求が不充分なことによるものであり、旧道跡の幅、溝跡の新旧等は今少し検討するとともに機会を得て溝跡周辺の確認調査を期すこととした。今年度の調査では先年度の調査で検出の旧道跡が連続し、館の中央部を貫いている事が予測されたとするに止めた。

b 大型柱穴（第24図）：調査区南方端、18K 13・14区に位置する。旧道跡道路面上に、掘り方の一边が80～85cm、深さ85～100cmの柱穴が4個検出された。内3個で、一边が30～40cmの角柱の痕跡が確認された。土層の堆積は下段では痕跡を示すソフトで碎粒を多く含むやや暗めの土と、掘り方覆土の堅く締った粘土層があり、中層には硬がかなり集中し上半はロームブロック混りの埋め土と思われる土からなっている。

この4個の柱穴は、旧道跡を跨ぐようにほぼ道幅一杯の間隔で2個ずつ4個がやや方形に並んでいる。旧道跡を跨ぐ方向の柱穴間の距離は約2.7m（約9尺）、旧道跡に併行する方向のそれは約2.1m（7尺）である（柱穴芯間の距離）。東角の柱痕跡の位置に15cm程のズレがあり矩が少しい、びつ

表22 大型柱穴（P.1002）他出土遺物一覧

No.	種別	器種	口径	底径	基高	胎調	胎土	特徴				回収番号
								幅	厚さ	長さ	重量	
1.102	尖端式柱頭					グレイムの黄	クチイ・黄					底面破片
	柱頭					グレイムのブラウン	#					調査日10条1単位
	計											18815 20084
	種別	種	幅	厚さ	長さ	重量	特徴	回収番号				
	鍋						口縁部小片 1点					
2.105	種別	種	幅	厚さ	長さ	重量	特徴	回収番号				
	不規則	(32.5)	(46)	72.5			1点					
	種別	器種	口径	底径	基高	胎調	胎土	特徴	回収番号			
ミゾー	青磁	斜付皿	136mm	76mm	27mm	グレイムの黄緑	黄緑の白	縫合の形跡 見込みマツリ模花				
	染付	碗				ウサ・黄緑	白	脚部小片				
	焼付	皿				クチイ・青緑の緑	白	基脚部 底盤小片				
	計											3点
	種別	器種	幅	厚さ	長さ	重量	特徴	回収番号				
	鉢						折損品 4点					
	鍋		6mm～5mm				小片 2点					



第24図 大型柱穴平面図

になるが、7×9尺の方形の柱組ともできそうである。

柱穴（P）1002を掘り下げる過程中でその直近から青磁染付皿が出土し（P.L.14-2），更に痕跡内から越前摺鉢片が出土した（第20図4、25図4）。他に美濃皿が出土している。調査時には浅い土壇かとも推した溝1の統計（1'）からは前述の青磁染付皿の他、染付碗・皿、釘なども出土している（表22）。

これらの柱穴は柱痕跡の一辺の大きさが勝山館内的一般の建物跡の柱穴掘り方のそれに近く、その深さも深く、大型のしっかりした柱が立てられていたと推される。4個一組とする門のような物を想定したところではあるが、前述のように、旧道跡の道幅と溝の位置を正確に把えなかったことから、門とした場合に、それぞれの位置関係を明確に示せない現状にある。更に、館の正面、第一平垣面から大きな空堀に架かる橋を渡って、第二平垣面入口から約43m程も内へ入った位置に設けられるこうした施設の機能・性格が不明である。こうしたことから、旧道跡に併行する北東方向の2個一組（7尺間）の、旧道跡両側の建物跡敷地と関連の施設としての可能性も含め、この遺構の性格付けについては更に検討をしてみたく思うものである。

c 横列跡：平成4年度の調査で第二平坦面の北～北西斜面肩に横列の巡ることが知られた。今年はこの横列の延長を知る為、西へ30mの間にト

レンチを4区画設定し確認を行った。柵2条が検出されたが、土壇が重複したり、柱穴が接続しており、面的に調査することが必要と思われたので確認だけとした。なお4年度の調査で一部見られた、柵列跡溝直上の集石は見られなかった（P.L.2）。

(7) 出土遺物の概要

窓穴跡物、土壇等の遺物の一部については、その都度概述した。その他の出土遺物の主な物を第26、27、28図、P.L.2、3、6～19と、表24～26に示した。

a 陶器器

總破片数2,568点の内、近世が79点、他の殆んどは15～16世紀の所産である。2,489点のうち国産品が1,534点舶載品が955点、約48%が舶載品である。又全破片数の67%は碗皿類であり、この57%は舶載品となる。

青磁：碗は直口縁のもので線引き連弁、無文のものが殆んどである。外面口縁直下に凹線の巡る物（P.L.16-8）、口唇が若干外反し、広い幅で沈線が縱におろされる例（5）、雷文帯の施される例（P.L.2）などがある。又高台外面に緋位の沈線が刻まれるものもある。皿は絞花皿である。盤（P.L.19-38-39）は過年度出土の物（概報Ⅲ P.L.7-8）に近いようである。季朝かと推した碗もある（第25図1、P.L.2-3左下）。香炉（P.L.2-4中央上）、同脚部？様の不明のもの（同下左）もある。

表23 18K13東西セクション北壁土層<SPA～A'>

■1 ア	10784/4 磁	直口 縁	ソフト		
イ	10784/6 磁	直口 縁	ハード		
ウ	10784/4 磁	直口 縁	ソフト		
エ	10784/6 磁	直口 縁	ハード		
オ	10784/6 にぶい・黄斑	直口 縁	ハード		
カ	10784/3 磁	直口 縁	ハード		
キ	10784/6 磁	U-口 縁	ハード		
ケ	10784/4 磁	U-口 縁	ハード		
コ	10783/2 柄陶	直口 縁	ソフト		
サ	10783/2 柄陶	直口 縁	ハード		
ツ	10783/2 柄陶	直口 縁	ハード		
■1 ハ	10784/3 にぶい・黄斑	直口 縁	ハード	79件	
イ	10784/4 磁	直口 縁	C微量		
ウ	10782/4 柄陶	直口 縁			
エ	10784/4 磁	直口 縁			
オ	10783/2 柄陶	直口 縁			
カ	10783/3 柄陶	直口 縁			
キ	10784/3 にぶい・黄斑	直口 縁	ハード		
ケ	10782/2 黒陶	U-口 縁	ソフト		
コ	10782/2 黑陶	直口 縁			
サ	10783/2 柄陶	直口 縁	ソフト		
ツ	10783/2 柄陶	直口 縁	ソフト		
■1 ハ	10784/3 にぶい・黄斑	直口 縁	C微量		
イ	10782/4 柄陶	直口 縁	C微量		
ウ	10784/4 磁	直口 縁			
エ	10783/2 柄陶	直口 縁			
オ	10783/4 にぶい・黄斑	直口 縁	ソフト		
カ	10783/4 柄陶	直口 縁	ソフト		
キ	10782/3 柄陶	直口 縁	ソフト		
ケ	10783/4 柄陶	直口 縁	ソフト		
コ	10783/4 柄陶	直口 縁	ソフト		
サ	10783/4 柄陶	直口 縁	ソフト		
ツ	10783/4 柄陶	直口 縁	ソフト		

ヘ	10784/4 磁	直口 縁	ローブラック系	5件	
チ	10782/4 柄陶	直口 縁	ローブラック系		
リ	10784/4 磁	直口 縁	ローブラック系		
ヌ	10783/4 柄陶	直口 縁	ローブラック系		
ル	10782/2 柄陶	直口 縁	ローブラック系		
ヲ	10784/6 磁	直口 縁	ローブラック系		
ワ	10784/4 磁	直口 縁	ローブラック系		
カ	10783/2 柄陶	直口 縁	ローブラック系		
ヨ	10782/2 柄陶	直口 縁	ローブラック系		
タ	10784/4 磁	直口 縁	ローブラック系		
レ	10784/4 磁	直口 縁	ローブラック系		
ソ	10782/4 柄陶	直口 縁	ローブラック系		
ツ	10784/4 磁	直口 縁	ローブラック系		
ヌ	10784/4 磁	直口 縁	ローブラック系		
ナ	10784/3 にぶい・黄斑	直口 縁	大山波瀬		
ラ	10784/3 にぶい・黄斑	直口 縁	ローブラック		
ム	10784/4 磁	直口 縁	大山波瀬		
ワ	10782/4 柄陶	直口 縁	ローブラック		
ヰ	10784/4 磁	直口 縁	ローブラック		
ノ	10782/4 柄陶	直口 縁	ローブラック		
オ	10783/6 容器	直口 縁	ローブラック		2件
ク	10785/6 容器	直口 縁	ローブラック		
ヤ	10785/6 容器	直口 縁	ローブラック		
マ	10784/4 磁	直口 縁	ローブラック		
ケ	10784/4 磁	直口 縁	ローブラック系		
フ	10784/6 磁	直口 縁	ローブラック系		
コ	10784/6 磁	直口 縁	ローブラック系		
エ	10784/6 磁	直口 縁	ローブラック系		
テ	10782/6 容器	直口 縁	ローブラック		

白磁：伏焼き内禿げの碗と思われるもの（P.L. 16-13）、面取り（八角？）の杯、などがある。見込み蛇の目、高台に砂？の付着する端反り皿（第25図2、P.L. 2-3上右、P.L. 16-10）、口唇が端反りし、胴下部に沈線の横走する、グレイ味の碗（P.L. 19-3）、疊付きに砂（目）の付着する皿、同見込みに砂目の残るもの、釉調がグレイ味のもの（P.L. 2-3左第2列）等は、勝山館跡から從前から僅かに見られたものである。まだ充分には確定し得ないが季朝とされるものが含まれると推している。

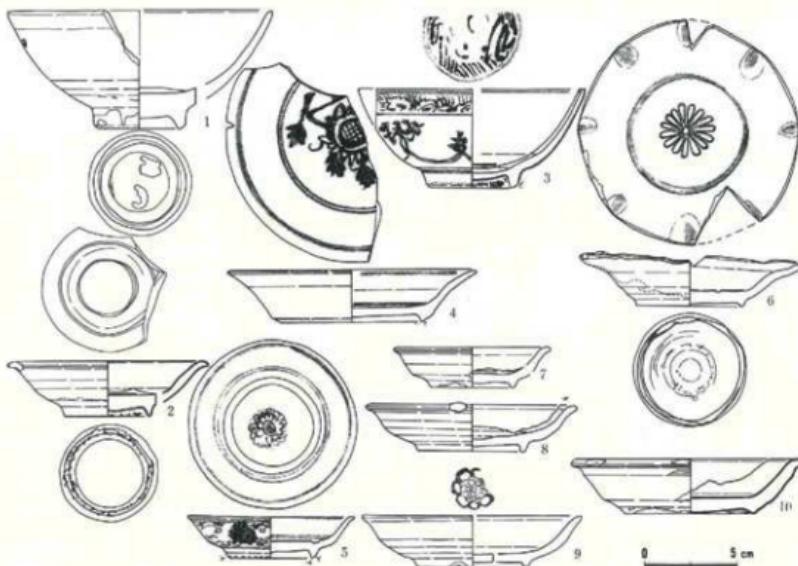
染付：碗は端反り碗、蓮子碗など殆んど過年度出土のものである。出土例の多くない模頭心タイプのものが3点出土した（P.L. 2-3中央、16-20、21）。見込みに梵字を記した小杯（16-19）、菊花？を配した皿（25図5）は初出である。端反り獅子皿、基筒底の魚文・寿字文皿他がある。青磁染付（16-44）は2例目である。

瀬戸・美濃：灰釉の碗・皿・香炉・瓶（瓶子？）、鐵釉の碗・皿・瓶・壺？、撫鉢が出土している。

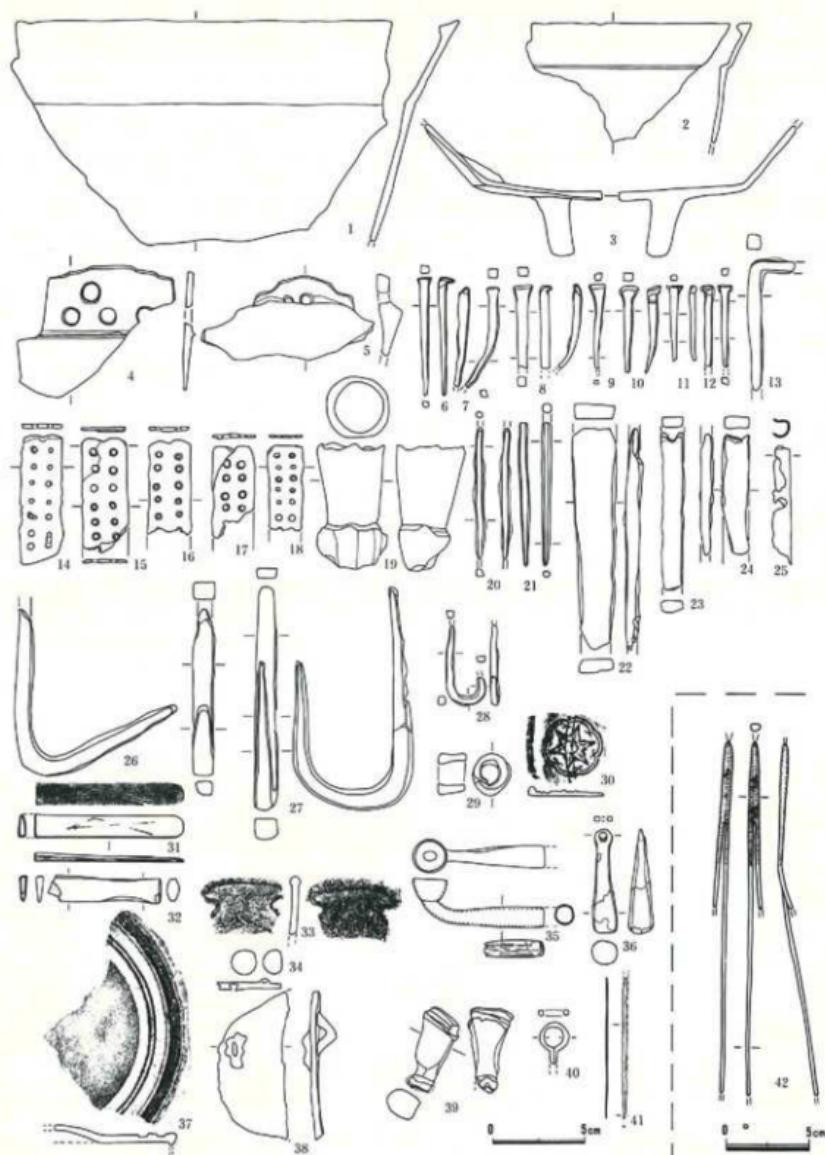
第25図7の皿は腰が張り稜をなすもので勝山館では気付かなかったものである。腰部などの釉溜りの色調も薄いながらもやや青味が強い。又同6は初出である。P.L. 2-3中央上、P.L. 19-12も内はがしの皿のようであるが、釉調・焼成等勝山館では初出である。香炉は概報III-5図8と接合するものである。瓶子？としたものは横位に6条一単位の沈線を巡らせるもので一部のため明らかでない。鐵釉の碗では図-23図13と同じモチーフの別個体が出土した（P.L. 2-19-13・14）。又浅い皿（P.L. 2）、広口壺？も出土した。瓶は概報III-22図3と同一個体かと推されるものである（P.L. 2-4左列）。

志野・唐津：志野、唐津（胎土目）が勝山館跡で出土する国産陶器の終末に位置づけられるものである。志野は端反り皿（第25図10、P.L. 2-3、16-70）、唐津は丸皿が出土している。

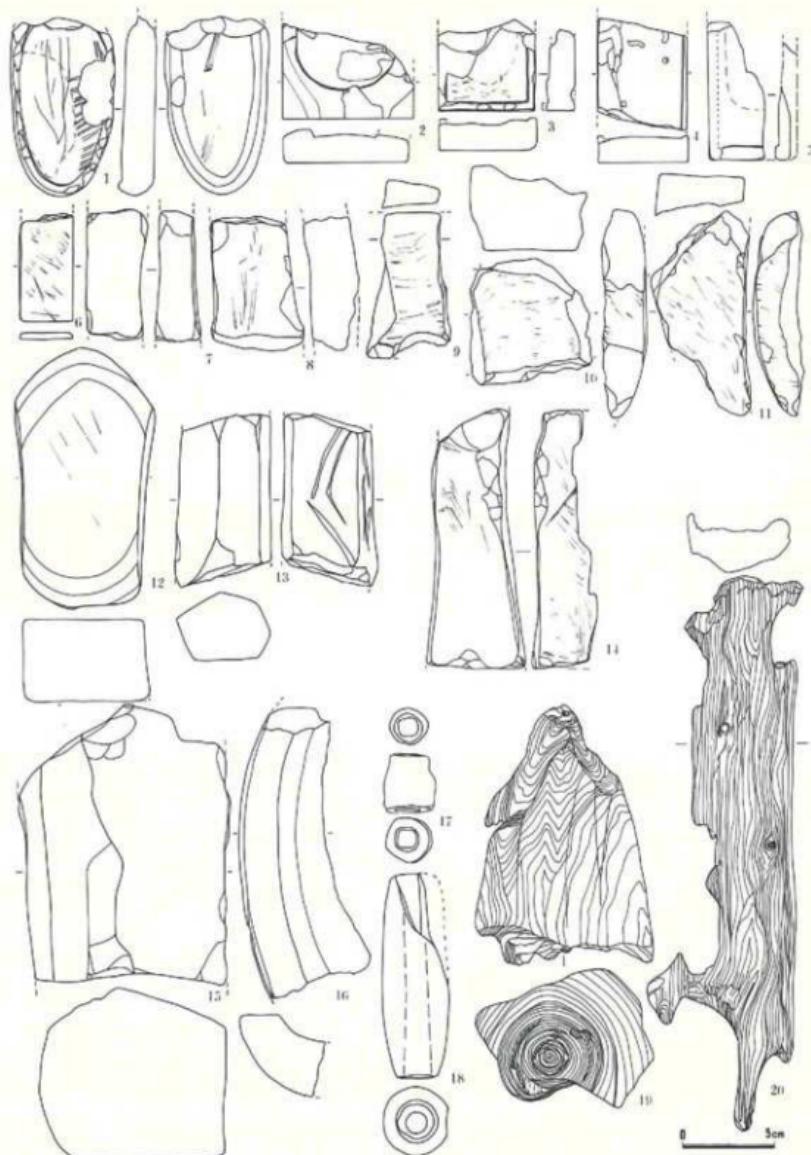
鉄輪瓶：肩部に沈線がめぐり、胴の張るものである。やや厚手に作られている（P.L. 2-4、16-71）。薄手で敵き縦めのもの（16-4中央右）、褐



第25図 調査区出土遺物(陶磁器)



第26図 調査区出土遺物(金属製品)



第27図 調査区出土遺物（石製品他）

釉壺なども出土した。前二者は朝鮮に含めた。

越前：甕・鉢・大甕・広口の壺と推されるものなどがある。又擂鉢は各種ある。

b 金属製品

鉄・銅・銀製品、船玉、銅鏡などが出土した。

鉄製品：鎧、釘、鏃？（第26図22）、小札、鍔、石突？（同19）、鉤針、鉤、締金具（同29）、苧引金（P.L. 17-22）などがある。26図25は蝶番の一部かと思われる。新しいものかも知れない。鉤は形態が異っている。小札に鈎を張ったもの（P.L. 2-4右下）がある。

銅製品（第26図）：鉗、鍔、笄、小柄、鏡、鉢、秤のおもり、きせるなどがある。第26図31（P.L. 2、16-39）の小柄には松葉文が配される。同30の鏡の文様は初見である。37は伏鉢、38は銅羅のようなものと思われる。体部が僅かに湾曲し、外縁が溝状に凹む。表面左は被熱して内部から溶出し空隙がある。二次的な熱変によるものか表裏共

肌が荒れている。或いは未製品とも推される。図36は、舌かとの表示も得たがおもりとした。35はきせるである。きせるについては諸説があるが未だ試行中のままにあり、後日を期したい。34の鉄鉋玉は使用後のためかいびつである。42は後のものかとも推される。P.L. 16-82-84は銅岸（鉄造未製品）で鑄型の痕が残っている。なお瀬戸・美濃灰釉皿転用のるつぼが出土している。

石製品：砥石、硯が出土している。硯が多く出土している。旧道跡南東部からの出土が殆んどである。硯は今迄断片的に出土していたが、一度にこれだけまとめて出土したことはない。相当使い込まれているものが多い。

鍛冶関連遺物：土壙3から既述のように羽口、鉄滓等が出土している。他に、前述の灰釉皿転用のるつぼ、被熱粘土塊、るつぼ（土製）などがある。

骨角器：土壙23中の鶴頭・中柄の他、同種中柄の一部と推されるもの（P.L. 19-72-76）がある。

表24 出土遺物観察表 陶磁器

種別器種	法面mm			特徴	出土土点	回収番号		
	横径	低径	高さ					
青磁瓶	(142)	44.5	62.5	横口・長身・直腹	ヨリーブレイ	李朝?	1716P.143	
青磁兔耳壺	(136)	76.5	29	ゲシの口	側見足・共軸部・横行以下無脚・灰青釉?	李朝?	1643D.1	
青釉兔耳壺	(124)	46	63.5	丸みの口	黄みの白	後東が懸垂・足込ヒマワリ桜花	1643E.1	
青釉竹筒	92	46	29	丸みの白	白	口縁部内側行文・直腹アラベスク・高台輪脚付蓋	1643P.15	
青釉底足	121	58.5	24.5	ゲシの口	白	後東が懸垂・足込ヒマワリ桜花	1725D.35	
#	(118)	65	38	#	#	見込印在文	1727E.7	
#	(118)	58	35	にい・黄	#	見込印在文	1727E.8	
#	(84)	43	32	ゲシの口	うすい黄	底部行文・横筋が入る・見込印文	1725P.1374	
走馬足	(127)	71.5	30	ゲシの口	白	底部行文・走馬足・踏足部・直腹	1643E.3	
白粗足	(108)	47	29.5	丸みの口	白	見込印の目・厚めの脚部・高台に舟形筋目底	李朝?	16W.T-6
白粗足	(108)	47	29.5	丸みの口	白	見込印の目・厚めの脚部・高台に舟形筋目底	李朝?	16W.T-2

鉄製品観察表

種別器種	幅	厚さ	高さ	重量g	特 徴		出土土点	回収番号
					幅	高さ		
釘				340	口横部	口横部35mm	1693日	27251
釘				71.8	口横部	口横部35mm	1694日	27252
釘				126.9	底部	底部直徑24mm・足の長さ3mm	1695日	27253
釘				35.9	口横部	馬王下部に3つ、その上に1つがある	1723D.2	27254
釘				109.1	口横部	耳には2個の孔	1887T.3	27255
釘	5	4	64	4.9	角釘	尖形	1883日	27256
釘	5	5	54	5.5	角釘	先端は丸頭	1783日	27257
釘	6	4.5	45	4.8	角釘	先端は丸頭	1881日	27258
釘	4	5	46	2.3	角釘	先端は丸頭	1880日	27259
釘	5	4	47	2.2	角釘	先端は丸頭	1883日	27260
釘	3.5	2.5	40.5	1.3	角釘	先端は丸頭と腰部大頭	1885日	27261
釘	3	5	44.5	2.7	角釘	先端は丸頭	1884日	27262
釘	7	8	70	35.5	角釘	腰部は舟形に削れがある・両面微欠損	1881日	27263
小鉤	21.5	2	69.5	6.2	平札?	ほぼ完全・溝面に斜削を行った	1885P.1284	27264
小鉤	26.5	1.5	62	5.5	伊予手	下部欠損	1782日	27265
小鉤	23	2	50	7.5	伊予手	下部欠損	1720P.223	27266
小鉤	23	2.4	59	4.2	伊予手	両面微欠損	1871日	27267
小鉤	19	1.5	46	3.4	先端は丸頭		1881日	27268
石突?	26	27	68	8.8	先端部に舟形が付く・底面や側面		1653P.1224	27269
石突?	4	4	70.5	4.1	両端は丸頭・鋸て削れている・断面ほぼ四角形		1723E.28	27270
石突?	5	6	77.5	5.8	ほぼ完全・断面ほぼ四角形		1723D.28	27271
釘?	24	9	119.5	78.1	ほぼ完全		1723D.1	27272
小鉤	12	6	84.5	20.9	ほぼ完全	先端部が二段に分かれで前後にねじりしている	1883日	27273
不明	14.5	5	64.5	14.5	先端は丸頭		1723D.1	27274
不明	10	9	63	3.3	中央部に孔・孔の反対側は扁平		1723D.1	27275
鉤	11.5	9	50	47.9	ほぼ完全・側面と角部・先端部になるにつれて細くなる		1881日	27276
釘?	4	4	4	3.1	先端は丸頭		1622P.1409	27278
鉢	15			12.5	先端・外径22mm・内径13mm	鉢底を丸く曲げて組合	1781P.4	27279

銅製品・砥石他 観察表

種別器種	巾	厚	長	重量	特 徴		備考	出土土点	回収番号
					幅	高			
斧	12mm	4mm	(80)mm	16g	直刃狀			1713P.1424	27051
#	14	5	(61.5)	10.2	圓柱のため物語不明	1725D.1	-と同一化	1713H.1	27052
鑿	(51)	3.5	(31.5)	32.4	木貫刀 錐形直刃狀			1713H.1	27053
鍔	13	56	13.5	30.6	口横部	上端が錐状に作る。(8.36万)	(否か?)	1883P.179	27054
キセル			(71.5)	11.3	直刃狀	大刀直刃状		1883日	27055
手取金具				2.8	細縫切17mm	内径11mm		1881日	27056
鍔	(220)	3		26.3	地紋付櫻葉・瓣の高さ5mm			1712日	27057
鍔				134.0	網目付 伏手ひね			1713E.1	27058
#?	(80)	5		54.6	青面付 積墨			1812日	27059
鋼部		25	46	49.8	青鉛付	先端部が鋸状に研削		1883P.179	27059
銅製番	径2			3.4	頭(耳垂)?	火事 事象が描かれる		1883D.7	27062
鉢底玉	径13.5			11.5	前玉			1723D.1	27064
石核	97	18	(96)		口径約24mm			1883E.7	27065
#	18	70	(51.5)		南門小形刀			1887E.1	28001
#	52	38	(48)		鏡面付尖頭	墨跡が残る		1723D.1	28002
#	48	34	(52)		風呂のため頭鏡面	火事付立		1883P.1	28003
#	(30)	9.5	(74.5)		使用のため尖頭回む			1883D.1	28004
礪石	29	3.5	(5.8)		削い・軋狀	鏡面なまらか 小刀等に使用?		1883D.7	28005
#	32	17	(70)		磨面直形	鏡面弧状に凹む型		1883D.7	28006
#	45	(33)	(79)		#	鏡面は2箇所は鏡面・大型か?		1882P.1	28007
#	50	25.5	(71.5)		#	鏡面は4箇所		1883P.1	28008
#	51	34	(111)		#	鏡面は3箇所直鏡面		1883D.1	28009
#	63	(67)	(46)		#	鏡面は3箇所のみは鏡面のため欠落		1723D.1	28010
#	(53)	(32)	(129)		#	鏡面は3箇所直鏡面		1883D.7	28014
#	51	36	(86)		断面直角			1789	28013
#	75	44	139.5		#	刀型、真化のため刀頭部が僅に残る		1723H.8	28012
場利黒石	92	113	114		6面面をなす3面のぶ塑形			1881	28015
こうし下さい	38	28	31		質状			1883P.1	28016
#	36	26	110		#			1887E.1	28018
鏡	(77)		(360)		角? 鏡材			1883P.1196	28020
#	(34.5)		(133)		角? 鏡材			1703D.1328	28019

表25 出土遺物集計表1(陶磁器)

地 理 分 類	船				國																						
	中		國		朝鮮	小計		瀬戸美濃		志野		唐津		土器		越前		珠州		美濃		信樂		小計		(總點數)	
	青磁	白磁	染付	赤絵				灰胎	灰胎															合計	近世	總計	
碗	86	24	194	3		307	62	91												153	(460)	460	29	489			
皿	49	262	290		6	607	556	4	3	13										576	(1183)	1183	7	1190			
盤	25					25														(25)		25		25			
杯	10	2				12														(12)		12		12			
香炉	2	2				2	1													(2)		2		2			
擂鉢																			584	1	585		585				
更衣鉢		1	7	8															216	1	217		225				
袋物			2	2	1	3														3		5	15	20			
その他	1					1	1													3		4	4	8			
合計	163	296	486	3	1	15	964	620	99	3	13		800	1	1			1537	(1682)	2501	80	2581					

表26 出土遺物集計表2(鉄製品他)

地 理 分 類	鐵			銅			銀			金			錫			銅			鐵			鐵		
	数	重	量(g)	数	重	量(g)	数	重	量(g)	数	重	量(g)	数	重	量(g)	数	重	量(g)	数	重	量(g)	数	重	量(g)
	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目
武具	小札	37	143.3	刀子	7	97.5	盾	2	20.3	石斧	1	8.6	鎗	1	32.4	劍	1	17.4g	鏃	*	*	*	*	*
	劍			刀			矛			劍			槍	1	0.8	鉤	1	17.4g	鏃	*	*	*	*	*
	盾			斧			鎗			槍			矛	2	8.3	劍	1	*	劍	*	*	*	*	*
	石斧			鎗			槍			鎗			矛	3	4.5	劍	1	*	劍	*	*	*	*	*
	石刀			斧			槍			鎗			矛	4	1.5	劍	1	*	劍	*	*	*	*	*
	石斧?			鎗			槍			鎗			矛	5	37.6	劍	2	Pt145	Pt156					
	刀柄			鎗			槍			鎗			矛	6	3.3	劍	2	Pt145	Pt156					
	石刀柄			鎗			槍			鎗			矛	7	1.6	劍	2	Pt145	Pt156					
	刀身			鎗			槍			鎗			矛	8	1.2	劍	2	Pt145	Pt156					
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	9	1.2	劍	2	Pt145	Pt156					
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	10	1.2	劍	2	Pt145	Pt156					
	刀身			鎗			槍			鎗			矛	11	88.4	劍	6							
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	12	190.0	劍	4							
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	13	49.8	劍	1	石臼	1					
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	14	239.8	劍	1	石臼	1					
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	15	30.6	劍	1	石臼	1					
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	16	8.16g	劍	1	石臼	1					
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	17	186.9	劍	1	石臼	1					
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	18	11.2	劍	1	石臼	1					
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	19	2.8	劍	1	石臼	1					
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	20	1.0	劍	1	石臼	1					
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	21	332.5	劍	6							
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	22	4.7	劍	1							
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	23	565.4	劍	3							
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	24	3.4	劍	1	不明	1					
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	25	11.1	劍	1	不明	1					
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	26	1	劍	1	不明	1					
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	27	148.1	劍	6							
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	28	1064.6	劍	4							
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	29	1078	劍	1							
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	30	1086	劍	1							
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	31	1102	劍	1							
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	32	1111	劍	1							
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	33	1195	劍	1							
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	34	1208	劍	1							
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	35	1208	劍	1							
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	36	1307	劍	2							
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	37	13	劍	13							
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	38	50	劍	50							
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	39	73枚	劍	73枚							
	刀身?			鎗			槍			鎗			矛	40	86枚	劍	86枚							

III 小 括

今年度の調査は第二平坦面中央を縦貫する旧道跡とその北西、前年度調査区との中間部での遺構の確認を主要目的として実施し、既述の遺構・遺物の検出を見た。

1 遺構

旧道跡北西の調査区からは、建物跡敷地を画する溝跡、掘立柱の建物跡、堅穴建物跡、土壇、“客殿空間”を画する柱列の延長部などが確認された。

溝跡はその時間的な前後関係、建物跡、敷地との対応関係等の掌握が不充分なままに終わった。軸線の異なるものが見られることは、ある時期に少なくとも第二平坦面北西部での空間配置が大きく変わられたことを示すのであろうが、それを具体的に明らかにすることはできなかった。溝跡の覆土実際に炭化した板状のものが見られた。(P L. 9-2-3)。溝両側に板が立てられていた可能性がある。なお前年度の調査でも、区画段の上の柱列の南西側に並行して同様の炭化材が検出されている(図-P L. 4-2)。

掘立柱の建物跡を12棟想定した。もとより不充分なものであり更に検討を加えなければならない。勝山館跡の建築遺構について長年ご指導を頂戴している鈴木亘先生から、各建物跡等についてのご指導・ご助言を賜ったが、柱穴等の点検や、挿図を訂正する時間は既になく、大変失礼なことは思ひながら、以下に記させて戴くこととした。

第1号建物跡では、北西側P 8を使用した1間の柱列や内部左右の間仕切り等、第2号建物跡では、新旧関係等使用柱穴の変更、第3号建物跡では、柱穴の変更、間仕切り、南東側への拡張乃至は柱列の想定、第4号建物跡では南東側1間と内部の間仕切りの削除、第5号建物跡では、3×5間の間面変更と共に伴う柱列、間仕切り等の設定、第6号建物跡では、2×4間を3×4間への間面変更と共に伴う内部空間(間仕切り)の設定、第7号建物跡では、一部柱穴(間仕切り)の設定、第8号建物跡では、一部柱穴の変更と間仕切りの追加、8号建物跡では使用柱穴の変更、9、12号建物跡の削除、“客殿空間”区画柱列の第8号建物跡北東面までの延長などがご指示を戴いた検

討事項の主な内容であった。個々の建物跡の組み立て方とともに、建物間相互、溝、配置等の全体的視点からの見直し作業をすすめなければならぬことを痛感するところである。

今年度調査区内は土壇等も少く、堅穴の位置もまとまりを見せるようである。3×4間、3×5間等を基調とする、北西→南東を長軸とする、地割溝に並行、或いはその内に納まる掘立柱建物が主体をなし、一部それに直交する軸線の縦軸に近い建物が立つ空間とすることができよう。

区画柱列の南東方向最後の一間は23.7m(12.2尺)と他の柱間がほぼ2.0m(6.6尺)等間となるとの差異を見せていている。この、他より広い柱間のところが、北東の“客殿空間”との通路となるのであろうか。門等が置かれていたかと推される。

土壇・堅穴については、覆土・焼土等の採取資料の選別が途中になっており詳しいことは述べることができないことをお詫び願いたい。

旧道跡の確認調査では、90年の調査で検出した道跡が更に南西に延びていることが判ったが、左右の溝跡の確認が不充分な為、道幅(道路跡)の確定をする迄にいたらなかった。この為、この旧道跡南西部で見つかった4個の大型柱穴の性格付けを曖昧なものとしてしまった。前述の建物跡調査でも、この柱穴に対応するような建物配置は、認められないようであり、旧道軸線方向に機能の主目的があったかと推されるが、なお留宿したい。

旧道跡東端部で第55号堅穴建物跡が確認された。90年の調査時のトレンチが丁度この覆土と壁の一部を切り取っていた。堅穴の北西半の床と壁が、旧道跡によって削られ、堅穴覆土が一部旧道跡の側壁(切り通し法面)を形成している。本堅穴が埋め戻された後に旧道跡が作られた状況を示すものであろう。これは通路をはじめとする前面の空堀の掘り上げと築橋、左右の平坦面形成の為の盛り土、整地等、現在見るような館正面(第二平坦面上り口付近)の形状を作る過程で堅穴が埋められていることを示してもいるのであろう。この堅穴の覆土・床面直上から、勝山館内では初期の段階に含められる越前の鑄鉢片が出土した。15世紀後半から16世紀初めの間に属すると推され

る。

今までの調査から、現在見る館の景観は遅くとも16世紀の第1四半期迄には成立したと推しているが、この堅穴遺構の調査結果もこれに大きく矛盾するものではない。しかしながらその幅を縮めるように努めたく思う。

旧道跡南東側にも、道路に直行する数条の溝跡の延びていることが明らかとなった。旧道跡北西部と同じように溝で建物敷地を囲う地割がされ、建物が建ち並ぶ状況が見られるのであろう。本概報には収録していないが、土壌23と重複する堅穴24、あるいは土壌20などの遺構もある。

2 出土遺物

本年度調査に伴う出土遺物の概要は既述し、表に示した。

陶磁器の示す年代幅は、およそ大窯のⅠ期頃から、志野、胎土日の唐津焼までの間、15世紀期の第4四半期頃から16世紀末葉迄と推している。

白磁伏焼（口禿げ）の碗は14世紀代であろうか。二例目である。面取りの八角杯、削り出し高台抉り入りの丸皿などは、15世紀中葉の志苔跡などでも出土している。端反りで断面三角形の高台が付き、胴部に沈線の巡る白磁碗を古いものとしたことがあるが（概報Ⅹ）朝鮮とすべきかと推している。

染付の文様に新出の数例を見た。端反り碗、蓮子碗などいくつかのタイプが見られた。

青磁香炉・盤、瀬戸・美濃灰釉瓶子？・香炉、鉄釉瓶・壺？といった器種のものや硯などが旧道跡の南東側で多く出土していることは留意される。

棹秤の鍾である分銅が出土した。浪岡城に類似があるが更に単純な形である。舌かとのご教示も得た。伏鉢など仏具に更に広がりがでた。楽器は初出である。煙管は課題を残したままとなつた。銀製の簪は入念なものである。風俗史上は江戸中期くらいまでは下げなければならぬのであろうか。通路に近い位置での出土ではあるが、山道を散策したり、畑作りの往き帰りに似つかわしいものなのかな今少し考えてみたい。当時の銅錢が出土した。二例目である。

琴引金は二例目の出土である。

美濃皿を転用した銅鋳造用のつぼ、銅滴・滓、未製品などが今年も出土している。

土壌などから採取した土壌サンプルの洗浄、抽出作業が殆んど手つかずのままに終った。

多様、多量でしかも毎年のように初出のものが見られる状態にあり、限られた時間の中で、浅学の筆者らの細々とした努力では、後年度送りに引き継がれ、そのまま下積みになっている課題が後を絶たない。できるだけ多くの方々のご教示を仰ぎ、少しづつでも解決を図るよう努めることしたい。

3 土壌23と勝山館出土の銚頭

17J 1・2区で見つかった土壌23は、浅い皿型で櫛の立ち上りや床の状態が不明瞭、不安定な状態であった。土層の堆積も全体には柔らかな黒褐色の層として大きく見えられるものである。この土壌中から表21に見る遺物が出土した。熱度のある陶磁器のうち、白磁皿1は削り出し、高台抉り入りの丸皿で15世紀中葉以降、鐵釉の碗は大窯Ⅰ期で15世紀末から16世紀初、染付獣子皿は15世紀後半～16世紀、白磁皿2はほぼ16世紀、櫛鉢は越前III～IV（勝山館概報V—I・II類）でありおよそ16世紀前半迄に含められると推される。又他の出土遺物も、16世紀代に含められるものであり、16世紀後半に限定できる資料は見えない。銚頭や銅鏡など熱変の見られる遺物はこの陶磁器類と時間的にかなり近いことを窺わせる。

銚頭は界隈の外側に二個の穴が穿たれ懸垂されたことを示す。一穴が龜（鈕）の口と双鳥（雀？）の接吻する真上のやや右より、今一穴がその60°程左へ戻った位置にあたり、垂下した時の中心線は鏡背文様の中央から30°ほど傾く。鈕以外のところを懸垂して使用される鏡は鏡背文様とは異った中心軸で垂下される例は本州でも見られるし、鈕（孔）が鏡背文様の天地と無関係な位置の例もある。

白磁皿2が焼土18下面にあった被熱のものと接合していることは、焼土18と同時またはそれ以前に皿の時期が求められ、土壌内への堆積は焼土18と同時又はそれ以降と解されよう。

佐藤が既述のよう（43頁）焼土18等の周辺の焼土等がこの土壌と関係していることは明らかであるが、土壌23を掘り上げた、その周囲で焼土等が形成され、廃された後に凹地へ・土壌を掘って周辺の遺物を掘り集めたのかといった本遺構の成りたちについての確かな手懸かりはない。只土層

の堆積や土壤の深さなどはそれ程長期に亘っての繰り返しや、ブロック状の投げ（放り）込みを示してはいないと推される。別表の遺物の大部分はこの周辺のものの集積であろう。凹地の利用について宇田川洋の指摘があるが、勝山館にあってはなお精しく検討したく思っている。²¹

鉛頭（第23図12）：全長12.5cm。体部断面は背面側が盛りあがる丸味のある三角形。背面から見た全体の形状は細い柳葉形。長軸線は熱変もあってか幾分捩れる。側面観は、上半部は外反し、下半は湾曲気味で全体はゆるいS字型を呈する。²²

体部中央、先端から5.8cm程のところに線刻した細い線で画した、幅2~4.5mm程の、体部を模倣する隆帯を作り出す。この二条の隆帯が全体を先端・中央・基部の三部位に区分している。

先端部は隆帯を画す溝の上1mm余の部分から内反り気味に削りを加え餘の瘤先状につくる。峰はない。先端から腹背面に並行して縱割りして平らな面が2.8cm程つくられる。先端から7mm下中央に径2mmの丸い穴が穿たれる。1mm程の刃溝を間に腹面側に5mmほどの瓜状の半円形の突起がつくられる。突起の尖端は摩耗しており、側面観も丸味を持つ。図示はできなかったが、刃溝を挟んだ背面側の平坦面に、この“つめ”的先端に沿った数回の切り込みによる溝が深く残っている。孔、平坦面、刃溝は茶褐色を呈し暗紫色の付着物がところどころに残る。

二条の隆帯に画された体部中央は全面が1mm程削られ、一段細くなり、幅2.2cm程の索溝となる。

下位の隆帯を画す溝から基部先端まで4.5cm程ある。右側縁は僅かに下端まで欠失している。隆帯の下位2cmの間に幅3.5、4.5mm程の2条の浅い溝が1cm程の間をおいてつけられ締め溝となる。溝の下位は三分して距をつくる。中央の距は2.5cm余と最も大きく、両側に抉りをいれて先端を剣先状に作る。左は8mm、右は欠失し5mm程が残る。腹面に幅8mm、深さ5mm程の窓がつくられる。その奥は隆帯下部へ3mm程入りこんで閉じている。窓の断面形は1端が欠失しているため正確ではないが、上下の潰れた円形で、幅4mm程が開口する。窓の長さは約2.0cm。背面二条の縫着溝間の中央右側に8mmの短線が2条又状に刻まれる。刻線の右側縁に1.5×2.0mm程の小孔が穿たれて腹面に貫通している。腹面にはこの小孔の6mm程上に今一孔、

途中まで穿孔の痕が残る。

先端の穿孔部、腹面平坦面等に残る暗紫色の付着物は磁着するので鉄錆と考えられる。茶褐色の変色も錆化に伴うものであろう。従ってこの先端部には鉄の鉢（釘）止めされた鎌が装着されていたと推される。鎌の装着は先端から器体の中央を縱割りして刃溝をつくりそこに鎌を差しこみ、アスファルトその他で閉着・鉢留めするのが一般であり、刃溝の両側の“つめ”は、片側が欠損した出土例の多いことからも、鎌の固定とその回転機能上重要な要素と推される。が、本例はその片方が失われた状態で形が整えられていることになる。第一次的には通常の形で製作され、欠失後再加工した結果とは推されるが、短い方の“つめ”を整える時に生じたと思われる痕跡が今一方の“つめ”的腹面に明瞭に残ることは、はじめに片側を短くつくるべく切りこみをいれ、その後に先端から縱割りを行った可能性を示すものといえる。類例をまちたい。

基部中央右の叉状の刻線はシロシ様のものであろうか。索溝部腹面下部の刻みも或いは同様かと推される。

右側縁の小孔は補修孔であり、腹面側からの途中までの今一孔はそれ断念したこと示すのである。

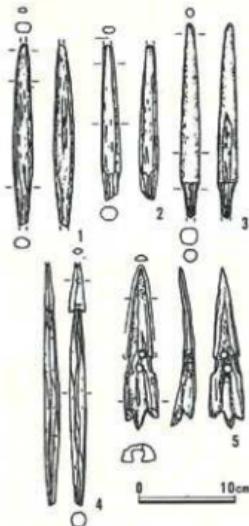
先端に鎌を装着すると全長は13cm余にもなるようである。大塚和義は「鉛の突入深度は、鉛自体が完全に外皮を貫いて体内の脂肪層もしくはこれより深い肉質部に位置して」いることが必要だとする。逆に言えば13cm余の厚さの肉質部をもつ獲物を対象として使用されるのが本例の鉛頭ということである。海獣あるいは大型のマグロ類などが想定される。

勝山館跡からは、現在迄に中柄を中心に骨鎌、刺器、鉛頭等の骨角器500点余と、鹿角・骨、海獣骨の切・削片が大量に出土している。勝山館は文明5(1473)年館内に八幡神を守護神として創祀し、慶長のはじめ迄城代がおかれたとの記録や、25,000点余の出土陶磁器には、美濃大窯I期から志野、胎土目の唐津焼まで、各種の製品等が間断なく見られることから、およそ15世紀後半遅れても第4四半期頃から、16世紀末葉まで存続していたと推される遺跡であり、これらの骨角器類にもその間の年代が与えられるものと把えてきた。又

その性格について筆者は「非和人社会的なもの」としながらもその後の具体的な追跡は放置したままにあった。

勝山館跡から出土した鉈頭は本例で二例目である。既述のように補修孔が見られ、刃溝部の再加工の可能性もあることなど利器として使用されたことは明らかであろう。今一点の鉈頭も尖頭部の周縁が激しく磨滅しており、石器類に見る刃こぼれと同様の状態にある（第28図5—概報IV-28図7）。又、二個の索孔の左右の抉りの下に、僅かな凹みや、表皮のエナメル質の剥落（右側のみ）が見られるのは、使用時の中柄の緊縛痕と推される。

鉈頭の中柄について、出土の中柄を検討してA、Bの両類に分類した前田正憲は、B類の一部をこの鉈頭のそれに比定した（第28図3—概報IV-28図8に同じ）。



第28図 勝山館跡過年度出土骨角器

他方今年度の鉈頭の索溝の断面形は、前田のB類のうち断面長円形とするものに近い。しかし前田があげた諸例はいずれも装着部先端のみが長円形に作出されており、本例に装着はできなかった。しかしながら、器体全体が偏（平）円形に作られ、尖端部へ自然に細くなる、断面長円形の別な一群が勝山館出土品中にあり、装着の安定度も良いものであった（第28図1、2、1は概報IV-28図5に同じ）。

これらのことから2点の鉈頭は一定期間使用されたものであり、勝山館出土の中柄の一群との間にある相関性から、鉈頭そのものの出土例は少ないが、この種鉈頭が勝山館跡の狩（漁）労生産具として定着していたとができるよう。

鉈頭については変遷その他の多くの論考がある。

稚市幸生は擦文期とそれ以降を分ける指標を索孔の作出とそれに伴う締着孔の器体下方への分離に求め得るとしている。

本年出土の鉈頭は12.5cmという長い器体を有するものであり、その中央に索溝を設けることにより、締着溝の下方分離を可能としたものである。こうした索溝の作出による締着溝の下方分離の近い例は青苗貝塚出土品中に見られる。又、神恵内洞窟出土の2孔継位の索孔を持ち、刃溝のつくられる例は、勝山館例に比べ小型であること、索孔と索溝に違いがあることを除くと、備わる要素は殆んど同じである。

又、第28図5に示す過年度出土の鉈頭は、継位2孔の索孔を有すると同時に、明瞭な作出はないとはいって、索孔の下位に締着の痕跡が認められ、「締着溝（部）の下方への分離」を志向していることが認められる。この類例はやはり神恵内洞窟出土品の中に見ることができる。

神恵内洞窟出土の二点のうち、前者について大塚和義はキテ以前のF群タイプ（14~17世紀）中の古手のもので、擦文文化の伝統を引くとする。千代蔵は擦文期の骨角器の報告中で同資料を参考資料として再掲している。又後者は石附によって、索孔の初現は「擦文式文化終末後間もなく一おそらく鎌倉時代から室町初期」で「当初の索孔は二個継位」であることを例として図示されている。なお石川直幸は、鉈先の綱頭觀を述べる中で索孔を持ち、索溝（締着溝）をもつことの多いIII、

鉄錠+索溝をもつIV類とし、その年代をIIIは11世紀後半から15世紀、IV類は15~16世紀を中心と記すが、III類に前述の神恵内^{注12}の後者を又、IV類に前者を含めているようである。

これらのことから勝山館出土の二点の鉢頭は共に擦文時代の鉢頭に系譜が求められることとなる。殊に基部が三つの間に分岐し、中央が発達するという共通する形状は、青苗貝塚、神恵内洞窟出土の鉢頭に連なるものであり、少くとも北海道南部日本海側において擦文時代から中世末の間に連続して現れる地域的特徴と位置付けられよう。

「締着溝（部）」の下方への分離を遂げた鉢頭の基部は、開窓・半閉窓・閉窓と変遷し、体部の縦縛は縦位2孔・（斜位）・横位と変遷し、近世アイヌのキテとしてのスタイルに到達することは諸先学の説かれるところである。

これについて石附は「網が鉢からいっそうはずれにくい在り方へ」の変化として索孔の出現を位置づけているが、勝山館跡出土の「索溝+締着溝」の鉢頭は、種市^{注13}のいう縦着溝の器体下方への分離移動を先ず志向した形を示している。この鉢頭の締着溝は2条作出されており、この結果使用時には窓の殆んど閉じられた穴・閉窓の状態になつていると推される。又、これに伴つて窓の位置は器体の下位3分の1ほど所まで当然下つてくる。これは長身の器体の鉢頭を除いて大部分の鉢頭の器体の2分の1以上を占めていた窓の部分が、やがて、全長（鎌身部分を含む）の半分以下と小さくなるキテの形状へと移行し、相対的に刃部（刺突部）が大きくなることと大きく関わることと推される。勝山館出土鉢頭の基部側縁の補修孔は、刺突時にかかる大きな衝撃を示すものであり、その補修が途中で中断されていることは、その失敗による廢棄とも解される。締着溝の下部への移行はこうした窓の損傷を防止するとともに、鐵装着の定着化に象徴される刺突機能と器体そのものの強化が目的の一つとなっているのではないか。石附の縦縛の強化が2孔横位への過程を辿ることは勿論否定すべくもない。またこうした変遷の背景が捕獲対象物の変化にあることは既に先学の指摘するところである。

「非和人社会的なもの」として把えながら長い間放置してきた勝山館跡の骨角器等のうち、鉢頭という限られた器種についてではあるが、館内で

狩（漁）器具として定着した位置を占めていたこと、更には北海道における擦文時代から、キテにいたる一連の変遷の中で、15、16世紀の時間帯の所産として矛盾なく存在し得るとの推論をかなり乱暴にすすめてきた。厚かましく墨論を重ねるなら鉢頭基部の叉状の線刻は館内出土骨蔵に見られた線刻（第28図4）とともに^{注14}「シロシ」の一例とも推すところである。

勝山館跡から出土する鉢頭以外の各種大量の骨角器類についてはまだ充分な検討をなし得ざる。恐らくは上述の鉢頭同様に館内での主要な狩猟・漁猟生産具の一つとして存在し、位置付けられることは否定できないであろう。

高度な金属加工技術や豊富な鉄器類を所有し、大きな勢力を有していた勝山館の中でこれらの骨角器類を製作し、使用した人達の存在を改めて考えてみなければならない。

註1 中野政樹 和鏡 日本の美術42 1969、

難波田 敏 鏡像と懸仏 同284 1990

2 宇田川洋 第二節 物送り場としての堅穴上層遺構について ライトコロナ川口遺跡 1980

なお本資料等の分析は直接の調査員である佐藤の手によって明年度調査結果を踏まえた予定であったが、明年度以降暫く佐藤が勝山館跡の調査に直接関係しないこととなつたこと、勝山館の骨角器については松崎が「非和人社会的なもの」として以来その位置付を曖昧なままにしてきていることから共同調査者であり調査担当者である松崎がとりあえず骨角器について、現時点での推測を示すこととした。拙稿「道南の和人の館」よみがえる中世4 菊地徹夫 福田豊彦編

3 鉢頭各部位の名称等については佐藤達夫氏の呼称に倣うこととした。尚、大塚和義渡辺誠、金子浩昌、前田潮、山浦清、種市幸生、石附喜三男、宇田川洋の各氏の記述を参照した。又、筆者は在学中に金子浩昌先生のご講義を拝聴し、骨角器等について初めて学んだ。又、種市幸生氏から種々ご教示を賜った。

4 大塚和義「アイヌのキテ（回転式離頭鉢）」の諸系列 1976

- 5 前田正憲 「骨角器」 勝山館概報IV
1983 又別に筆者も付言したことがある。
- 6 註3他、文献は別掲した。
- 7 千代豊 北海道奥尻島遺跡調査概報 考古学雑誌41-2 1956
桜井清彦 北海道奥尻島青苗貝塚について（第一次調査概報）古代27 1958
佐藤忠雄 奥尻島青苗遺跡 1979 同書PL.34-8 写真観察であるが索溝と上下して縦溝があり、その上に一条浅い溝が巡りその上に、刃溝と留め孔が見られる。長さ6.3（先端欠失）cmとやや短い。
- 8 渡辺誠 繩文時代の漁業 1973 第91図c
- 9 石附喜三男 5 エゾ地の鉄 180図7
日本民俗文化大系3 稲と鉄 1983
- 10 大塚前掲註4
- 11 千代豊 6) 骨角製品 有珠オヤコツ・ポンマ遺跡 1993
- 12 石附前掲註9
- 13 石川直章 物質資料からみたアイヌ文化の様式—アイヌ文化成立についての覚書—
根室市博物館開設準備室紀要 2
- 14 石附前掲註9
- 15 大塚前掲註4の表1中、全長a：索孔中央～尾部末端cの89点の平均比は100:42である。50を僅かに超えるのは3例である。最大は52、最小は28である。
- 16 大塚前掲4
- 17 本年1月札幌で宇田川洋氏にお会いした折本資料の素図を見ていただきご教示を頂戴した。宇田川氏は、筆者の「16世紀初め位までの遺物と共に伴する」との説明に対し「掠文的」(16世紀では新しすぎる—筆者の感じ)とのコメントを下さった。別項で佐藤が、宇田川氏のd群とあわない等々記しているが、本資料の形態が一般的に16世紀では新しすぎると把えられるのが現状であろうとの認識に立ち、16世紀初め段階に位置付ける可否にまず率直に疑問を投じ、そこから検証を始めようとする、自らの出発点を述べているのであって、他意のないことを斟酌賜りたい。
- 18 既に大塚和義氏の指摘がある。大塚和義
抉入離頭鰯 物質文化 7 1966

IV 保存処理

1 鉄製品

今年度は2,080点の処理を行なった。従来通り錆除去、エタノール浸漬による脱水、パラロイドN A-D10の20~30%ナフサ溶液による減圧含浸、接合等を行なった。処理の内訳は建築用具の釘、鉗、生活用具の鍋、鍋蓋、火箸、鎌、武具の小札、小刀、小柄、鎌等である。処理後シリカゲルを入れたO・Vフィルム内にて密閉している。

2 銅製品

80点の処理を行なった。メス等による錆除去、エタノール脱水後、ベンゾトリアゾールのエタノールの2~3%溶液による減圧含浸を行なった。処理の内訳は鏡、鏡金具、取手、煙管、甲冑部分、鎌等である。処理後シリカゲルを入れたO・Vフィルム内に密閉している。

3 木製品

1700点の処理を行なった。P・E・G 20%~90%と順次濃度を上げていった。従来どおり処理中には処理遺物の中から任意の複数の遺物を抽出し重量を計測して行き重量の変化がなくなったところで処理を完了した。処理の内訳は生活用具の箸、下駄、取手、曲げ物、底板、網枠、網浮、折敷、武具の鞘、中柄、鎌、建築関係の柱材、板材、その他羽子板状木製品、人形等である。

4 漆器

10点の処理を行なった。P・E・G 20%~90%と順次濃度を上げていった。処理の内訳は碗、皿等の口縁部~胴部にかけてある。処理の際破損を防ぐために漆器全体を不織布と脱脂綿により梱包した。処理後表面には余分なP・E・Gが付着した状態であるが、木質部と被膜の剥離もなく現在安定した状態にある。

今後表面に余分に付着しているP・E・Gの除去等を行なう予定である。

5 今年度のまとめ

(1) 漆器、木製品

今年度の木製品、漆器の処理遺物はいずれも平成2年度大手空塚より出土したものである。

漆器については処理後思った程の黒化もなく、漆被膜の剥離等もなく比較的安定した状態である。しかしそれぞれ漆被膜の厚さ、塗りの状態、

木質部の厚さ等が異なっており、生産地等が異なる可能性がある。今後未処理のものについては生産地等の検討が必要と考えられる。

木製品については過去に行なった掘め手地区的室町期貝塚出土の遺物よりも含水率も低く比較的しっかりした状態であり、品目も多種多様であった。

今後未処理の遺物については樹種同定等を行ない、現地の材料を使用した現地生産なのか、あるいは他地方からの移入品なのか、材料だけ移入し現地で加工したのか等々を検討することが必要であると考えられる。これらのことと検討することにより、勝山館を構成していた人々、さらには勝山館の性格を知る一助となると考えられる。このことは漆器についても同様である。

(2) 鉄製品

釘、鉗、小札、鍋等從来と変わらない品目であるが、出土から整理作業を経て保存処理完了に至る行程の検討が現在必要となってきた。発掘調査及び整理段階においてどこまで錆を除去するか?

泥を落とすのは勿論であるが、整理作業段階において、脱水等の処理前に遺物を計測あるいは実測のためほぼ充分な状態まで錆を落とすはどうなのか、遺物に負荷がかからないかということである。一定程度の状態まで錆を落としたら後はその遺物を実測、あるいは観察できないだろうかという点である。周知のように金属は周囲の状態が変わると急速に腐蝕する傾向がある。ひどいものになると急速に溶けてしまうものもある。

特に鉄物である鍋、茶釜等は空気中に放置すると鐵造品である釘等に比し、その腐蝕は激しい。従って整理作業前に遺物の処理を終わらせてしまうことが最も良いが、それが出来ない場合は最低限、整理作業前に脱水を行ない、整理作業では一定程度のところ(遺物の性格、観察に必要な最低限)まで錆を落とし整理作業完了後再び脱水を行なった後、シリカゲルを入れたO・Vフィルム内にて密閉することが必要と考えられる。その後充分な錆除去は処理段階に入つてから行なうべきであると思う。

(齊藤)

V 上之国勝山館跡出土鉄器・鉄塊・鉄滓の金属学的解析(2)

岩手県立博物館 赤 沼 英 男

北海道檜山郡上ノ国町に立地する勝山館跡からは、これまでの発掘調査によって、種類・量ともに豊富な鉄器、鉄塊が検出されている。同遺跡では舶載のものを含む相当量の陶磁器が出土していることから、交易による鉄器の供給が予測される。同時に、館跡内からは焼土遺構および羽口が鉄滓とともに発見されている。そこで、製品としてもたらされたもの他に、遺跡内の生産活動によって製作された鉄器の存在が考古学的研究によって指摘されている¹⁾。

館内における鉄・鉄器に関する生産と流通の実態をより明確にすることを目的として、筆者は上ノ国町教育委員会の依頼により1992年度から館内出土の鉄器、鉄塊、ならびに鉄滓の金属学的解析を行ってきた。これまでの分析によって、外部からの製品の搬入と、鉄塊を素材とし遺跡内で製作されたとみなすことのできる鉄器の存在が確かめられた²⁾。

今回の遺跡内より検出された鉄塊の詳細な分析、および鉄滓の金属学的解析によって、館内では鉄鉱を素材とし脱炭材として砂鉄を使用するという、いわゆる間接製鋼法による鋼の製造が行われていたこと、および鋼の製造と併行して鉄塊の供給もあった可能性の高いことが明らかとなつた。今後さらに多くの鉄器、鉄塊の金属学的解析を行い、製品としてもたらされたものと館内で製作されたものの器種の特定、ならびに他地域との比較による交易ルートの推定が必要であることはいうまでもないが、とりあえず上述の結果が導き出された実験の結果を以下に報告する。

1 分析資料

分析した資料は1993年までの発掘調査によって検出された鉄器、鉄塊、および鉄滓の合計13点である。鉄器、鉄塊、鉄滓資料を表V-1に、資料の外観を図1および図5に示す。上述の中で、小札、T70・T71釘、T68釘、鉄塊については既に1992年度の報告書において報告済みではあるが、その後に実施した分析結果を加え再度考察を行った。

2 分析用試料の調整

鉄器からの分析試料の採取は国立歴史民俗博物館永島正春氏によって行われた。採取の後岩手県立博物館に送付された試料を、ダイヤモンドカッターを使ってさらに2分し、大きい方の試料片を組織観察に、小さい方の試料片を化学成分分析に供した。

鉄塊については端部から中心方向に切り込みを入れ、図1に示すように幅5cm、長さ4cm、厚さ1cm程度の板状の試料片を抜き取った後、さらに細分して7個の分析試料を作成した。このようにして作成した試料のうち、最大のもの1片と小片2片を化学成分分析に、他の4片については組織観察と硬度測定に供した。

鉄滓については図5に示す箇所から2つに切断し、それぞれの切断面の中心付近から小ブロックを摘出し、化学成分分析と組織観察を行った。

3 分析方法

組織観察用試料は樹脂に埋め込み、表面を浅く削り取った後、ダイヤモンドペーストを用いて仕上げ研磨を行った。研磨の工程では試料中の化学成分の溶出を避けるため、水を一切使用しない方法をとった。研磨した試料は金属顕微鏡によるミクロ観察に供し、また、鉄器に残存する非金属介在物および鉄滓組織のうち、代表的なものについてはEPMAによりその組成を決定した。鉄塊ならびに鉄滓試料のうち健全なメタル部分についてはナイタールによりエッチングし、ミクロ組織を調べた。また、鉄塊については組織観察の後マイクロビッカース硬度を測定した。

化学分析用試料は王水・ふっ化水素酸を使って完全に溶解した後、全鉄(T.Fe)、銅(Cu)、マンガン(Mn)、りん(P)、ニッケル(Ni)、コバルト(Co)、チタン(Ti)、けい素(Si)、カルシウム(Ca)、アルミニウム(Al)、マグネシウム(Mg)、バナジウム(V)、クロム(Cr)を誘導結合プラズマ発光分光分析法(ICP-AES法)により定量した。鉄塊のT.Feと炭素(C)、いおう(S)、No.1

鉄滓中のメタル部分に含有されるC、およびNa 1～Na 7 鉄滓中のSならびにSiについては、それぞれ塩化チタン還元ニクロム酸カリウム滴定法、燃焼－赤外線吸収法、重量法によった。

なお、鉄塊からの試料の採取と採取された試料片のミクロ組織観察、マイクロビッカース硬度、および化学成分分析は新日本製鐵株式会社釜石製鐵所釜石試験分析センターにより行われた。

また、鉄塊から採取されたNa 5、Na 6 の2つの小片については、武藏工業大学平井昭司によって、中性子放射化分析法によりその組成が調べられた。

4 分析結果

4-1 鉄器の化学組成

表V-2は鉄器から採取した試料片の化学組成である。小札、T68鉄B部から採取した試料片に含有されるP分は、それぞれ0.141、0.243%と高い値を示している。T67鉄C部、T70鉄C部からはCo分がそれぞれ0.065、0.064%と相当量検出されている。T68鉄B部、鉄塊のCo含有量も0.03%強とやや高い。表V-3に示す中性子放射化分析法においても、0.031～0.044%のCo分が検出されている。また、鉄塊のC含有量はきわめて低いレベルにある。

4-2 鉄器の非金属介在物組成

図2-aはT68鉄から採取した試料片の健全なメタル部分に見いだされた非金属介在物のEPM-Aによる2次電子像と反射電子像、図2-bは定性分析結果である。またPL.3には含有される元素の濃度分布をカラーディスク表示している。灰色を呈した粒状の化合物(W)にはFeが高濃度で含有されていることから、ウスタイトと判定される。また、灰色の角状をした化合物(T)のFe、Ti、Al、V濃度、暗灰色の柱状をした化合物(F)のFe、Si濃度は高く、それぞれFeO-TiO₂-Al₂O₃-V₂O₅系のチタン化合物、FeO-SiO₂化合物(鉄かんらん石:2FeO·SiO₂と推定される)である。また、微細な結晶が折出したマトリックス(M)からは、Fe、Si、Ca、Al、K、Mg、P、Ti、が検出されている。他の鉄器に見いだされた非金属介在物の分析結果は表V-2の最右欄に示すとおりである。

4-3 鉄鍋破片のミクロ組織

図3-aは鉄鍋の破片から採取した試料片のミクロ組織である。白色のメタル部分を黒色の黒鉛

層が取り囲んでいる様子がわかる。試料の鋳化はそれほど進んでおらず、残存状態は比較的良好である。

図3-b₁は図3-aの枠で囲んだ部分のミクロ組織、図3-b₂は図3-b₁をさらに高倍で拡大観察したものである。レーデブライト(α Fe-Fe₃C共晶の組織)とよばれ、鉄塊にみられる特徴的な組織である。

4-4 鉄塊のミクロ組織

図4-a、b、およびcは鉄塊から採取した試料片のナイタルによるエッチング組織組織である。いずれもフェライト結晶とその粒界によって構成されており、パーサイト相は認められない。また、図4に示すとおり、マイクロビッカース硬度は74～87の範囲にある。炭素含有量0.1%未満で、残存する非金属介在物も少なく、清純な鋼であることがわかる。

4-5 鉄滓の化学組成

表V-4は鉄滓から採取した試料片の化学分析値である。Na 1鉄滓については切断の結果試料中にメタルの残存が確認されたため、メタル部分のみを摘出し、分析に供した。T.Feが84.54%と高いレベルにあり、化学分析値もほぼ健全な地金が分析されたことを示している。Na 3～Na 6鉄滓についてはT.Feが30～59%と比較的高いレベルにある。Na 2鉄滓についてはT.Feが11.72%と低いレベルにある反面、Si分、Al分はそれぞれ23.67%、6.88%と高値をとっている。鉄滓の大部分がガラス質けい酸塩によって構成されているものと推定される。Na 1鉄滓のC分は2.55%であり、メタル部分には銑鉄が残っているものと判断される。さらに、Na 1鉄滓のメタル部分からはCuが0.203%検出されており、含有量レベルがきわめて高い。

4-6 鉄滓のミクロ組織

図6-a₁に示すNa 1鉄滓から採取した試料片のマクロ組織図によると、白色のメタル部分に鉄滓が付着した組織であることがわかる。図6-a₂およびa₃は図6-a₁、領域A部のミクロ組織である。わずかではあるが鉄鍋破片同様レーデブライト組織が観察される。図6-a₄、図6-a₅(図6-a₁の領域B、C部)のナイタルによるミクロエッチング組織には、明確なレーデブライト組織が認められ、さらにこの組織がメタルの相当部分を占める。化学分析における炭素含有量とミクロ組織観察結果

果とはほぼ一致する。図7-iはNo.1鉄滓のメタル部分に付着した鉄滓部分の2次電子像と反射電子像であるが、黒色領域(D)によって囲まれた大きさ20 μm の灰色を呈した結晶(T)があり、さらにこの組織の回りには健全なメタル部分とその階層が残存している様子を観察することができる。図7-i-bに示すEPMAによる定性分析によって、結晶(T)は $\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2\cdot\text{Al}_2\text{O}_3\cdot\text{V}_2\text{O}_5$ 系のチタン化合物、黒色領域(D)は $\text{FeO}\cdot\text{CaO}\cdot\text{SiO}_2\cdot\text{Al}_2\text{O}_3\cdot\text{K}_2\text{O}\cdot\text{MgO}\cdot\text{Na}_2\text{O}\cdot\text{P}_2\text{O}_5$ 系のガラス質けい酸塩であることがわかる。

図6-b₁はNo.2鉄滓のマクロ組織である。暗灰色からびに黒色の領域が組織の全域を占め、また組織のいたるところには空洞が存在している。図6-b₂は図6-b₁の枠で囲んだ部分のミクロ組織、図6-b₃は図6-b₁をさらに高倍で示したものである。ガラス質けい酸塩(D)中に直径約50 μm の白色をした鉄粒が残存している様子を観察でき、さらに鉄粒のまわり、およびその周辺には灰色の柱状をした結晶(T)が多数析出している。図8はEPMAによる2次電子像と反射電子像、ならびに定性分析結果であるが、灰色の結晶(T)は $\text{TiO}_2\cdot\text{Al}_2\text{O}_3\cdot\text{MgO}\cdot\text{SiO}_2$ のチタン酸化物であり、ガラス質けい酸塩からはSiが高濃度で検出され、さらに、Al、Ca、Mg、K、Na、Tiが含有されている。また、鉄粒からは低レベルではあるがSi分も分析されている。チタン酸化物およびガラス質けい酸塩中にはFe分はほとんど含有されていない。

図6-e₁はNo.5鉄滓のマクロ組織、図6-e₂およびe₃はそれぞれ図6-e₁の領域A、B部のミクロ組織である。ミクロ組織はいずれも灰色がかった粒状の結晶(W)、灰色の結晶(T)、やや暗灰色の柱状結晶(F)、暗灰色の結晶(H)、および微細な結晶が析出したマトリックス(M)からなる。ただし結晶(W)の占める面積割合は図6-e₃のほうが高く、この組織はマクロ組織の約半分を占める。図9に示すEPMAによる2次電子像と反射電子像、定性分析結果によって、結晶(W)はウスタタイト(理論組成: FeO)、結晶(T)は $\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2\cdot\text{Al}_2\text{O}_3$ 系のチタン化合物、結晶(F)は $\text{FeO}\cdot\text{MgO}\cdot\text{SiO}_2$ 系の化合物(マグネシウムを固溶した鉄カンラン石: 2(Fe, Mg) O \cdot SiO₂と推定される)、結晶(H)は $\text{FeO}\cdot\text{Al}_2\text{O}_3$ 系の化合物

(ハーシナイト: $\text{FeO}\cdot\text{Al}_2\text{O}_3$ と推定される)と判定できる。なお、結晶WにはわずかではあるがTi分が含有されている。

図6-c₁・c₂・c₃、d₁・d₂・d₃、ならびにf₁・f₂・f₃に示すマクロ組織およびミクロ組織から、No.3・No.4鉄滓はウスタタイト、 $\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ 系化合物、およびマトリックス(W)またはガラス質けい酸塩によって、No.6鉄滓はウスタタイト(W)とマトリックス(M)からなることがわかる。なお、No.6鉄滓はそのほとんどがウスタタイトによって構成されている。

5 考察

5-1 鉄器地金の材質

4-2および4-3で述べた鉄器のミクロ組織観察結果から、鉄鍋破片は鉄造鉄器であるが、T6釘を始めとする5点については鍛造鉄器であることがわかる。

地金の製造に使用される原料鉱石としては、一応砂鉄と鉄鉱石の2つが考えられる。鋼の製造過程において砂鉄が使用された場合、還元状態によるが砂鉄中のチタン磁鐵鉱($\text{FeO}\cdot\text{Fe}_2\text{O}_3\cdot\text{TiO}_2$ 系チタン化合物)は、ウルボスピニル($2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$)、イルメナイト($\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$)へというようチタンの濃縮された化合物へと順次変化する。このようにして生成したチタン化合物の多くは、鉄滓として鋼から分離、除去されるが、一部は鋼中の非金属介在物中に残る。

小札の非金属介在物はガラス質けい酸塩によって構成されているので、鋼の製造に使用された原料鉱石は鉄鉱石とみなすことができる。T67釘を始めとする鍛造鉄器にはすべて、非金属介在物中にチタン化合物が見いだされているので、砂鉄が用いられたことを指摘できる。なお、T67・T70釘から高レベルのCo分が検出されている。使用された原料鉱石は、Coを含有する特殊な磁鐵鉱と推定される。Coを含有する磁鐵鉱に関し、以下のところ列島内にはその産出報告はない³⁾。しかし、大和6号墳ならびに番塚古墳出土の鉄器にみられるように、CoもしくはNi含有量の高い鉄器は、列島内に鉄生産技術が定着する以前の5世紀代の古墳において既に検出され、後代の遺跡からも出土が報告されている⁴⁾。砂鉄中のCo含有量は低いので、上述の2点の鉄器の製作に用いられた鋼については、鉄鉱石と砂鉄の両者、もしくは

チタンおよびコバルトを含有する磁鉄鉱の原料鉱石としての使用を考えなければならない。

鉄鍋破片にはP分が比較的高いレベルで含有されている。りん含有量の高い鉄鉱を素材として鋳造された鉄鍋である。このような高りんの鉄鉱による鉄鍋は表V-5からも明らかのように、古代・中世の列島内の遺跡から相当数検出されている。当時列島内の広い地域で高りんの鉄鉱による鉄鍋が流通していたことを推測することができる。

以上を整理すると、分析を行った鉄器は鍛造鉄器と鋳造鉄器の2つに大別され、さらに鍛造鉄器については以下のように細分できる。

- ア 鉄鉱石を原料鉱石とするもの……小札
- イ 鉄鉱石や砂鉄の両者の使用、もしくはコバルトとチタン分を含有する磁鉄鉱を原料鉱石とするもの……T67・T70鉄釘
- ウ 砂鉄の使用によって製造されているもの……T68釘、T71鉄釘

5-2 鉄塊の組成

館跡から検出された半月状の鉄塊は分析の結果、炭素含有量が低い鋼塊であることが判明した。また、ミクロ組織には非金属介在物がほとんど観察されず、Si、Al、Ca分をはじめとする鉄以外の成分もほとんど含有されない。驚くべきはどの純度である。相当の大規模な精錬によって得られた鋼塊ではなかろうか。館内において大規模精錬がなされていたとみることはできず、この鋼塊は遺跡外からもたらされた可能性が高い。

5-3 館内における鉄・鉄器の生産

館跡からはレーデブライト組織から成る金属部分に、鉄滓が付着した資料が検出されている。鉄滓にはガラス質けい酸塩によって取り囲まれたチタン化合物が析出した組織も認められた。この資料の出土によって、遺跡内では砂鉄を原料鉱石としての製錬、もしくは鉄鉱を素材とし脱炭材として砂鉄を用いながら鋼を製造するという鋼製錬のいずれかが行われていたものと推定される。しかし、上述の資料のメタル部分には、0.2%強のCu分が含有されている。このような高レベルのCu分を含む砂鉄の報告例はなく、従って館内では後者、すなわち間接製錬法による鋼の製造が行われていたとみなければならぬ。

館内からは上述の資料とともに、鉄粒の周辺に

微細なルチルに近い組成のチタン酸化物が析出した組織をもつ鉄滓も検出されている。チタン酸化物を取り囲むガラス質けい酸塩にもFe分はほとんど含まれない。砂鉄中に含有されるチタン磁鉄鉱($FeO \cdot Fe_3O_4 \cdot TiO_2$)を、木炭を燃焼した際に発生するCOガスで還元することでは生成が困難な化合物である。生成経路としては、鉄鉱中の炭素による還元しか考えられず、このことも間接製錬法による鋼の製造を指示している。

チタン磁鉄鉱の銑鉄による還元を反応式で説明すれば以下のとおりとなる。

〈反応式〉



*Ti、Cは鉄浴中のチタン、炭素を表わす。

なお、館内から検出された他の4点の鉄滓の中で、健全なメタル、ウスタイト、チタン化合物、 $FeO \cdot SiO_2$ 系化合物、 $FeO \cdot Al_2O_3$ 系化合物、ならびにマトリックスなどによって構成される組織が観察されるNa3~Na5鉄滓についても、上述の鋼製錬時に生成したものとみることができる。

ただし、ミクロ組織の大半がウスタイトによって構成されているNa6鉄滓については、鋼精錬時における鉄浴表面の再酸化に伴って生成した鉄滓か、製造された鋼を目的とする鉄器に加工・整形する、いわゆる小鋸治の工程で生成したものいづれかである。

5-4 鉄器ならびに鉄素材の流通問題

鉄塊および鉄滓の分析によって、館内では以下の生産活動が行われていることが確認された。

- ア 鉄鉱を素材とし脱炭材として砂鉄を使用する鋼製造
 - イ 鋼を素材としての鉄器の加工
- アの実施については素材となる銑鉄塊の供給が

不可欠である。鉄滓中のメタル部分の組成から、勝山館遺跡への銅含有量の高い銅鉄塊の流入を想定しなければならない。もちろん、製品鉄器である鉄鍋の鋼への加工を否定することはできないが、外部からの銅鉄の供給という問題も視野にいれ、今後遺跡内から検出される鉄塊の組成を検討する必要があろう。併せて道内はもとより、列島内の中世の遺跡から出土する鉄塊についても、同様にその組成の確認が不可欠であるということはいうまでもない。

イについては、上述の鋼精錬によって製造された鋼を使用し、鉄器の製作がなされていたことは確実である。同時に、半月形の鋼塊の検出により、鋼の独自製造の他に、外部からの流入があったことも指摘できる。今後他の遺跡から類似の遺物が検出されれば、半月形鋼塊の流通状況を推定できるであろう。なお、T68およびT71鉤についてはその組成から、上述の半月形の鋼塊を素材として製作されたとみることができる。T67ならびにT70の鉤については、Co分の高い銅鉄塊が検出されていないことから、一応製品としてもたらされたものと判定することにする。また、非金属介在物中にチタン化合物が残存し、さらに銅含有量の高い鉄器が検出されていないので、アによって製造された鋼の用途については不明である。今後多くの鉄器を分析することによって明らかにしていきたい。

最後に問題となるのが、館内への供給起源である。中世の資料の分析点数が少ない現在、流通ル

ートについて言及することは困難であるが、Co分の含有量レベルの高い鉄器の存在を考慮すると、交易の範囲としては大陸をも視野にいて検討する必要があろう。

おわりに臨み、本調査を実施するにあたり他方面からご指導いただいた東京工業大学名誉教授

(前国立歴史民俗博物館歴史研究部長) 福田豊彦氏、前コロイドリサーチ取締役佐々木稔氏に厚くお礼申しあげる。

註

- 1) 松崎水穂「史跡上ノ国勝山館における鉄」「北の鉄文化シンポジウム予稿集」岩手県立博物館 1990年 P41~48
- 2) 赤沼英男「上ノ国勝山館出土鉄器・鉄塊の金属学的解析(I)」「史跡上ノ国勝山館跡XIII」上ノ国町教育委員会 P52~54
- 3) 佐々木稔氏からの私信による。
- 4) 久野雄一郎「奈良市高塚古墳(大和第6号墳)出土鉄鉢7点の金属学的調査報告」「櫻原考古学研究所論集第7」吉川弘文館 1984年
- 5) 赤沼英男、佐々木稔「番塚古墳出土鉄器の金属学的解析」「番塚古墳」九州大学文学部考古学研究室 1993年 P193~202
- 6) 赤沼英男「柳之御所跡出土鉄器・鉄滓の金属学的解析」「柳之御所跡発掘調査報告書」平泉町教育委員会 1994年 P363~384

表V-1 分析資料

資料番号(No.)	資料名	検出遺構
1	小札	K-3, M27K, 27区
2	T67 鉄釘	K-3, M-1, 14, 26J23
3	T68 矛	K-3, 26K-1-1-565
4	T70 鉄釘	
5	T71 鉄釘	
6	鉄鍋破片	K-3, M15, M10-11, 23J18
7	鉄塊	
8	No.1 鉄滓	15K21 III
9	No.2 鉄滓	15K18 III A
10	No.3 鉄滓	17J I II
11	No.4 鉄滓	16J I II (3-3)
12	No.5 鉄滓	17K14
13	No.6 鉄滓	15K19 III

注) 破線より上は鉄器資料、破線より下は鉄滓資料である。

表V-2 鉄器の分析結果

No.	資料名	L ^a	化 学 成 分 (w/t%)															
			T	Fe	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	Mo	Cr	N.M.I ^b
1	小札		63.38	0.010	0.005	0.141	—	—	0.003	0.444	0.064	0.014	—	—	—	—	—	D
2	T67 鉄釘	C	96.47	0.015	0.011	0.035	0.016	0.065	0.018	nd	0.063	0.016	0.006	0.005	0.001	0.005	—	W,F,T,M
		D	M	0.014	0.003	0.030	—	—	0.056	0.061	0.069	0.032	0.010	—	—	—	—	—
3	T68 銅	B	61.44	0.011	0.011	0.243	0.009	0.034	0.061	1.12	0.089	0.419	0.052	0.006	0.001	0.004	—	W,F,T,M
		D	M	0.014	0.001	0.027	—	—	0.008	0.034	0.002	0.014	0.002	—	—	—	—	T,F,M
4	T70 鉄釘	A	M	0.009	0.001	0.017	—	—	0.006	0.052	0.002	nd	—	—	—	—	—	W,T,F,M
		C	92.89	0.012	0.011	0.024	0.014	0.064	0.019	nd	0.066	0.015	0.008	0.005	0.003	0.004	—	—
5	T71 鉄釘	B	M	0.014	0.004	0.008	—	—	0.088	0.181	0.015	0.035	0.015	—	—	—	—	W,F,T,M
		D	M	0.015	0.004	0.015	—	—	0.065	0.176	0.010	0.030	0.011	—	—	—	—	W,F,T,M
6	鉄鋼破片		74.35	0.006	0.008	0.089	—	—	0.003	0.025	0.026	nd	0.001	—	—	—	—	—
7	鉄塊		99.67	0.01	<0.01	0.018	0.009	0.037	0.004	<0.01	<0.001	<0.002	<0.001	<0.001	0.002	<0.001	—	W,F,T,M
			C	0.01	S	0.001												

a : Lはサンプル抽出箇所を表す。

b : N.M.Iは非金属介在物組成を示す。

W:ウスタイト、F: FeO-SiO₂系化合物、T:チタン化合物、M:マトリックス

表V-3 放射化分析による鉄塊の分析結果

資料名	Na	Mg	Al	Si	S	Cl	K	Ca	Sc	Ti	V	Cr	Mn	Fe	Co	Ni	Cu	Zn	Ga	As
No.5-1	0.35	<230	7.9	<10000	<8600	<17	<7.6	<210	<0.069	<19	11	46	49	100%	320	<72	110	<32	50	7.0
No.5-2	1.9	<320	72	<18600	<9100	<23	<8.0	<220	<0.089	170	33	54	57	98%	310	<74	100	<33	48	6.2
No.6-1	0.32	<230	6.2	<8500	<9000	<21	<10	<230	<0.075	<18	5.8	47	44	100%	420	200	110	<34	51	7.9
No.6-2	2.1	<260	28	<10000	<11000	<23	<13	<270	<0.081	<21	6.1	45	45	98%	440	200	140	<37	51	8.7

注) 分析は武藏工業大学平井昭司氏による。

< : 検出限界以下の値

表V-4 鉄滓の分析結果

資料名	検出濃度	T	Fe	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	S	V	Mo	C	氯化物組成
No.1鉄滓	15K21 III	84.54	0.203	0.006	0.048	0.020	0.016	0.07	0.12	0.100	0.070	0.062	0.016	0.008	0.010	2.55	Me,T,D	
No.2	* 15K18 IIIA	11.72	0.001	0.104	0.125	0.004	0.006	0.58	23.67	0.927	6.88	0.752	0.009	0.021	0.005	—	Me,T,D	
No.3	* 17 I II	51.57	0.005	0.06	0.125	0.001	0.004	0.54	7.78	1.16	1.99	0.55	0.110	0.057	0.001	—	W,F,M	
No.4	* 16 I II(3)	50.99	0.005	0.07	0.158	0.002	0.009	1.54	5.69	0.58	1.81	0.42	0.030	0.144	0.002	—	W,F,D	
No.5	* 17E14	30.25	0.005	0.10	0.134	0.001	0.007	0.63	16.90	2.27	4.57	0.89	0.023	0.039	0.001	—	W,F,T,M,E	
No.6	* 15K19 III	58.14	0.007	0.04	0.065	0.003	0.014	0.49	5.05	0.73	1.71	0.44	0.033	0.043	0.003	—	W,M	

注1) T, Feは塩化チタン還元ニクロム酸カリウム測定法、C, Sは燃焼-赤外線吸収法、S IIは重量法、他はICP-AES法による。

注2) No.1鉄滓のメタル部分(Me)はそのほとんどがレーデブライト組織によって構成されている。C分はメタル部分の含有量である。

W:ウスタイト、F: FeO-SiO₂系もしくはFeO-MgO-SiO₂系化合物、T:チタン化合物、H: FeO-Al₂O₃系化合物。
D:ガラス質けい酸塩、M:マトリックス。

表V-5 高りんの鉄鉄を素材とする鉄鍋の例

資料名	推定年代	出土地	化 学 成 分 (w/t%)											
			T	Fe	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg
鉄鍋片	11C前後	青森県蓬田大畠遺跡	43.50	<0.001	—	—	0.112							
鉄鍋	14C前半	北海道大沢山遺跡	72.58	0.007	0.006	0.061								
鉄鍋B	*	大分県三村深水郷	79.11	0.014	nd	0.28								
鉄鍋	15C代	広島県草戸千軒町遺跡	50.65	0.009	0.041	0.430								
鉄鍋破片a	15~16C	北海道美唄山遺跡	52.2	0.003	0.030	0.29								
鉄鍋口縁	17C以前	北海道美唄山遺跡	69.38	0.014	0.005	0.128								
鉄鍋底部	*	*	78.16	0.034	0.009	0.220								
鉄鍋片	*	*	84.93	0.023	0.013	0.175								
内耳鉄鍋	17C前~中	北海道ボロモイチャシ	81.44	0.009	0.005	0.173								

注) aは大沢正己による。

VI 史跡上之国勝山館跡出土銅製品等の金属組成について

京都芸術短期大学 文化財科学研究所
助教授 内田 優秀

1) はじめに

1992年度末に近い冬、上ノ国町を訪れた際に、史跡勝山館出土銅製品を全点見る機会が与えられた。出土状況や製品の構成に、鋳造作業を伺わせるものが多數混じっていた。遺物には坩堝や羽口などが含まれており、また金属製遺物も銅錫色を呈していたので銅の熔解と鋳造作業が行われたことは間違いないと思われた。さらに銅合金の組成や作業工程の詳細を調査する必要が話し合われ、その結果、上ノ国町からこの調査の依頼を受けた。以下に調査結果を報告する。

2) 分析調査の対象遺物と方法

分析対象金属製品は史跡勝山館出土銅製品等 8 点で、遺物名は次の表VI-(1)に示す。

表VI-(1)分析対象金属製品

試料番号	試料名	出土地区等
1	るつぼ	(K・3・27K6E-168-19)
2	るつぼ	(K・17N25III-4)
3	銅末製品	(Cu12. 18Ni5II)
4	銅地金	(Cu-6. 18M1III)
5	銅 蔵	(23K16・21. 台帳No.1)
6	八双新	(Cu-3)
7	銅 滴	(17・18MNII区. フローティング土)
8	六 錫	(17M22III CuI)

このうち、試料No.4、6の2点については合金成分の定量分析を行った。分析結果および分析方法を表VI-(2)に示す。

表VI-(2)分析結果

試料	No.4	No.6	分析方法
重量	0.0639 g	0.059 g	
Cu	98.65	97.00	ICP法
Pb	0.20	0.041	AA法
Sn	0.15	0.01	ICP法
Fe	0.011	0.74	AA法
Al	<0.01	0.05	ICP法
Mn	<0.01	<0.01	ICP法

量 項 目	Ni	0.012	0.019	AA法
	As	<0.005	0.006	ICP法
	Zn	0.200	0.007	ICP法
	Si	0.02	0.19	
	Sb	0.07	0.09	ICP法
	Ti	<0.01	<0.01	ICP法
	Cr	<0.01	<0.01	ICP法
	Ag	0.26	0.25	AA法
	Au	<0.01	0.020	AA法
	P			
	Cd	<0.01	<0.01	ICP法
	Co			
	C			
	O			
	S			
	Ca	<0.01	0.02	ICP法
	Bi	0.02	<0.01	ICP法
	Na	<0.01	0.025	AA法
	K	<0.01	<0.01	AA法
合計		99.593(%)	98.638(%)	

備考

サンプルは、酸洗浄無しでそのまま秤量して、湿酸培解。

不溶物はロ過分離後、アリカリ融解して、ICP-P分析。

これ以外の遺物6点については、蛍光X線分析法による定性分析を行った。試料は、小片を遺物から切り出し、エポキシ樹脂に包埋、ニメリーピーおよびアルミナバウダーで研磨、鏡面仕上げとした。また電子顕微鏡の観察に際し、試料No.3から8までの6点はアンモニア、過酸化水素、純水(体積比1:0.5:1)の腐食液でエッチングした後観察を行った。なお試料片の採取に関しては、遺物に与える影響を最小限にすべく十分検討した上でなされた。分析結果を表VI-(3)に示す。(使用分析機器: 蛍光X線分析装置、テクノス社製、TREX640S)

全試料、電子顕微鏡による金属組織の観察では、組成像を撮影し、また合金の成分である銅や錫等の分布を観察した。結果は、写真1から24までに示す。(使用電子顕微鏡：日本電子製、JSM-5300LV。およびエネルギー分散型X線分析装置、JED-2001)

3) 結果と考察 (PL.28～31)

〈試料No.1、堀塙〉 内面に付着しているスラグの断面を、写真1から5に示す。写真1は組成像で、梢円形の気泡を含む基地と、その上に成長した角張った形あるいは長方形の生成物がみえる。そして左上部を占めている、気泡も無く長方形の生成物も乗っていない部分がみえる。写真2から、左上部や他の何箇所かの部分を構成する元素は、銅であることが解る。一方、気泡もない部分は写真3での錫、写真4の鉛、写真5の珪素の分布から珪素などを主体としたガラス質の基地の上に、錫や鉛が乗っていることが解る。これらの結果から、銅と錫は別な原材料として供給され、鋳造時に合金をつくるべく「堀塙」で合せられたことが解る。鉛は錫の方に密に分布しているが、単独で供給されたか、錫と合金の形であったかはまだ検討を要する。

〈試料No.2、堀塙〉

写真6は、堀塙内の付着物の組成像である。写真7から主成分は銅である。この最も白く、銅濃度の高いところを定性分析したが、他の金属は認められなかった。微量成分については検出限界もあり存在の有無は断定できない。金属は合金にならない部分があり、試料No.1とよく似た作業内容を示している。同倍率で、発泡した他の部分を定量分析した結果を表(4)に示す。定量値についてはZAF補正してあるが、傾向を示している程度に理解したい。銅の他に、錫や鉛が含まれていることがわかる。

〈試料No.3、銅未製品〉

写真8は100倍の組成像である。大小の黒い円が多くみられるが、これらは空隙であり鉄物巣である。組成を調べるために写真9(200倍)と、この部分の銅の分布を写真10に示す。錫は写真9では左隅等に存在する、やや白い灰色の不定形な形で、高い濃度でまとまりながら全体に散在しており、また金属のほとんどを占める銅にも含まれている。鉛も写真9で、最も白い部分として粒界に添

うように偏って存在しており、典型的な鉛青銅の組成を示すが、鉄物巣が多いことから鋳造品としては失敗作であろう。

〈試料No.4、銅地金〉

写真11に組成像(200倍)を示す。小さな巣が散在するが、デンドライトもうっすらと確認できる。鋳造組織はよい出来上がりである。写真12(750倍)は組織中に発見された異物で、成分は銅で濃度もこれを囲む部分とはほとんど差がない。形状から銅鉱石の破片であろうか。腐食は表面付近でも、ほとんど認められなかつた。

〈試料No.5、銅鏡〉

写真13は組成像(200倍)である。白色の部分は銅、明るい灰色の部分は金属の銅合金、暗い灰色は組織が腐食した部分、黒い部分は空隙部分あるいは包埋樹脂である。写真14は500倍に拡大しているが写真15に銅の分布、写真16に鉛の分布を示す。なお錫は鉛の偏析した部分と、これにつながる多孔質な部分を除き全体に均一に分布しているのが確認されている。腐食が結晶の粒界と結晶粒内部に進んでいるのが解る。

〈試料No.6、八双鉄〉

写真17に組成像(200倍)を示す。帯状の暗い灰色部分は、結晶粒を囲むように進入した腐食部分である。この箇所は、やや銅の濃度が低い。腐食の結果から、結晶粒の大きさが推定できる。結晶粒では銅が、全体に均一に分布している。今回分析した試料の中では、大きなサイズの結晶である。冷却速度が比較的遅かったのであろう。化学分析値から、純銅に近い組成は、試料No.4と非常に良く似ているし、巣の大きさや量もよく似た状態を示している。

〈試料No.7、銅滴〉

写真18に組成像(200倍)を示すが、左下隅の黒い部分は包埋樹脂で、試料の表面がでている。外側から内側に進行した亀裂が写真18では、中央部を下から上に太く延びている。幅の細い亀裂は他に数本見られる。これらの亀裂の原因は、腐食であろう。銅の分布を写真19に示したが、黒い欠落部分は亀裂と他元素が分布している箇所である。写真で示していないが、錫は暗い灰色部分、例えば写真18の中央部や下部のT字型に見える部分等に密に分布し、そして銅の部分にも溶け合った状態で均一に分布している。白色をした、球状や不

定形な塊は鉛と確認できた。試料No.3から8の6点の中では、鉛の含有率が一番高いことが表2から解るが、写真18の組成像によく現れている。

〈試料No.8、六器〉

写真20は組成像(200倍)である。左側の約1/4を占める黒い部分は、腐食が面的に進行したことを見た。亀裂は細く、左の腐食層から右の金属部に向けて伸びている。一部を拡大(500倍)した組成像が写真21である。ここでも、白色の不定形な塊は鉛であることが確認された。写真22に銅の分布を、写真23に錫の分布を示す。これからは、銅は左の腐食部では非常に濃度が低く、金属部では亀裂や鉛の存在する箇所で低濃度である。錫の分布は、腐食部で相対的に濃度が高い様に写っているが、この部分では銅の選択性が起こっており、その影響である。実際に金属部より濃度が高くなつたわけではない。写真24は、鉄の分布を観察した。写し込み文字の上に引いた白線に沿って鉄の分布を測定し、結果を波線で写真上部に表した。波が高いところは、多く含まれていることを示す。これから、鉄は腐食部に少なく金属部に多いことが解る。鉄は銅の微量成分と考えられ、精錬技術のレベル、銅鉱石の産地を考える上で手がかりとなる。

4) 結論

今回の調査で分析した試料は、6点が銅合金の鉄造品であり、2点がその調整のための坩埚であった。

試料No.4とNo.6の2点の定量分析の結果、試料No.4の地金は98.65%を鉛が占めており、他の元素の含有率をみても1%以下であり純銅と言っても良い組成である。この結果から、地金は銅地金として、合金にはなっていない形で流通し、この上ノ国にもたらされた。鉄造業者が、勝山館で行われたとして、原料を試料No.4との関連で検討すると鉛、錫、鉄、亜鉛等の微量成分含有量がこの地金と異なるから、関連はないといえる。しかし組成は銅が97%と高く、その他は1%以下である。ここから、このような組成の地金をそのまま溶解し、製品に鉄造したと考えることができよう。2試料ともに錫の含有量が約0.2%と高いのは、国産の銅鉱石を使用している可能性が窺える。試料No.4は亜鉛が0.2%と高めであり注目される。

蛍光X線分析から、相対的な傾向として次のこ

とが言える。銅は試料No.1、2のグループが3桁台であるのに対し、試料No.3から8の6点は4桁台と含有率が高い。これは試料の性質上当然である。鉛は逆に試料No.1、2が1桁高い。しかしこれは、測定箇所について、金属粒などが多く分布する部分を選択したためであり、全面積からすると、占める割合は小さい。他の大部分は表VI-(4)に示すように、造作成分に近い組成である。鉄が、この2試料で相対的に高い傾向を示すが、上述のことと表している。

勝山館では、様々な合金組成の銅製品が作られてきたことが、解っているが、今回の分析調査で純銅に近い成分の地金が供給され、この地で目的にあった合金組成にすべく錫や鉛が添加されていたという、鉄造技術の一端が解明できた。そしてこのような技術は、約100年後の京都における鋳造りの技術となつたものである。

5) 謝辞

今回このような分析調査の機会を設けてくださった上ノ国町教育委員会 松崎水龍氏、また試料調整に協力してくれた京都造形芸術大学学生 岩田好弘君、化学分析を引き受けさせていただいた鶴三宝伸鋼工業の久野一郎氏には、深く感謝する次第です。

表VI(3)蛍光X線分析の積分強度 (CPS)

試料No	Cu	Pd	Sn	Zn	Fe	Si	Ag	Ca	Ni
1	442.88	345.35	37.34	2.91	53.99	6.90	—	—	—
2	372.00	197.85	—	5.01	109.16	16.86	—	66.98	2.33
3	2027.90	21.06	8.36	—	9.34	—	—	—	1.94
4	3087.35	6.51	—	3.42	7.94	—	—	—	—
5	2667.46	12.96	—	3.22	2.50	—	—	13.14	12.96
6	4521.14	11.59	—	—	3.44	—	4.8	—	—
7	2014.50	65.52	9.22	3.11	13.55	—	—	—	—
8	2077.09	8.17	14.05	—	11.90	—	—	—	2.91

表VI(4)坩埚の発泡部分

元素	重量%
Ai	23.89
Si	62.31
K	3.22
Ca	0.94
Fe	3.68
Cu	2.65
Sn	2.85
Pb	0.45

VII まとめ

今年度の調査によって、平成2年度の調査で見つかった旧道跡が第二平坦面中段まで続いており、その左右に溝で囲まれた建物跡の配されることが明らかになった。

この旧道跡の北西半、平成4年度、3年度の調査区との間ににおける遺構配置や動線、特に平成3年度の調査で見つかった北東の「客殿空間」へのアプローチの解明が今年度調査の主眼であった。

ある時期に大きな配置変えの行われている可能性が推されたが、基本的に北西—南東方向を長軸とする長方形の溝で囲まれた区画・地割の中に、3×5間程度の掘立柱の建物が立ち、周辺に堅穴建物が配される空間となるようである。これに直交する軸線の柱の建物が組み合うようであるが、前後の時間差も考慮して検討することが残されている。

「客殿空間」への正確なアプローチはまだ明らかになし得ないが、この空間がかなり嚴重に他と区別されていることが明らかとなった。又、そこへの出入りの場所と推される部分を柱間寸法の違いからほぼ確定することができた。

旧道跡の両側に側溝が付けられているが、場所によって新旧が交差することもあるが、その対応の曖昧な部分を生じた。この為道巾の正確な数値を示し得なかった。

この旧道跡を跨ぐように4個の大型柱穴が見つかったが、一つには先の溝の対応関係の不明瞭さがあつて、四個一組の遺構と確定するにはいたらなかった。一般的柱穴の掘り方程もある一辺30cm程の柱痕跡を持つ柱穴がどのような遺構を構成するのか、類例も含め検討しなければならない。

この旧道跡部分は現在昭和45年に町道として設置整備された自然遊歩道が通路として使用されているが、それ以前は、細い畠道となっていた（概報Ⅲ P.L. 9-3）。そしてその前は江戸時代を通じ御代参道路として、毎年1月、藩主代理の松前藩士が、館神八幡宮に参詣し、夷王山神社（医王山藥師堂）を拝した参道であり、寛政元年菅江真澄が、町人の案内を得て、「これは何かしどの館、家居のあと、これはたれとのすみかのあと」と「草に埋もれたるを、かいわけてをし」えられた

がら夷王山山頂まで登った「たかくさの中をかいわくる道」でもあった（えみしのさき 菅江真澄全集五）

旧道跡の左右に並行する幕末・明治の溝としたものは、第16代松前家当主昌広が天保12年領内巡視の折、祖廟廬をしているが、これに先立ち同11年江差奉行が下見をし、墓所（現荒神堂跡）などの整備補修したとの記録があり、この時の改修により道巾が広くとられ、左右に溝の掘り上げ土が壁上に積まれたのかも知れない（上ノ田村史）。なお安政3年には17代崇広の祖廟廬も行われている。いずれにしても、旧道跡の調査ではこの改修工事以前、館廬棄後の江戸時代の道跡も確認できなかった。

旧道跡、東先端部の第52号堅建物跡がこの道の構築によって廃棄・削平されていること、その堅穴覆土下部から、壁に密着して出土した越前播鉢は、勝山館の中では出土例の少ないI、II類（概報V）としているものであった。15世紀末～16世紀初の年代を想定したところであり、この旧道跡、これと同じく正面空窓、縦列、旧道跡左右の地割等の今見るように顕著な形成は16世紀の早い段階迄に成立したとの従前からの想定（概報Ⅲ）に大きな矛盾を生じないとできそうである。

土壤23とした遺物の集中箇所から16世紀初めくらいまでの陶磁器を伴って鉢頭、中柄、鉢頭？（組み合わせ式か或は彌形製品か）等が出土した。ほぼ完形の鉢頭は、先年遺物廃棄場所（貝塚一ゴミ捨場）から出土した一点とともに館内出土の中柄の中にネット関係を有するものがあり、鉢頭にみられる使用痕や、補修孔などから館内の生産用具として定着していたものと推した。又両者は、その系譜を擦文時代の鉢頭に求め得るものであり、北海道南部日本海側という地域での発達段階を知る指標となる特徴を有するものとした。そして又、この両者は、鉢頭が形式変遷を遂げ近世アイヌのキテとして成立する一連の流れの中に矛盾なく位置づけられるものであろうとした。

長い間「非和人社会的なもの」として勝山館跡出土遺物の中では異質なものとして位置づけてきた骨角器類について、鉢頭と中柄の一部という限

られた器種についてではあるが、北海道の擦文時代から近世アイヌ社会へ連鎖するもの一つとして示し得たかと思うところである。

土墳23とした浅い凹地の性格解明も課題とすべきところである。鉢座とは別に界線の外側に2個の穿孔をして懸け下げて用いられた鏡は、本州に見られる御正体としてのそれなのか、後のアイヌ社会に見られる例に連なっていくものなのかは、今少し他の遺物等の精査を経ることとし、宇田川洋氏の指摘するような利用の有無を含めて土墳23という凹地の検討を行うこととしたい。

勝山館跡出土の金属遺物の分析結果を本概報に掲載することができた。

赤沼英男氏には先に鉄製品の分析をお願いしその結果を概報Ⅵに掲載させていただいた。その報告では重さ5.5kgの半月形の鉄塊がかなり良質の鋼塊であること、出土遺物中にこの鋼塊をから製造された鉄製品のあることが明らかにされた。それとともにこの鋼塊の出自の解明が課題となつた。その為更に館内出土鉄滓の中から幾つかを選び再度の分析をお願いしその結果を掲載したのが本概報のV(2)である。

赤沼氏の報告によれば、鋼塊そのものは「驚くべきほど純度で」、「相当の大規模な精錬によって得られた鋼塊」であり、これは越外からの移入品、流通品であるといふ。他方鉄滓の分析結果から、館内銑鉄を素材にしたべつな鋼の精錬（鋼の製造）の行われていることが明らかとなつた。又分析した製品の中にはこれら二種類の鋼とは成分の異なるものが見られた。更に鉄器の製作（鍛造作業）に伴う鉄滓の存在も明らかになった。

勝山館の中では流通品として鋼塊入手するとともに、素材としての銑鉄入手して館内で鋼を製造し、それらをもとに鉄製品を加工・製作するが、それとは別に鉄器、鉄製品として入手したものも存在していたものと推される。しかし、目下のところ、館内で製造された鋼から製作されたことを示す鉄器、鉄製品の存在は分析的にはまだ証明されていない。これは、鉄器・鉄製品の分析資料が8,000点余の出土品のほんの一部であることが主因と推されるもので、今後分析を重ねることによって解明されるものと思われる。それによって勝山館における鉄器・鉄製品の出自や館内での行程はより明らかにされていくものと思われる。

又、今回の分析結果は、昭和59年、大澤正己氏にお願いした鉄器・鉄滓の分析の結果として、同氏から、館内、外からの素材と館内の鉄鍋破片を素材とする精錬鍛冶、鍛練鍛冶が行われたことを示す鉱石系精錬滓、鉱石・砂鉄系の鍛冶滓の存在とその作業復元を頂戴したのであるが（概報VI）、10年を経て再度ほぼ同様のことが確かめられたということであろう。その間出土鉄製品の質・量ともに増大し、新たに鋼塊の流通などの問題を提起する資料も追加されてきた。今後はこれに加えて鋳造品であつて鉄鍋類の出自等が解明いただけないものかと思うところである。

銅鉄造跡出土品の分析を、長年勝山館跡出土の金属製品や、木製品の保存処理作業に当町文化財保護審議会特別委員としてご指導を頂戴して來た京都芸術短期大学助教授 内田俊秀先生にお願いし、結果を掲載することができた。

純度の高い銅の地金が流通品として存在し、勝山館にもたらされている。鉄造にあたっては、地金を溶解するとともに、錫や鉛を添加して目的とする製品に合った成分組成の合金とし、製品をつくりだしているというものである。

こうした鉄造技術は京都で発見された江戸時代の鏡作り師の合金技術の一部に関連が見られるという。これは近世京都の鏡作り師類似の技術は既に16世紀の初め頃に確立していたことが勝山館跡の鉄造遺構出土品の分析結果で明らかとなつたということなのであろう。そして又、そうした技術が蝦夷カ島にまで到達する程に普遍化していたことを示すということなのであろうか。

この鉄造技術が館の中の技術であるのか館の中に移動して来た技術者的所有に帰する技術であるのかは、地金や、羽口の移動の背景とも関わる重要なことである。

分析を依頼した資料のNo1、5以外の6点は前年度の調査で検出した、鍛冶・鉄造作業跡とした一画からの一括出土品の一部である（概報Ⅳ）。この地区的焼土層と被熱陶磁器類から、焼土層の形成された年代を美濃大窯Ⅰ期の製品の窯されて間もない時期、16世紀の初め頃と推定している。この陶磁器等との時間的前後関係はまだ明らかにしないが、殆んど同一のその焼土層を含む砂利層中ないしその上面に、銅製品や銅鉄造関連遺物と更に317点の釘、149点の小札等が一括出土して

いる。銅製品が甲冑金物ばかりであり、小札がかなり多いことから、この一画をこうした武具の調整ないしは補修の作業場跡かとも推したところである。この一画には後世の搅乱跡を除くと、据立柱建物跡やその他の遺構構築に伴う、砂利敷き層の搅乱や柱穴その他の遺構を明瞭に確認できなかったが、このことは又この一画が他の目的で使用されることの少なかった地区であったとも推される。この地区的熱変を受けていない陶磁器を十分に検討していない現状では推測でしかないが、熱変の陶磁器の時期がその初期であり、それは火災ではなかったのだろうか。砂利層は防湿の為に最初に敷かれたものである為、火災後の整理、片付け時にも除去されることはなく、不充分な清掃作業の結果、地金や羽口が、周辺の砂利層中に埋まってしまったまま残存してしまったことは推されないのである。砂利敷き後、乾燥のための焼土も解し得るが、炭化材が残るなど可能性は少ないと想われる。この一画はその後も空き地であったとするよりは、継続して同じ様に使用されたが、緊急事態等の発生はなく、比較的片づけがよく行われたため、その後の痕跡が残らなかったのではないか。〔概報第6～8図他〕

この空間がこの推測のように長期に亘って確保されているとしたならば、この銅鋳造の技術が館内の技術である可能性が高くなることになろう。

銅の精錬技術と銅の鋳造技術は性格が異なるのではあろうが、これら技術者が到来するのを常に館内で待ちわびるだけでもないのであろう。殊に鉄の技術は、戦闘という生死に直結する事態を背景に抱えるだけに自前の必要があろう。そして又、それ故に生産活動も含めた交易等に勝山館の鉄が有効に働き、勝山館の優位性を強めた可能性は何度か述べてきたところである。その内容迄は筆者の理解の及ばないところであるが銅物師の一部が原料鉄を売買する鉄商人となり、銅物師や鍛冶の諸国への定着化の見られるという中世後期（網野善彦 中世の鉄器生産と流通 採鉱と冶金）の様相の蝦夷島への波及した姿とも推されるところである。

また内田氏の談によると銅地金の中に含まれる異物は鉱脈掘り出しの初めの段階に多く含まれる

成分のようだという。銀が含まれていることから銀鉱に含まれた銅を製錬した所産である可能性も考えられるという。いずれにしてもこの銅地金は当時の山元製錬としては最高の純度のものとのことである。

銀山開発は16世紀中頃から爆発的に増大する（小栗田淳1973）が、鉱脈の上層からのとり出しを発表するこの資料は、こうした、採鉱まもない鉱山からの出自とも想像できそうである。

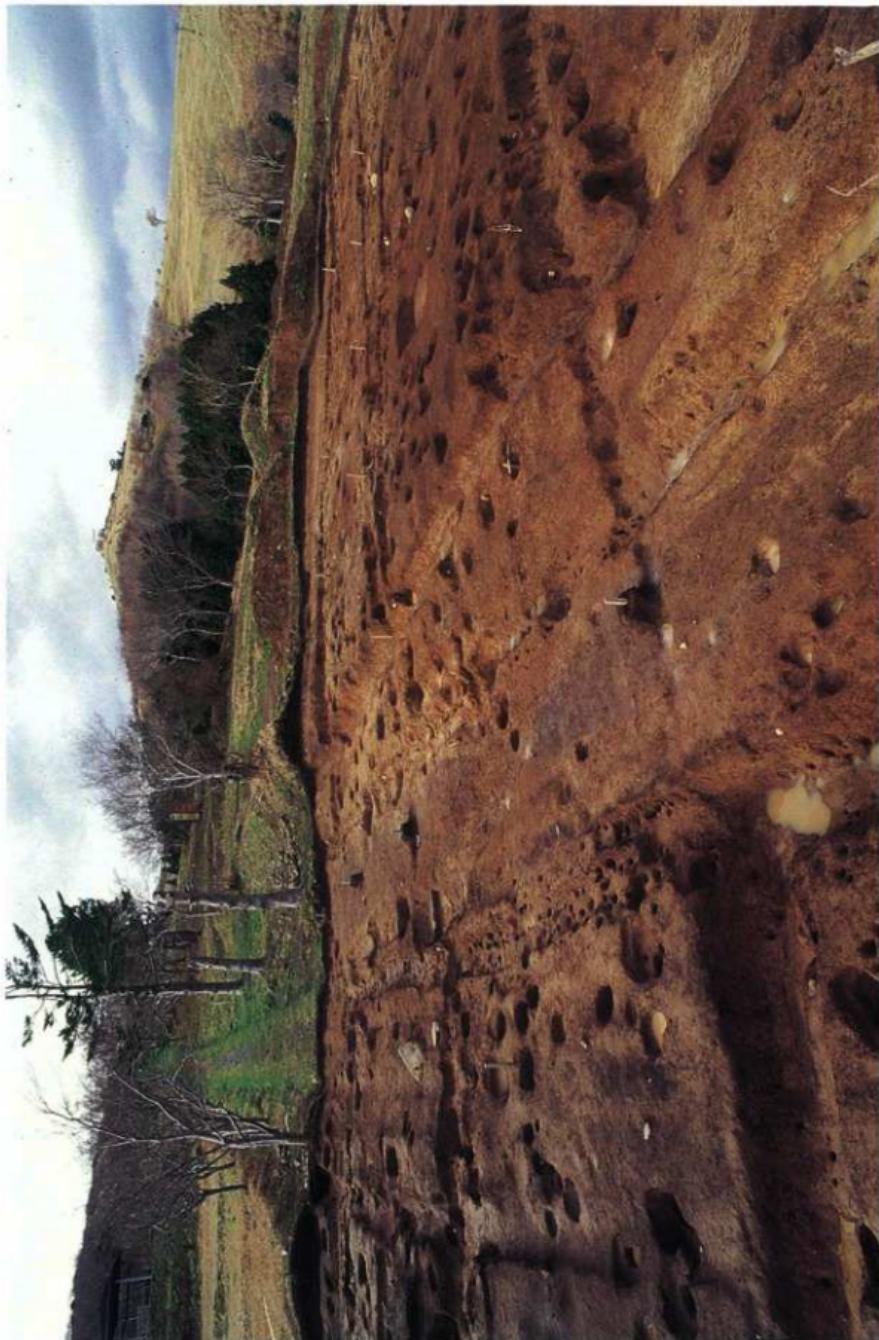
最後になったが、大変お忙しい中、鉄製品・銅製品の分析をお引き受け下さった赤沼英男・平井昭司 内田俊秀の諸先生に御礼を申し上げたい。殊に鉄製品について、今回の一連の分析にいたる道をつけて下さった、前国立歴史民族博物館教授福田豊彦先生、更には同館の吉岡康暢、田口勇、齊藤努 藤尾真一郎の諸先生にこの場をお借りして感謝申し上げたい。それにもまして勝山館の調査がまだ始まったばかりで、その存在すら知られていない時に、快く鉄製品等の分析をお引き受け下さってその先駆をつけるとともに、「中世鍛冶工房跡の作業形態を検討する上で〔概報VI〕」の勝山館跡の重要性をご指摘され、今日の成果を導いて下さった大澤正己氏に改めて敬意と感謝を申し上げることとしたい。

旧道路の調査の結果、その南東部平坦面一帯にも建物跡の広がっていることが予想されることとなつた。平成6年度は北海道教育委員会文化課木村尚俊主査の強いおすすめを受けて、この旧道路北東平坦面の遺構確認調査に手がつけられる予定である。平成6年3月「この数年は遺構確認調査に主力をおき、勝山館の遺構の概要をえ、その後に整備を検討する」との方向が、文化庁加藤調査官から示された。

平成5年度、洲崎館跡が新たに史跡に指定され花沢・勝山両館と併せ、「上之国館跡・花澤館跡・洲崎館跡・勝山館跡」と一本化されることとなつた。更に広い視点にたった分析も必要となろう。浅学菲才の筆者等には増え重くかかる業務ではあるが、なお一層の努力を図りたく思う。諸先生 諸先輩の皆様には変わらぬご指導をお願い申し上げるものである。

図 版

PL. 1 造構検出状況(旧道路他一北東から)

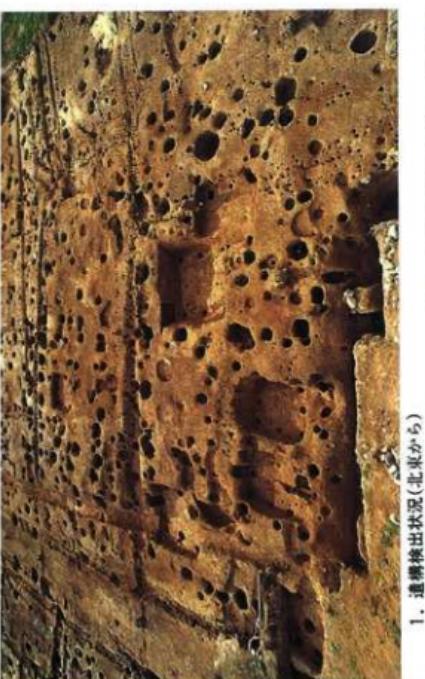




1. 造構検出状況(北東から)



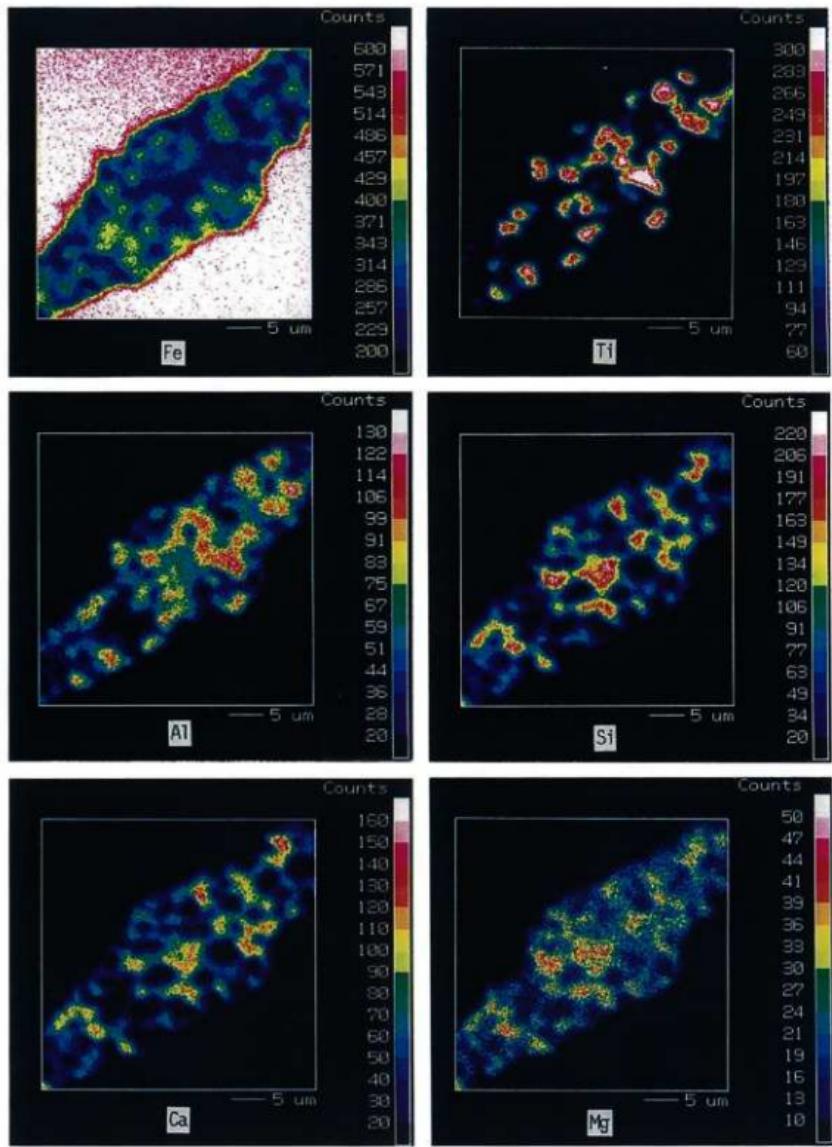
3. 考古出土品



2. 横列踏査・土層堆積状況



4. 考古出土品



PL.3 T-68鉄に見いだされた非金属介在物のEPMAによる元素濃度分布のカラーマップ



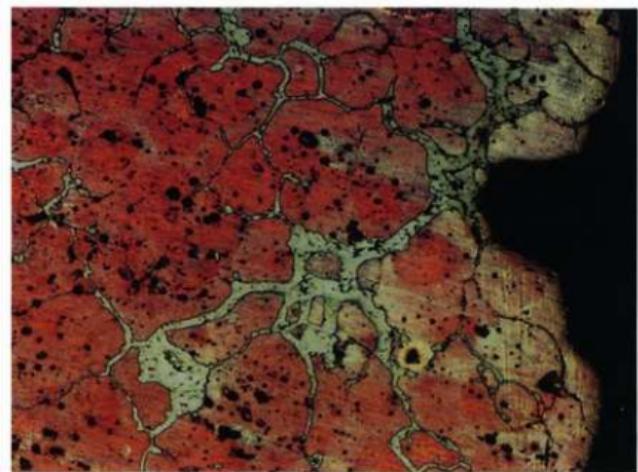
3. 羽口・るっぽ・鋳型他(左るっぽ4点は別地点)



2. 銅津・銅滴・未製品



1. 銅地金・銅製品

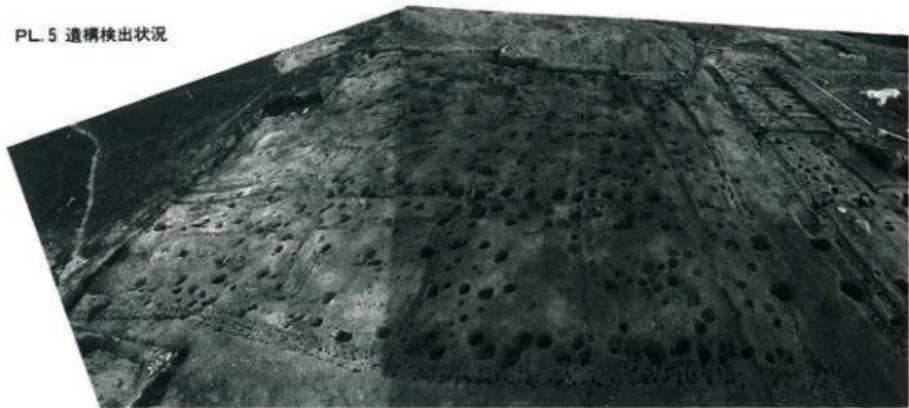


5. 試料No.6 八双鉄の金属組織(25倍)



4. 試料No.1 増殖付着金属(25倍)

PL. 5 造構検出状況



1. 造構検出状況（南西から）

2. 造構検出状況（北東から）



3. 造構検出状況（南東から）



PL. 6 造磚検出状況

1. 造磚検出状況(第1、2、10~12号 造物跡他—南西から)



2. 造磚検出状況(第4~12号 造物跡他—南西から)

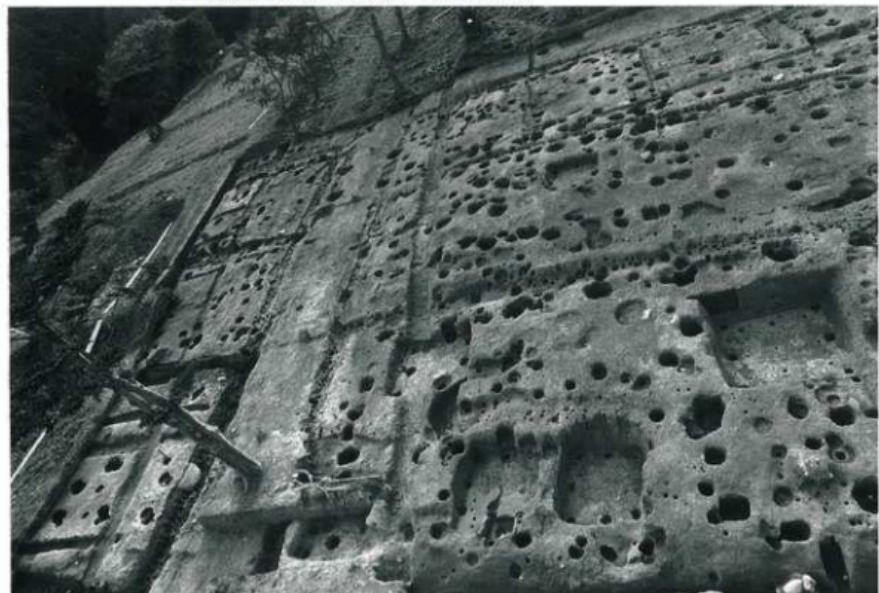


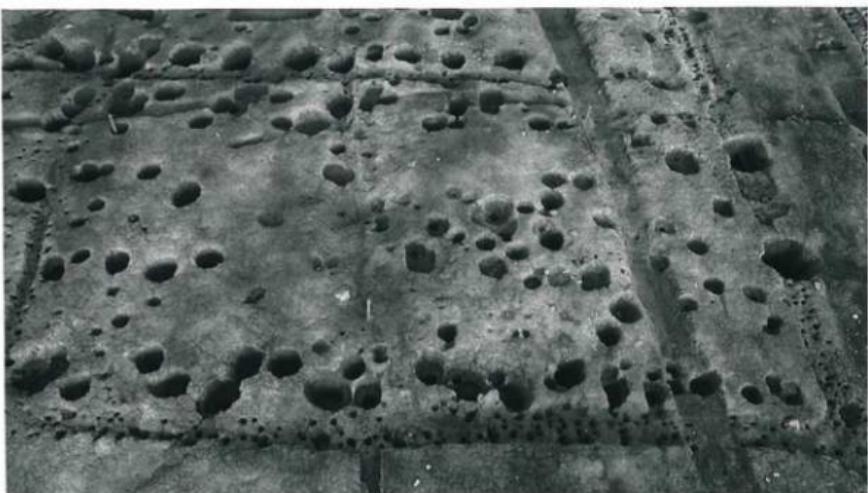
PL. 7 遺構検出状況

1. 遺構検出状況(第1~3、10~12号建物跡、柵列跡他—北東から)



2. 遺構検出状況(旧道路跡、第3~10号建物跡他)

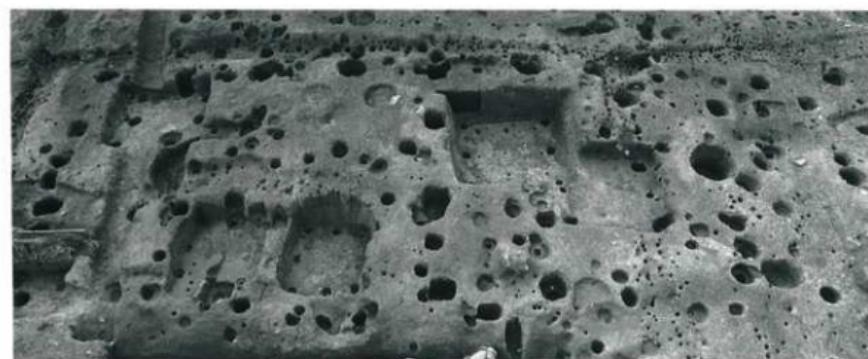




1. 第3～5号建物跡（南西から）

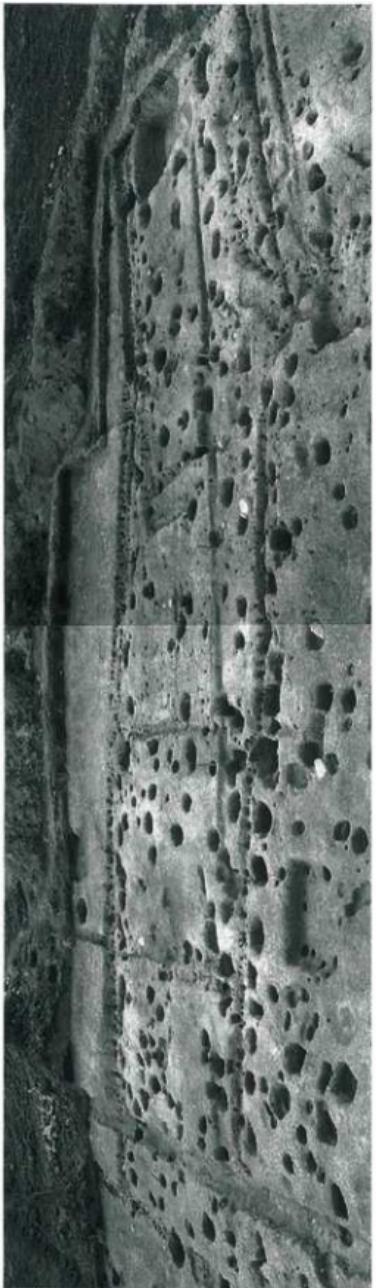


2. 第6号建物跡、第3号竪穴建物跡（北東から）



3. 第8・9号建物跡、第1・49～51・53号竪穴建物跡（北東から）

1. 第1~5号遺物跡・溝11・12・1・12・2・13・18~22(北東から)



2. 溝18-1・炭化材出土状況(南西から)



3. 溝18-1・炭化材出土状況(南から)



4. 溝11-21・22(北西から)



1. 第49号竪穴建物跡(南東から)



3. 第50号竪穴建物跡(北東から)



2. 第49号竪穴建物跡土層堆積(北東から)



4. 第50号竪穴建物跡土層堆積(北東から)



6. 第49号竪穴建物跡炭化物集中地点土層堆積(北東から)



5. 第49・50号竪穴建物跡土層堆積(南東から)



7. 土壌15 土層堆積(北東から)

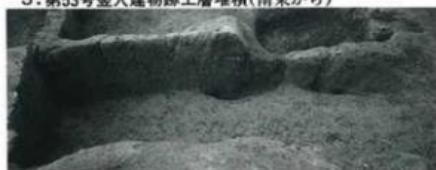


8. 土壌5 遺物出土状況(馬齒一北東から)

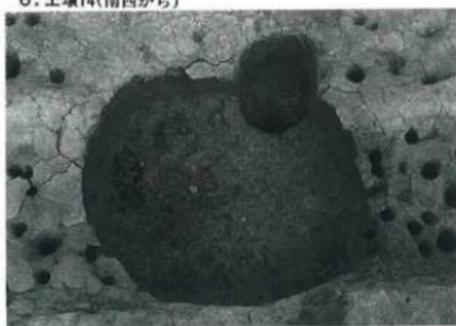




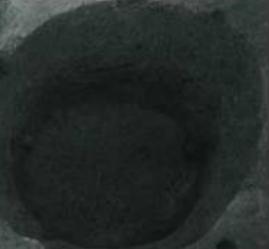
3. 第53号竪穴建物跡土層堆積(南東から)



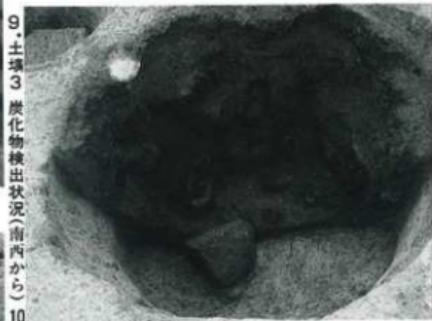
6. 土壌14(南西から)



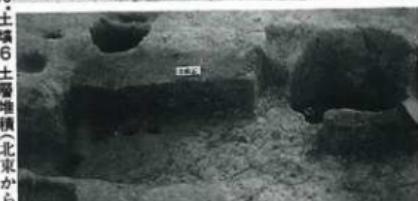
7. 土壌14 土層堆積(南東から)



8. 土壌3(南西から)



9. 土壌3 塵化物検出状況(南西から) 10 土壌6 土層堆積(北東から)



2. 第55号竪穴建物跡(北西から)



1. 第55号竪穴建物跡、土壤20・22・23(北西から)



4. 第55号竪穴建物跡(南西から)



3. 第55号竪穴建物跡出入口部、擂鉢出土状況
(南西から)



5. 土壌23 遺物出土状況(南西から 石端は鉢底)



6. 土壌23 鋸頭出土状況
(北西から)

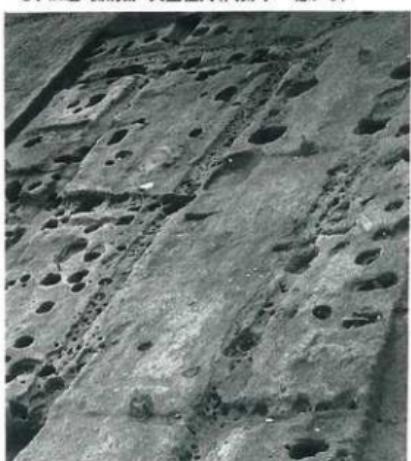
1. 旧道・側溝跡・大型柱穴(門跡?—南西から)



2. 旧道側構跡(清3) 土層堆積(北東から)



3. 旧道・側溝跡・大型柱穴(門跡?—北から)



4. 旧道路・土層堆積(北東から)





1. 大型柱穴(門跡? - 南西から)



2. P1002 上部土層堆積(左は青磁焼付 - 南東から)



3. P1002 (柱軸跡下部に措体 - 南東から)



1. 大型柱穴(門跡? - 南西から)



4. P1002 措体出土状況(南東から)

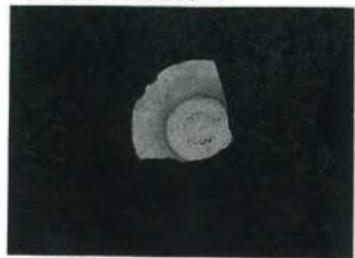
6. P1001 土層堆積(南東から)

5. P1004 検出状況(南東から)

4・遺物出土状況(志野Ⅲ)



5. 遺物出土状況(美濃Ⅲ)



2. 遺物出土状況(美濃・香取)



3. 遺物出土状況(柱根)

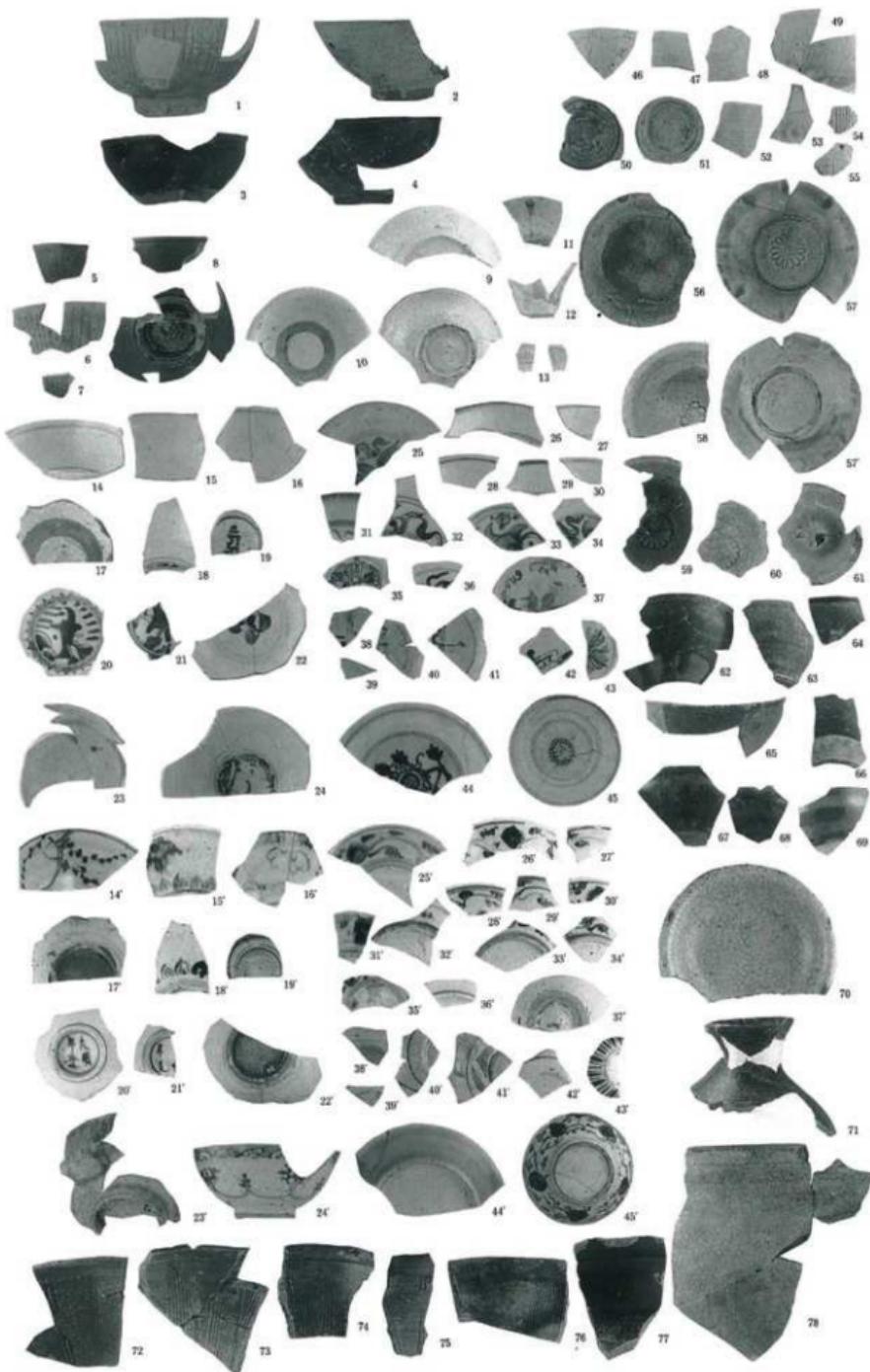


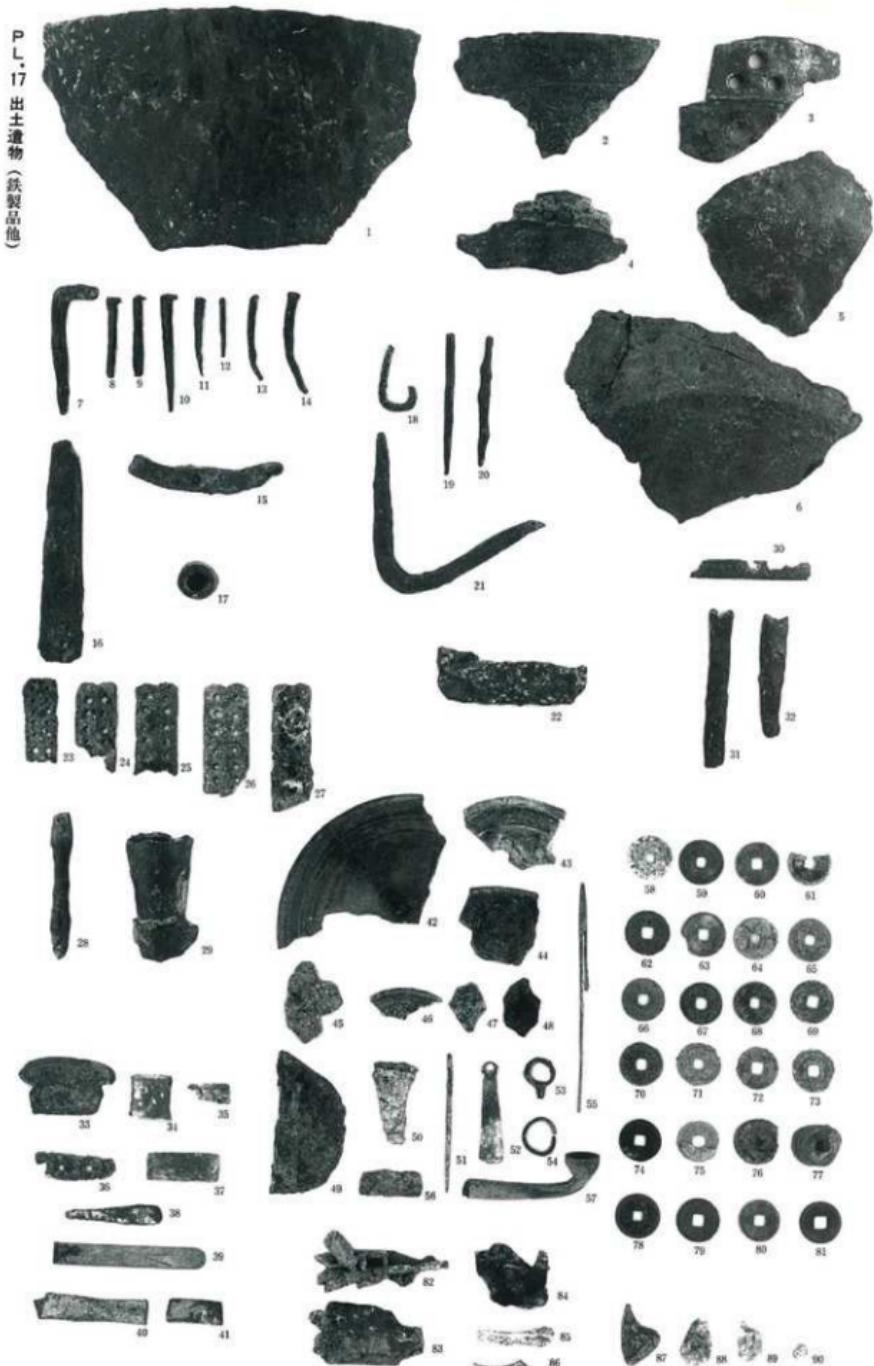
8. 作業風景(西から)



9. 旧道路埋め戻し状況(北東から)













銅製品



漆器(表・裏)



鐵製品



漆器(表・裏)



木製品



漆器



漆器

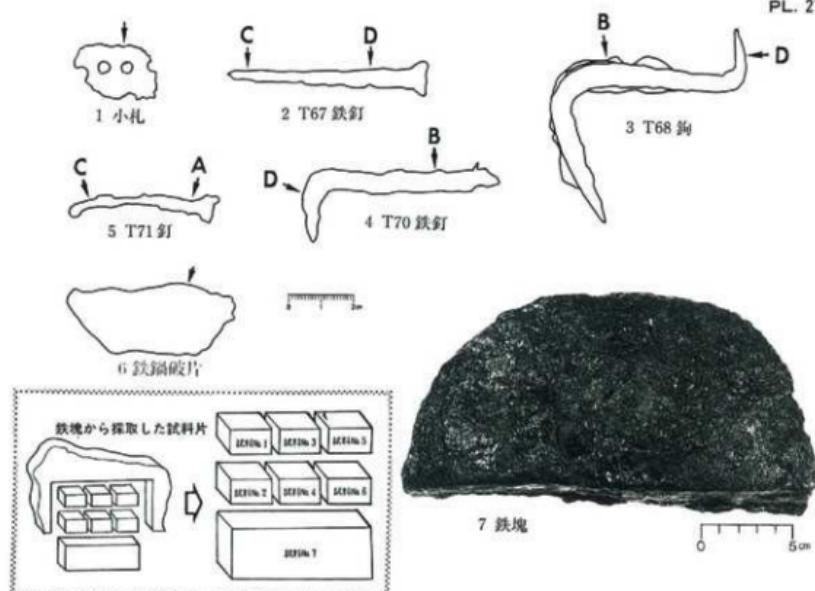


図1 試料鐵器の外観(矢印は分析試料採取位置を表す)

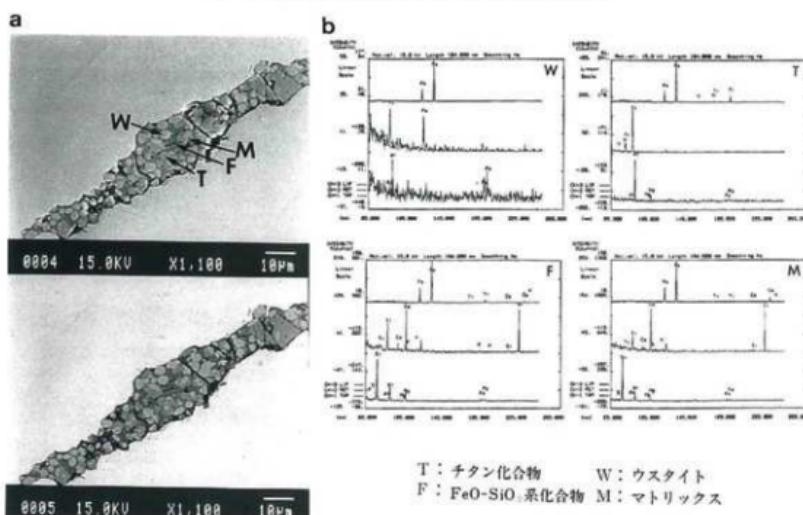
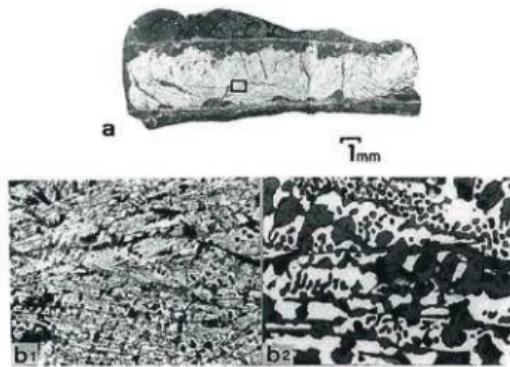
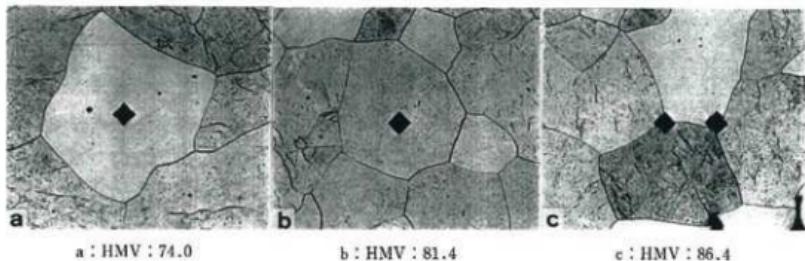


図2 T68鉤から採取した試料片の健全なメタル部分に見いだされた非金属介在物のEPMAによる2次電子像と反射電子像、定性分析結果



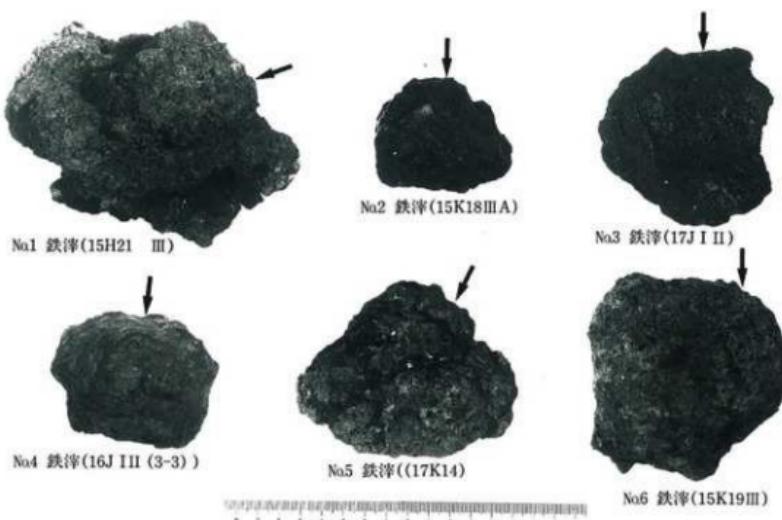
a : マクロ組織 b₁・b₂ : a の枠で囲んだ部分のミクロ組織

図3 鉄錫破片のマクロ組織およびミクロ組織



マイクロビッカース硬度(HMV)の測定位置はミクロ組織中の黒点部分である

図4 鉄塊から採取した試料片のナイタールによるミクロエッチング組織



矢印は試料切断位置を示す

図5 鉄滓の外観

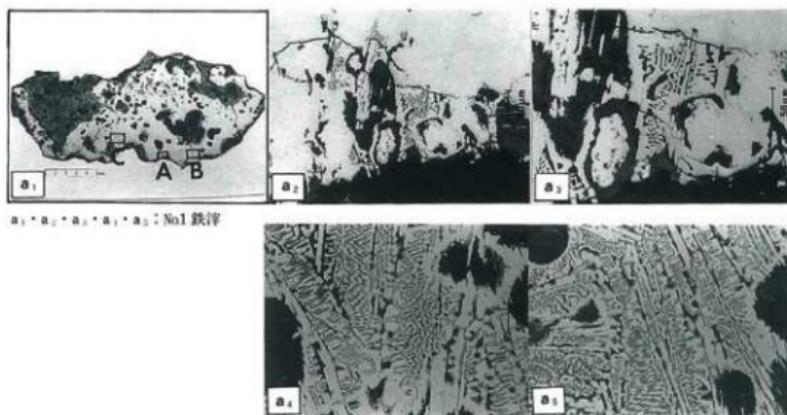


図6 鉄滓から採取した試料片のマクロ組織およびミクロ組織（その1）

(マクロ組織の枠で囲んだ部分はミクロ組織観察位置を表す)

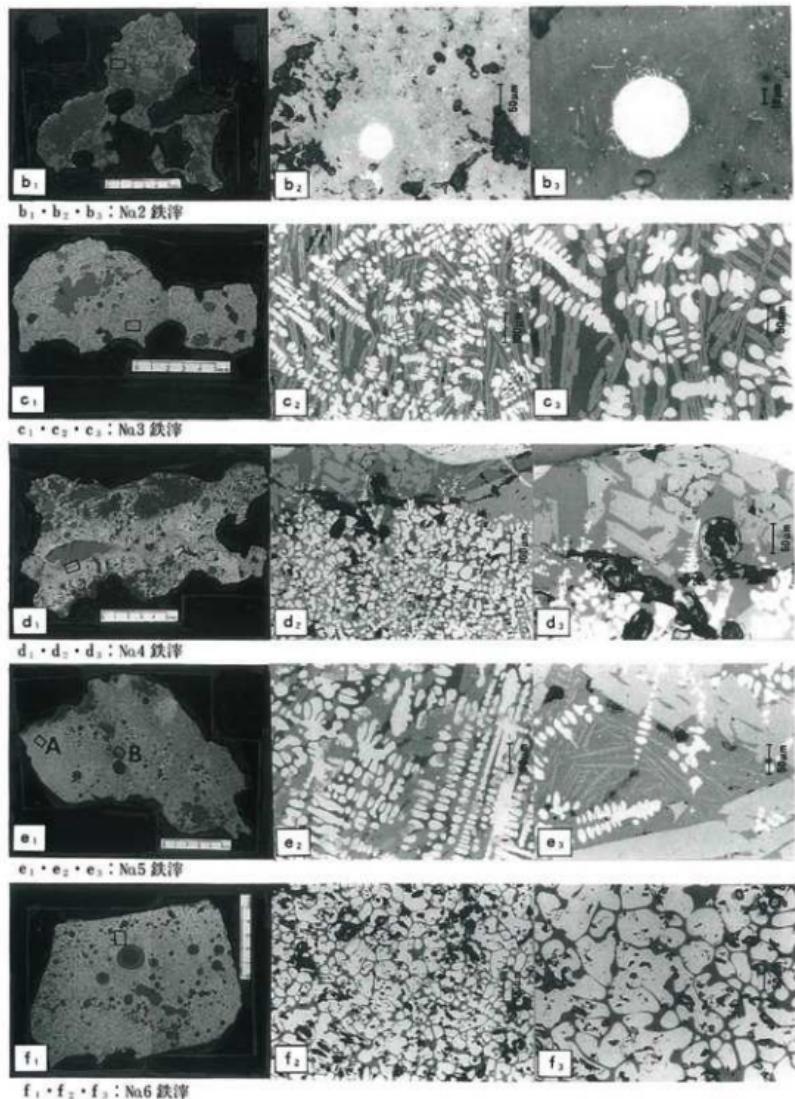


図6 鉄滓から採取した試料片のマクロ組織およびミクロ組織（その2）
(マクロ組織の枠で囲んだ部分はミクロ組織観察位置を表す)

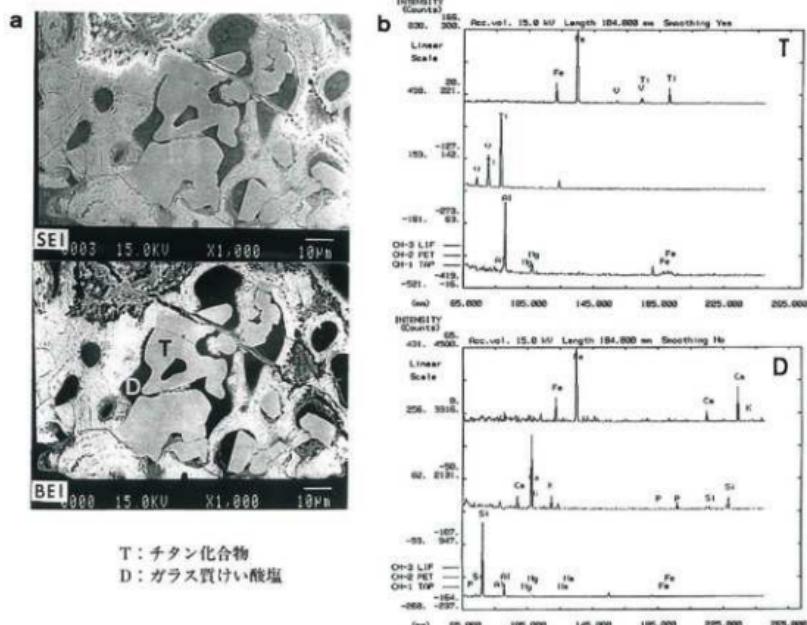
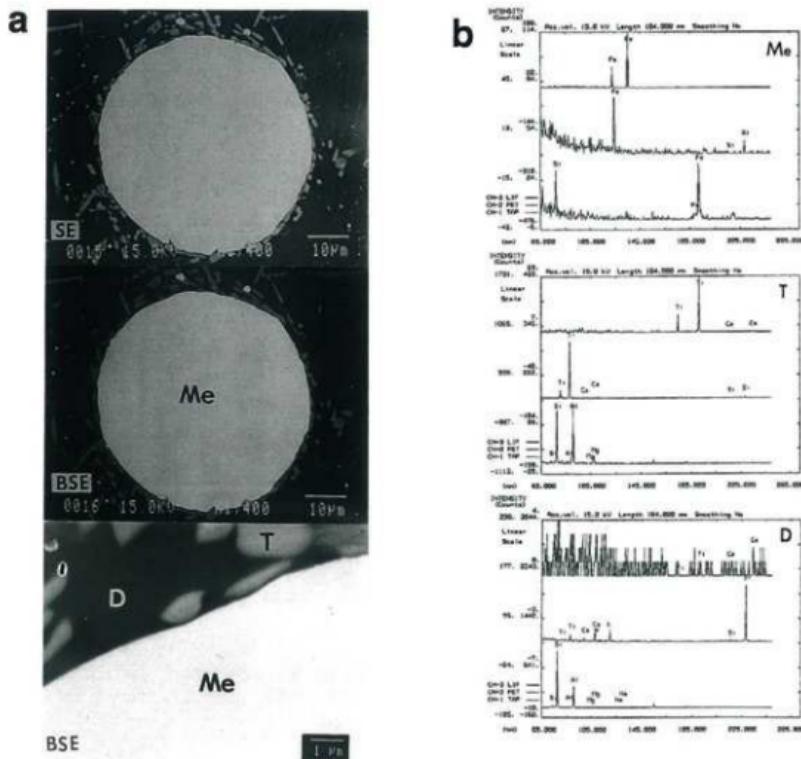
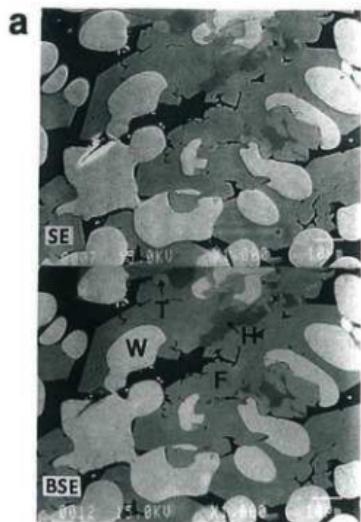


図7 資料No.1 鉄滓のメタル部分に付着した鉄滓部分のEPMA
による2次電子像と反射電子像、定性分析結果



T:チタン酸化物
D:ガラス質けい酸塩
Me:鉄粒

図8 No.2 鉄滓のEPMAによる2次電子像と反射電子像、定性分析結果



W : ウスタイト
F : FeO-MgO-SiO₂系化合物
T : チタン化合物
H : FeO-Al₂O₃系化合物

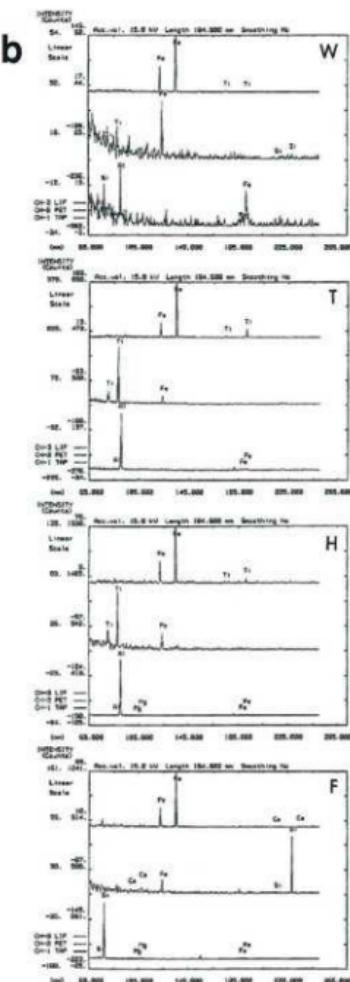
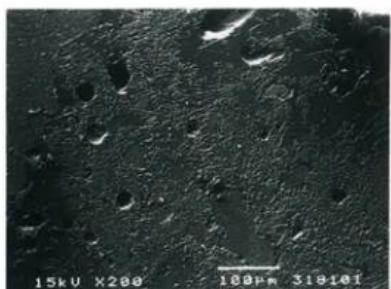


図9 Na5 鉄津のEPMAによる2次電子像と反射電子像、定性分析結果

PL. 28 銅製品の金属組織と各元素の分布①(試料No1~2)



1. 試料No.1 組成像



2. 試料No.1 銅の分布



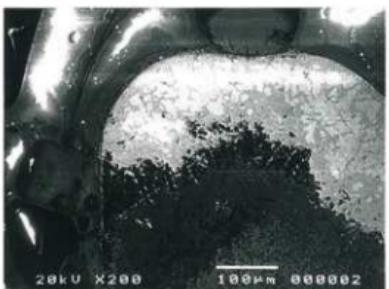
3. 試料No.1 锌の分布



4. 試料No.1 鉛の分布

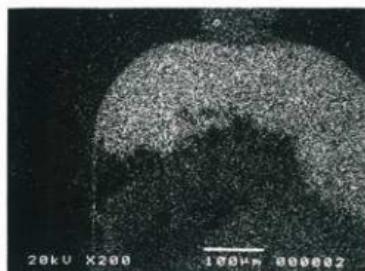


5. 試料No.1 硅素の分布

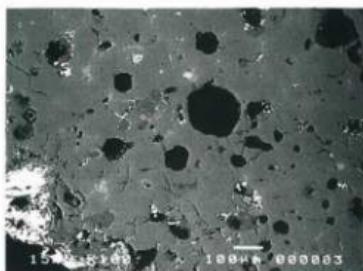


6. 試料No.2 組成像

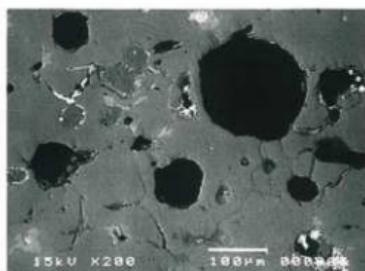
PL-29 銅製品の金属組織と各元素の分布②(試料No2~4)



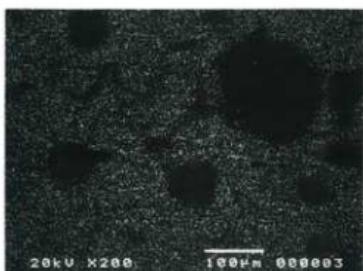
7. 試料No2 銅の分布



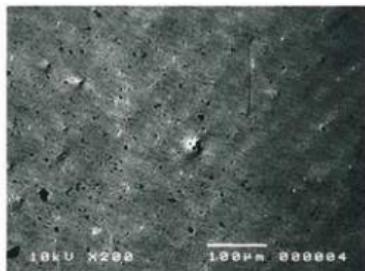
8. 試料No3 組成像



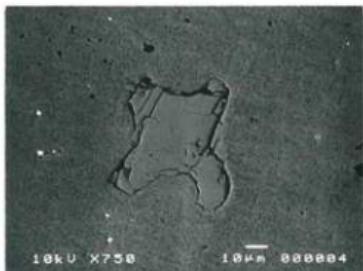
9. 試料No3 組成像



10. 試料No3 銅の分布

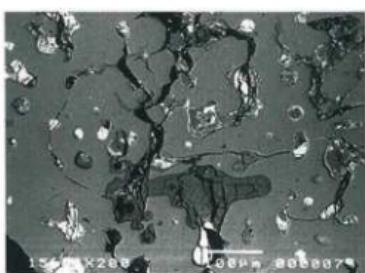
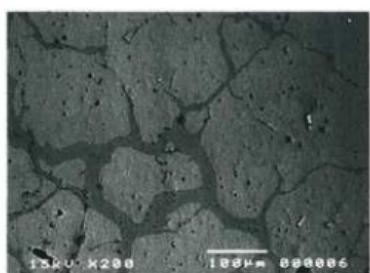
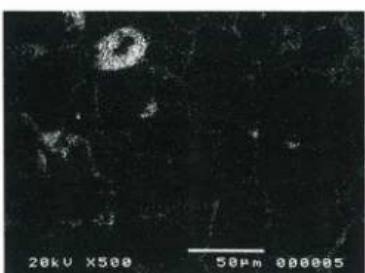
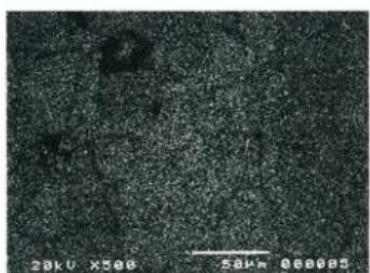
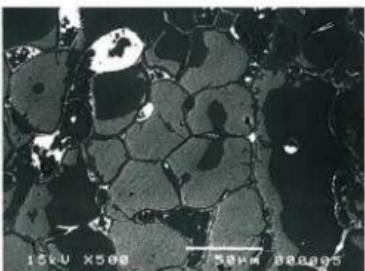
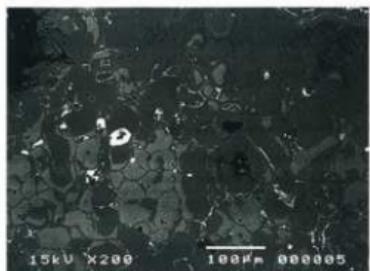


11. 試料No4 組成像



12. 試料No4 金属中の異物

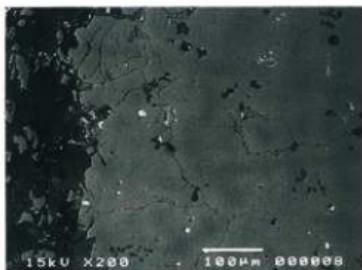
PL-30 銅製品の金属組織と各元素の分布③(試料No5~7)



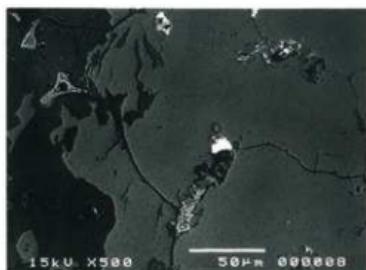
PL.31. 銅製品の金属組織と各元素の分布④(試料No.7~8)



19. 試料No.7 銅の分布



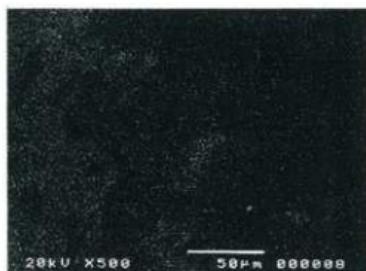
20. 試料No.8 組成像



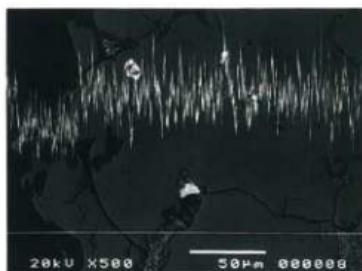
21. 試料No.8 組成像



22. 試料No.8 銅の分布



23. 試料No.8 锌の分布



24. 試料No.8 鉄の線分析

史跡 上ノ国勝山館跡 XV

—平成5年度発掘調査環境整備事業概報—

発行 上ノ国町教育委員会

北海道桧山郡上ノ国町大留100

印刷 平成6年3月25日

発行 平成6年3月31日

印刷所 北海道機関紙印刷所

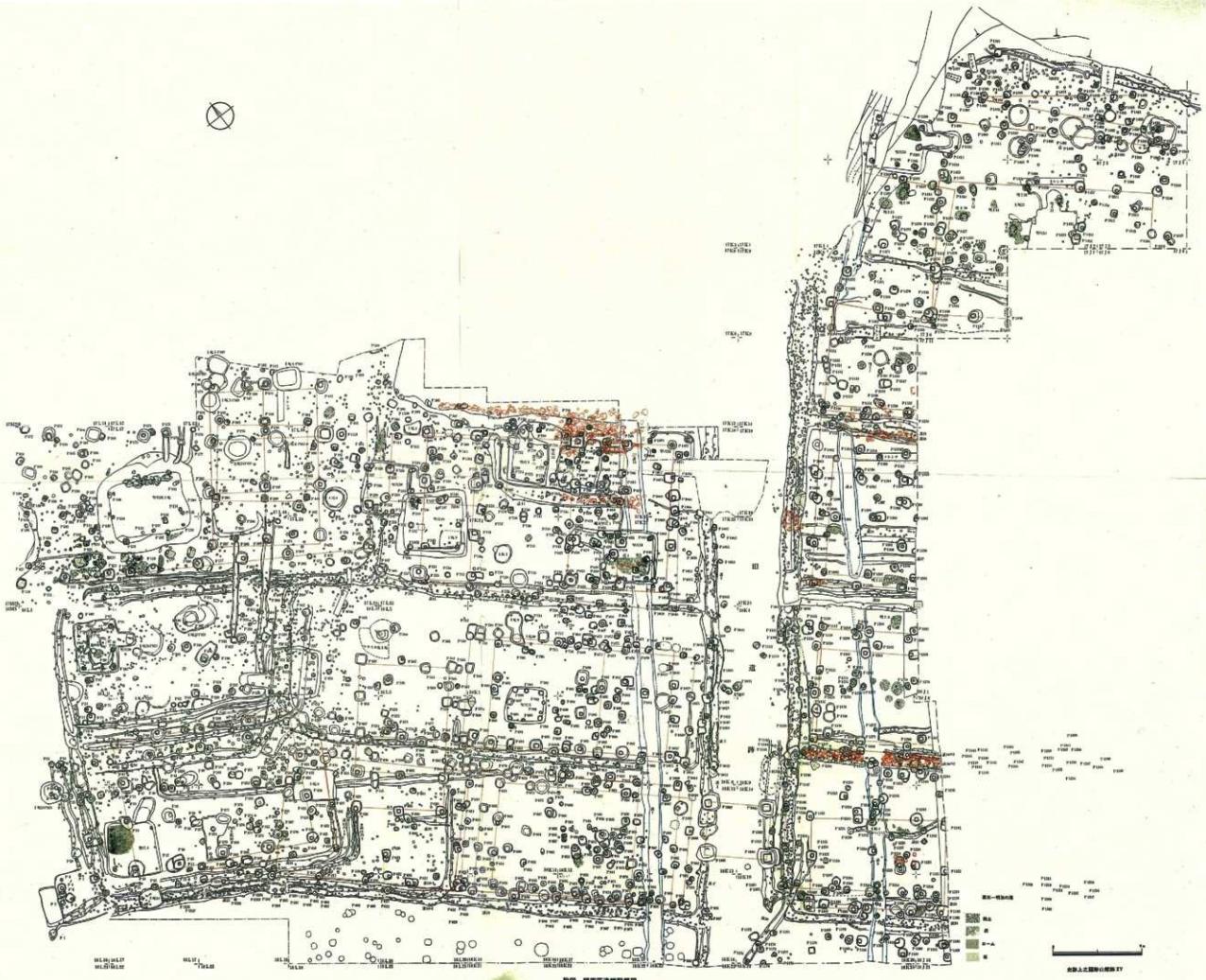


图10 西夏都城遗址